576
53

0040080000

0040080-000

５７６－５３

奥丹後震災救護誌

日本赤十字社京都支部・編

日本赤十字社京都支部

昭和３

AGI

奥丹後震災救護誌

奥丹後震災救護誌

皇后陛下御令旨

（朝香宮允子内親王御差遣）

日本赤十字社第三十五回通常總會ヲ開催スルニ方リ諸員ニ告ク。

本社ノ基礎ハ寔ク固ク、其事績亦益顯揚スルヲ得タリ。殊ニ昨秋ニ於テ第二回東洋赤十字會議ヲ主催シ、參列各國ト ノ間聯盟ヲ鞏固ナラシメ之カ目的ヲ達成セルアリ。又今春丹後地方ノ震災ニ際シ、時宜ヲ謬ラス能ク萬般ノ救護ニ力メ、本社ノ責務ヲ全クシタルハ洵ニ滿足ニ勝ヘス。各員宜シク奮勵ヲ加ヘ愈社業ノ進展ヲ期セヨ。

閑院總裁宮殿下御慰問の御言葉

四月九日京都驛御通過車内にて

濱田支部長に賜はりたる

奥丹後地方ノ激震ニ當リテ多數ノ罹災者ヲ生ジタルハ誠ニ悲痛ノ至リニ堪エズ、殊ニ傷病者ニ對シテハ深ク同情ヲ寄スル所ナリ。折角療養ニ努メムコトヲ望ム。而シテ之ガ救療保護ノ任ニ當ル赤十字社救護員其ノ他ニ對シテハ、其ノ勞苦ヲ多トス。今當地方ヲ通過スルニ際シ、親シク罹災地ニ臨ミテ慰問スルコト能ハザルヲ遺憾トス。宜シク傳達セラレタシ。

576-53

緒言

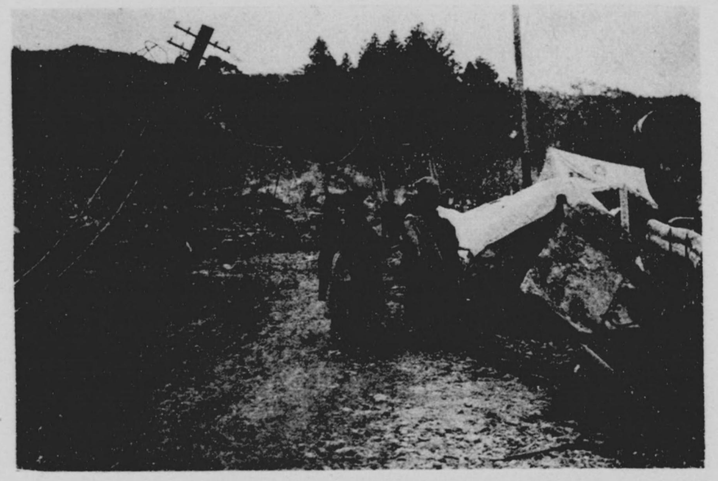
昭和二年奥丹後地方に於ける震災は稀有の惨事たり廣袤二十九方里四郡五十八個町村に跨り死傷各三千倒壊燒失一萬六千有餘戸被害最峻烈を極む而して之が救護は亦當支部空前の大事業たり發生直後神速十個班を派遣し尋て療院を設け收容所四救護所十六を分布し且牛乳配給養育料補助等の方法を設け被救護者の延人員十萬に上り經費約二十萬圓を算す然るに關係の諸員艱苦を嘗め缺乏を忍び專ら懇切を主とし終始一誠事に從ひたり之を以て事務蹉跌なく客年末完結し赤十字社の主旨徹底す依つて之が記錄を編纂し添ふるに關聯事項を以てし刊行して後日の參攷に資す

昭和三年四月

日本赤十字社京都支部長　大海原重義

與謝郡岩瀧町字石田の被害・救援軍隊の活動

與謝郡山田村字下山田の慘狀



與謝郡市場村字四辻の燒野原

與謝郡市場村字幾地と岩屋村間道路の龜裂

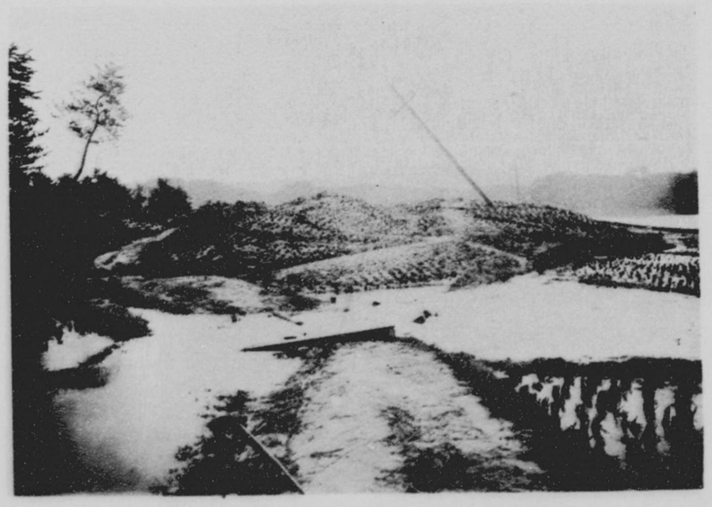
中郡蜂山町の慘狀（整理後）

竹野郡鄕村學校前の斷層（震災紀念保存地）

竹野郡鄕村の一部家屋の倒壊

竹野郡鄕村字生野川の斷層

竹野郡網野町の惨状（左方遠く見ゆる建物がり舊郡役所（收容所）跡なり）



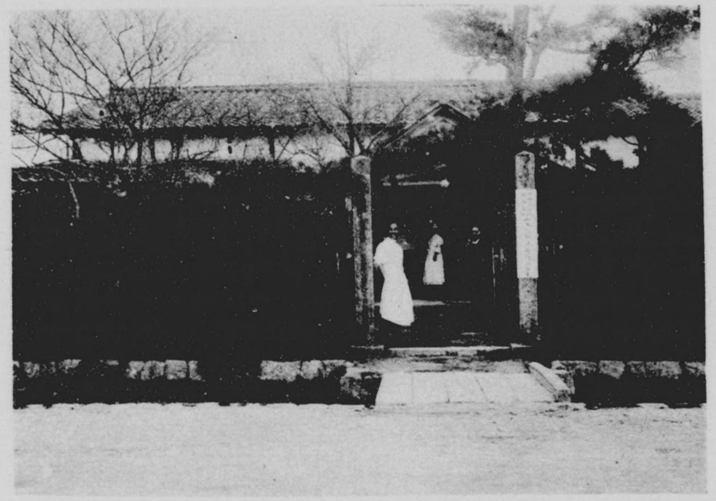
竹野郡網野町外れ離湖岸田面の陷沒及隆起

竹野郡網野町と島津村との中間（櫻島）
田面隆起上に於ける德川副社長一行

竹野郡島津村掛津と三津との中間海嘯山埋没田面

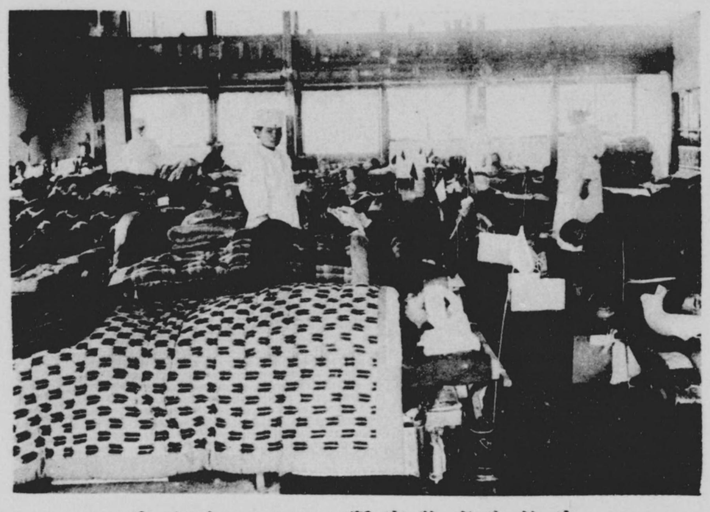
震災救護療院本部（宮津町字鶴賀の海岸元立野運送店なりな）

震災救護療院宮津收容所全景（圖内は院長淺山忠愛）



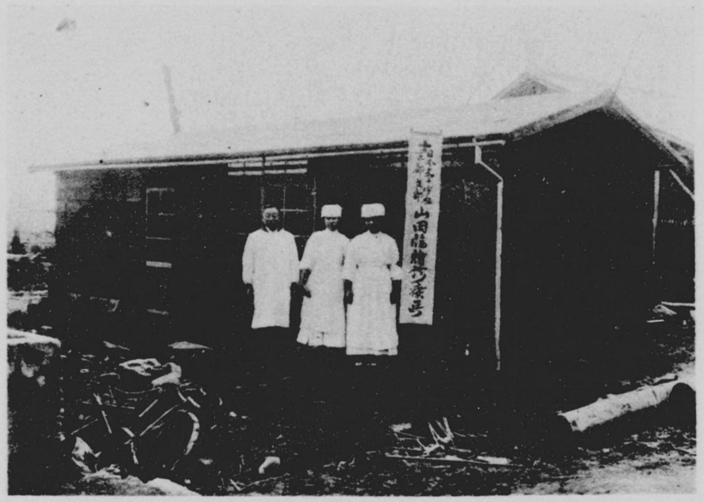
震災救護療院宮津分病室

德川副社長震災救護療院視察時の撮影（宮津收容所）



宮津患者收容所（宮津公會堂）大病室

岩瀧患者收容所（岩瀧町圖病舍）

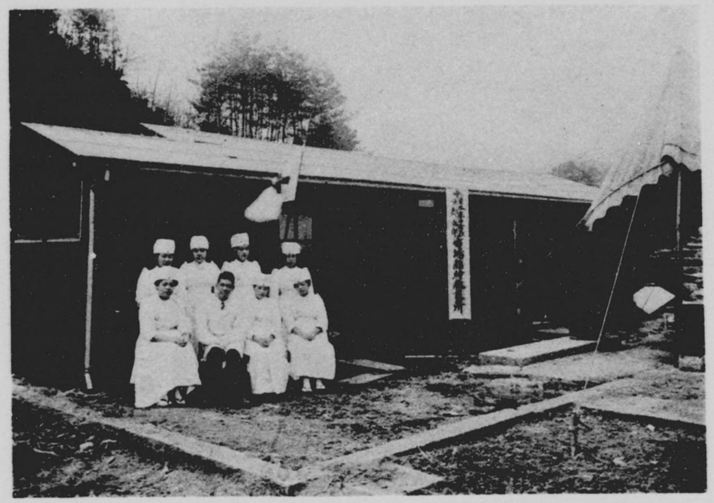


山田救護所（山田村中央三戸谷峠れ道の傍）

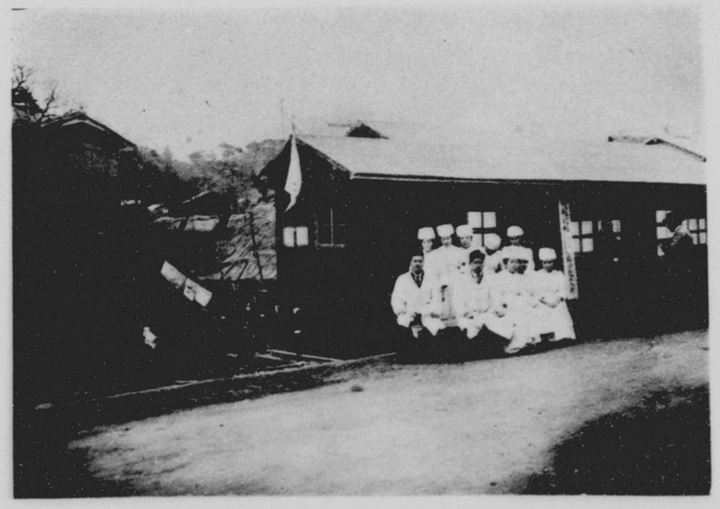
石川救護所（石川村西禅寺證居所）

加悦救護所（加悦町避病舎）

三河内救護所（三河内村妙見堂庵室）



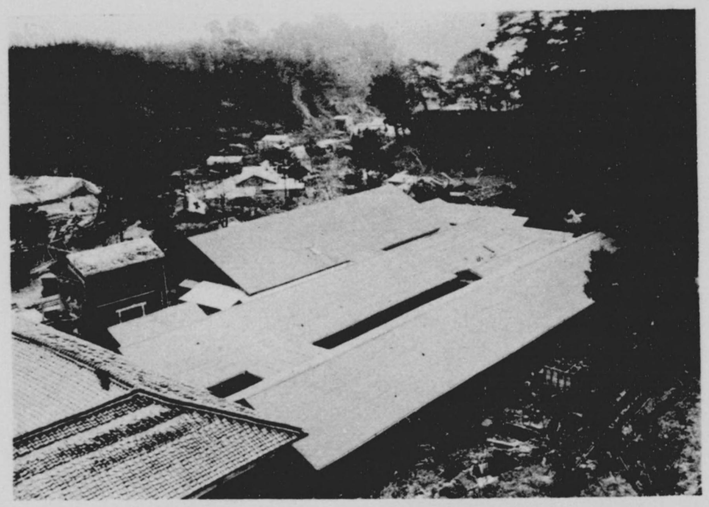
市場（岩屋兼播）救護所（市場村字幾地役場跡）



口大野救護所（口大野村中央の空地）

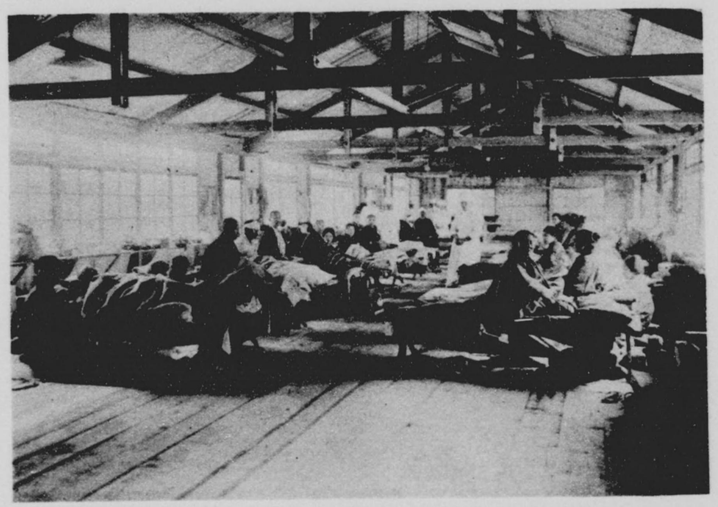
蜂山患者收容所天幕時代の全景

坂本副社長一行蜂山患者收容所視察時撮影（バラック建設前）

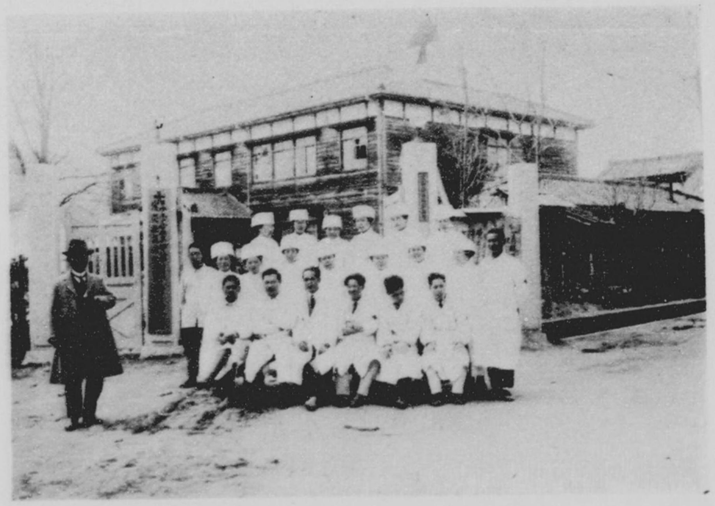


蜂山收容所バラック全景（蜂山町公會堂敷地建物は倒壊せり）

蜂山患者收容所（バラック）前に於て
德川副社長一行及び當時の職員



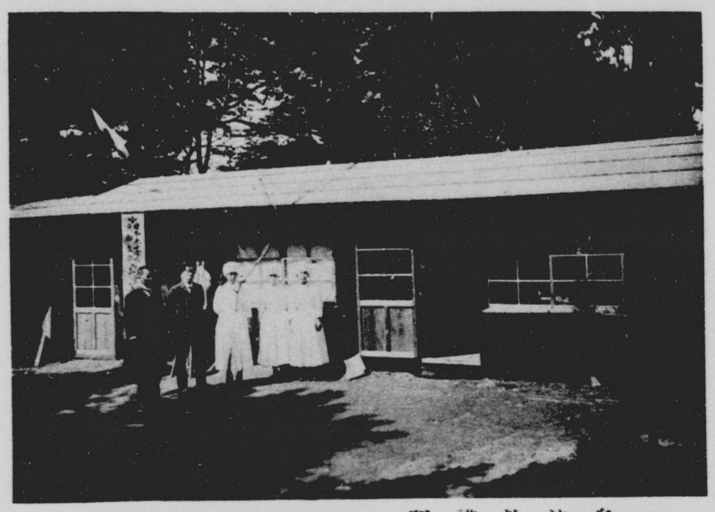
蜂山患者收容所外科大病室（パラック）



網野患者收容所全景（元竹野郡役所）

網野患者收容所支關に於て德川副社長視察時の撮影

網野患者收容所病室

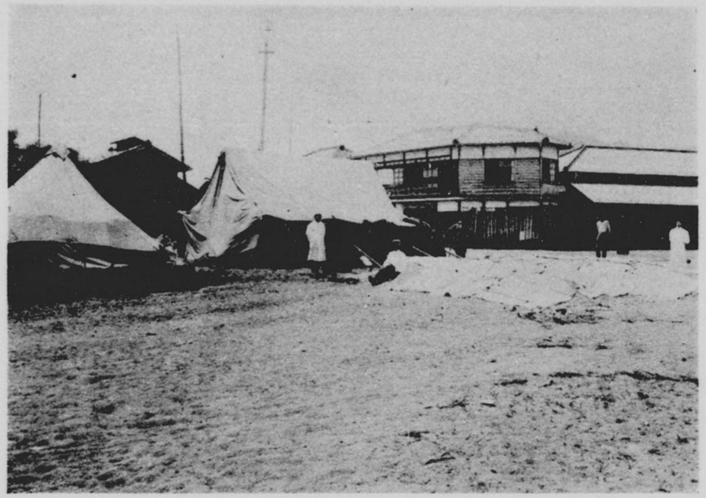


島津救護所　（島津村字島溝川春日神社境内）

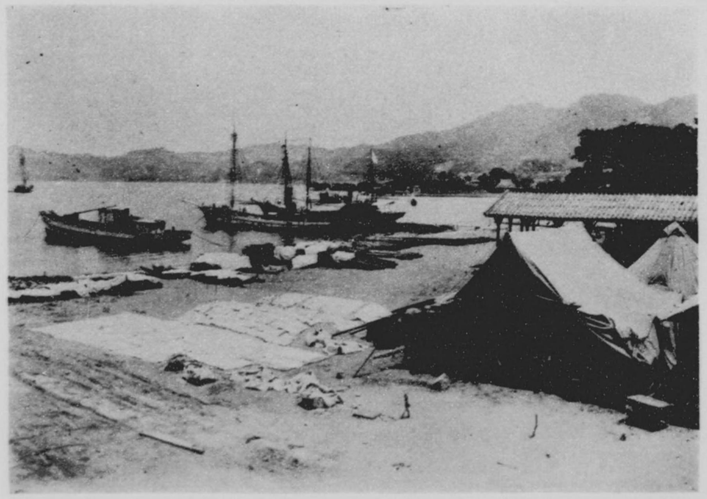
島取救護所　（島取村字島取區有公會堂）

六月十五日宮津收容所殘遺患者後送(宮津驛)の際
汽車の到着を待つ光景

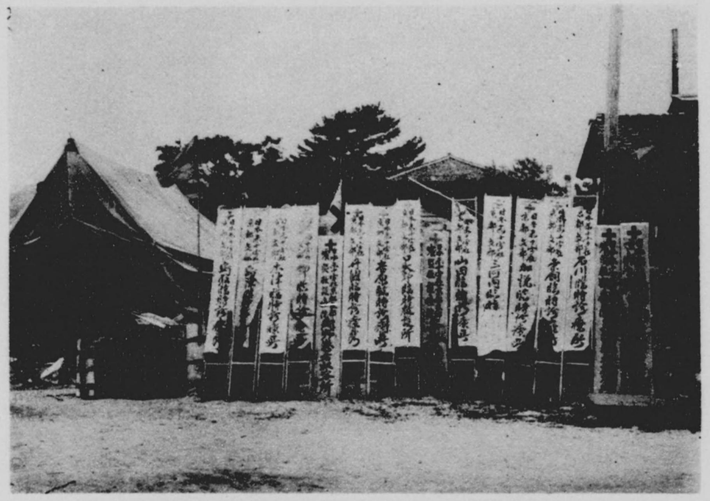
療院本部殘品整理（其一）



（二其）理整品殘部本院療

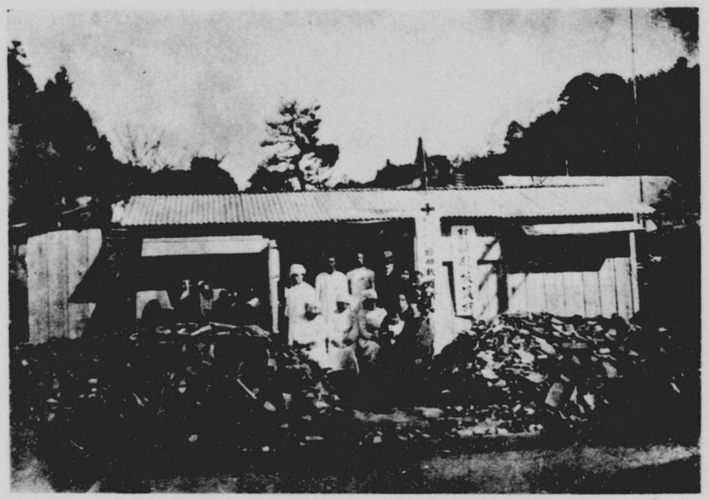


（三其）理整品殘部本院療



救療機關閉鎖の際殘存せる各收容所救護所の
旗字十赤せる滅裂の端めたの動活々日及票門

奈良支部救護班



靜岡支部救護班

靜岡支部救護班

靜岡支部救護班

島根支部救護班

兵庫支部救護班

目次

皇后陛下御令旨……一頁
總裁殿下御言葉……一頁
緒言……一頁
卷頭寫眞……三葉
第一章　被害地の概況……一頁
第二章　人と家に關する被害……六頁
第三章　救護班派遣の狀況……一三頁
一　京都支部……一三頁
二　各支部救護班活動の概況……一三頁
第四章　三月十九日以後に於ける京都支部施設救護機關の狀況……三頁
イ、療院本部　ロ、宮津患者收容所　ハ、岩瀧患者收容所　ニ、峰山患者收容所
ホ、網野患者收容所　ヘ、市場救護所　ト、　チ、岩屋救護所
リ、石川救護所　ヌ、三河內救護所　ル、加悅救護所　ヲ、桑飼救護所
ワ、口大野救護所　カ、丹波救護所　ヨ、吉原救護所　タ、河邊救護所
レ、島津救護所　ソ、鳥取救護所　ツ、鄉救護所　ネ、木津救護所
ナ、磯救護所
第五章　委托患者……三二頁

第六章　其の他の救護……一二三頁
イ　牛乳配給……一二三頁
ロ　養育料補助……一二五頁
第七章　救護患者……一二六頁
第八章　救護材料の概要……一四九頁
第九章　寄贈金品……一七三頁
第十章　收支の概要……一七五頁
第十一章　震災救護中の京都支部……一七六頁
第十二章　救護關係職員……一七九頁
第十三章　行賞……一八二頁
第十四章　少年赤十字團の活動……一八三頁
第十五章　篤志看護婦人會京都支會の活動……一九〇頁
第十六章　震災救護所感……二〇三頁
平面圖（宮津、岩瀧、峰山、網野各收容所及石川、桑飼、加悅、三河内、岩屋、丹波、鳥取、木津各救護所）……一四面
附圖（震災前總戸數ニ對スル平均一戸被害高調査圖　京都支部派遣救護班救護實施略圖　各支部派遣救護班配置圖　京都支部施設救護機關配置圖）……四枚

第一章　被害地の概況

昭和二年三月七日春尚淺く稀有の大雪に鎖されて殘寒嚴烈の奥丹後一帶に突如として大地震襲來し日暮に近き午後六時二十七分人々は夕餉の仕度に忙しく早きは晩餐の團欒に一家和合して歡樂の語らひを共にせる折柄大地は轟然震動し餘震引續き襲來して危乎と言ふ間隙なき一瞬時歡樂の巷も平和の村も忽らにして大自然の威力に蹂躙せられたり震害の區域は丹後五郡の中東部の加佐郡を除き、與謝、中、竹野、熊野の四郡に跨る五十八箇町村に及び就中丹後縮緬機業の中心地として知られたる峰山、網野、加悅、岩瀧の各町を始め之に隣接せる諸村落は震災につぐに火災を以てし殆んど全滅し或は全滅に近き大破壞を蒙り文字通りの焦土に化し之に伴ひ驚くべき多數の死傷者を出し一家數人相抱いて慘死し子に別れたる親親を失ひたる孤兒、夫に別れ妻を失ひ實に現世には想像尚且及ばざる悲語哀話は擧げて數ふるに遑あらず凄絶、慘絶、聞くだに慄然として膚に粟を生ずるを禁じ得ざるものあり。

東は與謝郡伊根村より西は熊野郡湊村に至る十里餘の間南は與謝郡與謝村より北は竹野郡間人町に至る八里二十二町面積二十九方里に亙る大地震にしてその廣袤に於ては素より大正十二年九月の關東大震災に及ばざるも被害の程度に於ては或は一層深刻なるものあり、同十四年五月の北但豐岡、城崎方面の地震に比すれば遙かに大にして之に數倍するものあり實に京都支部空前の天變地異とす。

第一、被害の總括

奥丹後大震火災の總被害高は果して何程に達するや震災以來各關係者間に於て種々の方面より調査を進め出來得る限り確實なる計數を得ることに努めたるも、如何にせん古來幾多の星霜を經人間精根の限りを盡し築き上げたる百般の施設を瞬時にして壞滅に歸したるものなるを以て、一朝一夕に之が被害を計數の上に表はすことは素より至難と云ふへきも左表は最近京都府統計課に於て各方面より蒐集したる活きたる資料に基き精細調査したるものにして此の種調査中比較的正確を期し得るものなるべし。

震火災被害高總括表　京都府統計課調査

種別	被害高	摘要
建物	四〇、九〇一、一四四円	棟數　五三、〇八四棟
器財類	三〇、四七五、三九〇	普通器財類　一四、五二三、七八一圓 業務上器財類　一五、九五二、六〇九圓
農用地	五、〇四二、五〇五	
農作物	五〇一、二七九	
畜産業	一四六、一三二	
林業	八三五、四五〇	

種別	郡別	市町村	被害額
農作物	與謝郡	岩滝町	三、四〇〇、〇〇〇円
〃	〃	山田村	三、八〇〇、〇〇〇円
〃	中郡	峯山町	九〇〇、〇〇〇円
〃	〃	吉原村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	〃	丹波村	三、四〇〇、〇〇〇円
〃	〃	長善村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	竹野郡	奥大野村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	〃	丹波村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	熊野郡	新宮町	四〇、〇〇〇円
〃	〃	計	三、四〇〇、〇〇〇円

第一章　被害の概況

一、郡別被害高

右被害總額を郡別せば左表の如くなるも鐵道、通信、電氣の三事業と土木事業中府に屬する部分は何れも郡別になし難き事情あるを以て之を省略せり。

郡別被害調査表

種別	郡別	市町村	被害額
農作物	與謝郡	岩滝町	三、四〇〇、〇〇〇円
〃	〃	山田村	三、八〇〇、〇〇〇円
〃	中郡	峯山町	九〇〇、〇〇〇円
〃	〃	吉原村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	〃	丹波村	三、四〇〇、〇〇〇円
〃	〃	長善村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	竹野郡	奥大野村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	〃	丹波村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	熊野郡	新宮町	四〇、〇〇〇円
〃	〃	計	三、四〇〇、〇〇〇円

二、町村別被害高

更に之れを町村別に見るに町村の大小貧力の程度、等しからず被害程度亦異るを以て一概に判別し難き事情あるも其の概略を知るを得べし。

種別	郡別	市町村	被害額
農作物	與謝郡	岩滝町	三、四〇〇、〇〇〇円
〃	〃	山田村	三、八〇〇、〇〇〇円
〃	中郡	峯山町	九〇〇、〇〇〇円
〃	〃	吉原村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	〃	丹波村	三、四〇〇、〇〇〇円
〃	〃	長善村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	竹野郡	奥大野村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	〃	丹波村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	熊野郡	新宮町	四〇、〇〇〇円
〃	〃	計	三、四〇〇、〇〇〇円

詳細は左表に示す如く被害高より見るに最も大なるは峯山町にして被害高壹千九百五拾萬圓に上り總被害高の二割四分を占め中郡の半額に達せんとし竹野郡、與謝郡の被害高を凌ぐこと數倍なり。峯山町に亞いで被害の大なるは網野町、吉原村にして被害高貳百萬圓以上共に六百萬圓に近き數字を示せり。其の町村を列擧せば次の如し。

種別	郡別	市町村	被害額
農作物	與謝郡	岩滝町	三、四〇〇、〇〇〇円
〃	〃	山田村	三、八〇〇、〇〇〇円
〃	中郡	峯山町	九〇〇、〇〇〇円
〃	〃	吉原村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	〃	丹波村	三、四〇〇、〇〇〇円
〃	〃	長善村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	竹野郡	奥大野村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	〃	丹波村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	熊野郡	新宮町	四〇、〇〇〇円
〃	〃	計	三、四〇〇、〇〇〇円

而して被害高を農災前の總戸數に對し平均一戸當を算出し各郡農災前總戸數の被害總額に對する平均一戸當り百分比を算出し、九豹竹野郡一、〇二〇、七、與謝郡九、中郡六、五、強熊野郡七、に當り被害程度の一般を知るを得べし。

種別	郡別	市町村	被害額
農作物	與謝郡	岩滝町	三、四〇〇、〇〇〇円
〃	〃	山田村	三、八〇〇、〇〇〇円
〃	中郡	峯山町	九〇〇、〇〇〇円
〃	〃	吉原村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	〃	丹波村	三、四〇〇、〇〇〇円
〃	〃	長善村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	竹野郡	奥大野村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	〃	丹波村	三、六〇〇、〇〇〇円
〃	熊野郡	新宮町	四〇、〇〇〇円
〃	〃	計	三、四〇〇、〇〇〇円

郡	飯南	飯野	多気	度会	南牟婁	北牟婁	志摩	計
総数	四六〇	三五〇	三六〇	三四〇	三六〇	三四〇	三六〇	二四〇
戸数	四六〇	三五〇	三六〇	三四〇	三六〇	三四〇	三六〇	二四〇
人口	二〇〇	一四〇	一五〇	一四〇	一五〇	一四〇	一五〇	一〇〇
男	一〇〇	七〇	七五	七〇	七五	七〇	七五	五〇
女	一〇〇	七〇	七五	七〇	七五	七〇	七五	五〇
戸口密度	四三	四〇	四二	四〇	四二	四〇	四二	四一
一戸平均人口	四・三	四・〇	四・二	四・〇	四・二	四・〇	四・二	四・一
一戸平均男	二・一	二・〇	二・一	二・〇	二・一	二・〇	二・一	二・〇
一戸平均女	二・一	二・〇	二・一	二・〇	二・一	二・〇	二・一	二・〇
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一	一	一	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

郡	上下	宇治	山田	度会	計
総数	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇
戸数	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇
人口	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇
男	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇
女	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇
戸口密度	四一	四一	四一	四一	四一
一戸平均人口	四・一	四・一	四・一	四・一	四・一
一戸平均男	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇
一戸平均女	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇	〇	〇

郡	久米	海部	上益	下益	三重	計
総数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
戸数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
人口	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
男	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
女	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
戸口密度	四五	四五	四五	四五	四五	四五
一戸平均人口	四・五	四・五	四・五	四・五	四・五	四・五
一戸平均男	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
一戸平均女	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇	〇	〇	〇

第二章　郡毎の概況

熊野

郡	北牟婁	南牟婁	計
総数	一四〇	一四〇	一四〇
戸数	一四〇	一四〇	一四〇
人口	一四〇	一四〇	一四〇
男	七〇	七〇	七〇
女	七〇	七〇	七〇
戸口密度	四一	四一	四一
一戸平均人口	四・一	四・一	四・一
一戸平均男	二・〇	二・〇	二・〇
一戸平均女	二・〇	二・〇	二・〇
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇

竹野

郡	宇治	山田	計
総数	一四〇	一四〇	一四〇
戸数	一四〇	一四〇	一四〇
人口	一四〇	一四〇	一四〇
男	七〇	七〇	七〇
女	七〇	七〇	七〇
戸口密度	四一	四一	四一
一戸平均人口	四・一	四・一	四・一
一戸平均男	二・〇	二・〇	二・〇
一戸平均女	二・〇	二・〇	二・〇
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇

那賀

郡	名賀	阿山	計
総数	一四〇	一四〇	一四〇
戸数	一四〇	一四〇	一四〇
人口	一四〇	一四〇	一四〇
男	七〇	七〇	七〇
女	七〇	七〇	七〇
戸口密度	四一	四一	四一
一戸平均人口	四・一	四・一	四・一
一戸平均男	二・〇	二・〇	二・〇
一戸平均女	二・〇	二・〇	二・〇
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇

第三章　郡毎の概況

中部

郡	安芸	一志	飯高	飯野	多気	度会	計
総数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
戸数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
人口	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
男	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
女	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
戸口密度	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五
一戸平均人口	四・五	四・五	四・五	四・五	四・五	四・五	四・五
一戸平均男	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
一戸平均女	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一	一	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

那賀

郡	奄芸	河曲	鈴鹿	計
総数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
戸数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
人口	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
男	八〇	八〇	八〇	八〇
女	八〇	八〇	八〇	八〇
戸口密度	四五	四五	四五	四五
一戸平均人口	四・五	四・五	四・五	四・五
一戸平均男	二・三	二・三	二・三	二・三
一戸平均女	二・三	二・三	二・三	二・三
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇	〇

第四章　郡毎の概況

北部

郡	朝明	三重	員弁	桑名	計
総数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
戸数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
人口	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
男	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
女	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
戸口密度	四五	四五	四五	四五	四五
一戸平均人口	四・五	四・五	四・五	四・五	四・五
一戸平均男	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
一戸平均女	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇	〇	〇

南部

郡	阿拝	伊賀	計
総数	一四〇	一四〇	一四〇
戸数	一四〇	一四〇	一四〇
人口	一四〇	一四〇	一四〇
男	七〇	七〇	七〇
女	七〇	七〇	七〇
戸口密度	四一	四一	四一
一戸平均人口	四・一	四・一	四・一
一戸平均男	二・〇	二・〇	二・〇
一戸平均女	二・〇	二・〇	二・〇
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇

第五章　郡毎の概況

中部

郡	安芸	一志	飯高	飯野	多気	度会	計
総数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
戸数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
人口	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
男	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
女	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
戸口密度	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五
一戸平均人口	四・五	四・五	四・五	四・五	四・五	四・五	四・五
一戸平均男	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
一戸平均女	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一	一	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

那賀

郡	奄芸	河曲	鈴鹿	計
総数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
戸数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
人口	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
男	八〇	八〇	八〇	八〇
女	八〇	八〇	八〇	八〇
戸口密度	四五	四五	四五	四五
一戸平均人口	四・五	四・五	四・五	四・五
一戸平均男	二・三	二・三	二・三	二・三
一戸平均女	二・三	二・三	二・三	二・三
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇	〇

第六章　郡毎の概況

北部

郡	朝明	三重	員弁	桑名	計
総数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
戸数	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
人口	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
男	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
女	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
戸口密度	四五	四五	四五	四五	四五
一戸平均人口	四・五	四・五	四・五	四・五	四・五
一戸平均男	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
一戸平均女	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇	〇	〇

南部

郡	阿拝	伊賀	計
総数	一四〇	一四〇	一四〇
戸数	一四〇	一四〇	一四〇
人口	一四〇	一四〇	一四〇
男	七〇	七〇	七〇
女	七〇	七〇	七〇
戸口密度	四一	四一	四一
一戸平均人口	四・一	四・一	四・一
一戸平均男	二・〇	二・〇	二・〇
一戸平均女	二・〇	二・〇	二・〇
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇

第四　郡毎の概況

郡	上下	宇治	山田	度会	計
総数	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇
戸数	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇
人口	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇
男	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇
女	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇
戸口密度	四一	四一	四一	四一	四一
一戸平均人口	四・一	四・一	四・一	四・一	四・一
一戸平均男	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇
一戸平均女	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇	〇	〇
出生率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
死亡率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
自然増減率	〇	〇	〇	〇	〇
婚姻	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
離婚	一	一	一	一	一
転入	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
転出	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
社会増減	〇	〇	〇	〇	〇
転入率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
転出率	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
社会増減率	〇	〇	〇	〇	〇

熊野

郡	北牟婁	南牟婁	計
総数	一四〇	一四〇	一四〇
戸数	一四〇	一四〇	一四〇
人口	一四〇	一四〇	一四〇
男	七〇	七〇	七〇
女	七〇	七〇	七〇
戸口密度	四一	四一	四一
一戸平均人口	四・一	四・一	四・一
一戸平均男	二・〇	二・〇	二・〇
一戸平均女	二・〇	二・〇	二・〇
男女比	一〇〇	一〇〇	一〇〇
人口増減	一〇	一〇	一〇
人口増減率	五・〇	五・〇	五・〇
出生	一〇	一〇	一〇
死亡	一〇	一〇	一〇
自然増減	〇	〇	〇
出生率	五・〇

第二章　人と家に關する被害

第一節　人の被害

震災の被害は單に叙上の數字のみに止まらず數字に計上し難き貴重なる人命四郡を通じて三千を喪ひ負傷者亦これに超越すること七百に達する一事は實に悲痛哀傷の極にして茲に多くを語るを忍びず。之れを震災地方の總人口十一萬四千八百六十名に對比するに正に五分八厘に相當し平均二十人に對し一人二分の割合に犧牲者を出せり就中峯山町は死者のみに於て總人口の四分の一に達し市場村の死者及傷者を合して三分の一に當る人命を殞したるは、如何に慘害の甚大なりしかを知るべし。

四郡（死者なき與謝郡八ヶ村を除く）に於ける死傷者數を町村別にせば左表の如し。

死傷者數調査表（京都府統計課調査）

町村名	震前人口總數	死者總數	總人口ニ對スル死者歩合	負傷者總數	總人口ニ對スル負傷者歩合	死傷者總數	總人口ニ對スル死傷者歩合	總人口一戸當人員
與謝郡								
市場村	一、六二八	二〇一	一、二二	三四九	二、一〇	五五〇	三、三三	五
峰山町	四、五六二	一、〇八	二、三五	四三三	一、一三	一、六二八	三、五九	四
吉原村	二、〇三九	三一七	一、五四	七九	三、九八	三九六	一、九四	五
丹波村	一、六二八	七	〇、四三	一六七	一、〇三	一七四	一、〇七	五
長善村	一、六四四	八二	〇、四九	一〇五	〇、六四	一八七	一、一三	五
奥大野村	一、〇五五	四五	〇、四三	九	〇、八五	一、二五	一、一八	五
口大野村	一、八二八	四〇	二、一七	二二	一、二〇	六二	三、三七	五
常吉村	八五四	八	〇、九四	七	〇、八二	一五	一、七六	五
五箇村	二、一四四	一三	〇、六〇	九	〇、四二	二二	一、〇二	五
山田村	二、〇五九	一三五	〇、六六	一〇七	〇、五一	二四二	一、一八	五
岩滝町	三、九五九	一四三	〇、三六	二四四	〇、六一	三八七	一、〇一	五
桑飼村	一、九六七	一六	〇、八二	六九	〇、三五	八五	〇、四三	五
三河内村	一、九三〇	一五五	〇、七八	六一	〇、三二	二一六	〇、一一	五
加悦町	四、三四四	三三	〇、七六	九六	〇、三二	二八	〇、八五	五
石川村	二、三五五	一六	〇、七〇	六六	〇、二九	八二	〇、三五	五
岩屋村	一、七二一	一六	〇、九三	三五	〇、二九	五一	〇、三〇	五
日置村	一、〇四九	一	〇、〇九	四	〇、〇四	五	〇、〇五	五
府中村	二、四八〇	三	〇、一二	一	〇、〇四	四	〇、一六	五
與謝村	二、一四三	一	〇、〇五	五	〇、二三	六	〇、二八	五
宮津町	二、一六五	一	〇、〇五	三	〇、一四	四	〇、一九	五
栗田村	三、〇五七	一	〇、〇三	三	〇、一〇	四	〇、一三	五
野間村	一、三六〇	一	〇、〇七	二	〇、一五	三	〇、二二	五
伊根村	二、一八四	一	〇、〇五	一	〇、〇五	二	〇、一〇	五
計（十五町村）	四五、九二一	五七五	一、二五	九九六	二、一七	一、五七一	三、四二	五
中郡								
峰山町	四、五六二	一、〇八	二、三五	四三三	一、一三	一、五二一	三、三八	四
吉原村	二、〇三九	三一七	一、五四	七九	三、九八	三九六	一、九四	五
丹波村	一、六二八	七	〇、四三	一六七	一、〇三	一七四	一、〇七	五
長善村	一、六四四	八二	〇、四九	一〇五	〇、六四	一八七	一、一三	五
奥大野村	一、〇五五	四五	〇、四三	九	〇、八五	一、二五	一、一八	五
口大野村	一、八二八	四〇	二、一七	二二	一、二〇	六二	三、三七	五
常吉村	八五四	八	〇、九四	七	〇、八二	一五	一、七六	五
五箇村	二、一四四	一三	〇、六〇	九	〇、四二	二二	一、〇二	五

周枳村	一、一七一	七	〇、六〇	二一	一、七九	二八	二、四〇	五
新山村	一、四四一	一五	一、〇四	二	〇、一四	一七	一、一八	五
河邊村	一、三六八	六	〇、四五	六	〇、四五	一三	〇、九五	五
三重村	一、三五七	二	〇、一五	二	〇、一五	四	〇、三〇	五
五十河村	一、四一七	—	—	三	〇、二一	三	〇、二一	五
計（十三町村）	三、〇六八	一、二三	〇、四〇	一、三五一	〇、四五	二、九五四	一、二九	五
竹野郡								
島津村	二、三六九	二六	〇、八七	二六七	一、〇三	四九三	一、四〇	五
網野町	五、四九三	二八八	〇、五二	五〇八	〇、九二	七九六	一、四五	五
郷村	二、〇六〇	一三三	〇、六四	一四二	〇、六九	二七四	一、三五	五
鳥取村	一、九六六	五九	〇、三〇	一四三	〇、七二	二〇一	一、〇二	五
濱詰村	一、九四八	五七	〇、二五	一〇三	〇、五三	一六〇	〇、八九	五
深田村	一、五二三	六	〇、四〇	九	〇、一二	一五	〇、一八	五
豊栄村	二、八九九	八	〇、三〇	二六	〇、一〇	三四	〇、一三	五
吉野村	一、三三五	—	—	一三	〇、一一	一三	〇、一一	五
木津村	一、八九六	八	〇、五二	八	〇、五二	一六	〇、一〇	五
竹野村	一、六六〇	—	—	九	〇、七八	九	〇、七八	五
溝谷村	一、四〇六	二	〇、一四	八	〇、五二	一〇	〇、七一	五
間人町	三、三三三	一	〇、一三	一四	〇、四二	一五	〇、四五	五
上宇川村	一、三五四	—	—	五	〇、三八	五	〇、三八	五
下宇川村	二、一九三	—	—	六	〇、二七	六	〇、二七	五
計（十四町村）	三〇、三五二	七七	〇、二五	一、二六〇	〇、四一	一、三六七	〇、四五	五
熊野郡								
神野村	一、三七六	三	〇、二一	一〇三	〇、七五	一〇五	〇、七六	五
田村	一、九二一	一	〇、〇五	二六	〇、一五	二七	〇、一五	五
久美濱町	二、一三五	二	〇、〇九	一四	〇、一一	一六	〇、一一	五

湊村	一、八五五	—	—	—	—	—	—	五
久美谷村	一、九一三	—	—	—	—	—	—	五
海部村	一、九八〇	—	—	—	—	—	—	五
下佐濃村	一、三六七	二	〇、一五	一	〇、〇七	三	〇、二二	五
上佐濃村	一、八三一	一	〇、〇五	一	〇、〇五	二	〇、一〇	五
川上村	二、三九九	—	—	—	—	—	—	五
計（九町村）	一七、一二六	九	〇、〇五	一八四	〇、一〇	一九三	〇、一一	五
總計（五十一町村）	二、一四、八五〇	二、九二一	〇、一六	三、七二三	〇、三五	六、六四四	〇、三一	五

備考　町村順位ハ各郡毎ノ被害割合高ニヨリ、歩合算出ハ四捨五入

與謝郡内ノ上宮津、吉津、世屋、養老、朝妻、本庄、筒川、ノ八ヶ村ハ死傷者ナク除外

死傷者姓別表（京都府警察部調査）

郡別	性別	死者	重傷者	輕傷者	行方不明者	計
與謝郡	男	二三九人	二六	一五四	二	二一二
	女	三二四	一九五	八六九	一	二〇四
	計	五六三	二二一	九九三	三	三二六
中郡	男	二四八	一三	一〇二	一	一二四
	女	二八八	一九	八五	一	一二三
	計	五三六	三二	一八七	二	二四七
竹野郡	男	二九八	一一	一四二	一	一五四
	女	三一二	一一	一四二	一	一五四
	計	六一〇	二二	二八四	二	二九八
熊野郡	男	一五五	六	八六	一	一六八
	女	一七五	二	九三	一	一八一
	計	三三〇	八	一七九	二	三四九
合計	男	一、二五二	四六	五八二	五	一、八八五
	女	一、三九二	四一	五一一	四	一、九四八
	計	二、六四四	八七	一、〇九三	九	三、八三三

備考
一、震災直後三日以内ニ死亡シタルモノハ死亡者ニ計上ス
一、負傷者ハ治療ヲ要スル程度以上ノモノニシテ内重傷者ハ疾病休業二週間以上ノ程度ノモノトス

第二節　人と家に關する被害

一、亜剌比亜数字ハ旅館宿泊人来訪者等一時滞在者ノ内譯ヲ示ス

第二節　家の被害

更に家屋に就て見るに四郡を通じ全壊又は全焼したる戸数は六千七百九十七戸にして此の他半壊、半焼のもの九千六百五十四戸を出せり是等を通計したる総被害戸数は一萬六千四百五十一戸(此棟数三萬七百八十棟)の多きに達しこれを震前総戸数二萬五千八百六十三戸に對比するに正に六割四分に當れり其の詳細次表の如し而して半壊破損等の小被害は各町村共通のことにして総被害戸数又は棟数の多寡のみを以て其の町村の被害程度を推定するは正當ならず依て茲に全焼全壊の如き最も深刻なる被害のみを標準とし震前の總戸数に對し五割以上の災害を被りたる町村を列擧せば左の如し。

與謝郡	市場村	九割六九
	山田村	八、六一
	三河内村	五、二六
中郡	峰山町	九割六三
	吉原村	九、一三
	長善村	六、五四
	口大野村	五、九九
	奥大野村	五、六七
	丹波村	五、六七
竹野郡	濱詰村	八割八七
	郷村	七、五九
	島津村	七、五〇
	網野町	七、一〇

家屋被害調査表　(京都府統計課調査)

町村	震前総戸数	全燒及全潰戸数	總戸数ニ對スル被害ノ歩合	住家 燒失	住家 全潰	住家 半潰	住家 計	非住家 燒失	非住家 全潰	非住家 半潰	非住家 計	被害家屋合計
	戸	戸		棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟	
與謝郡												
宮津町	二、四八九	〇、〇八										
栗田村	五五七											
上宮津村	二九六											
吉津村	三一四	一七	〇、五四									
石川村	四九三	二四九	三、九四	七	三七	一七一	二一五	一	一	四	六	二二一
桑飼村	四〇九	一三五	三、三〇	三	一三五	一三五	二七三	一	一	一	三	二七六
與謝村	四四六	一〇	〇、四五		三	三	六					六
加悦町	八四四	一九	二、三	三	三四	一四五	一八二	一	一	一	三	一八五
三河内村	三五七	一八	五、二六	九一	二六	二六	一四三	一	一	一	二	一四五
中郡												
峰山町	二、四三	二四	一、〇三	一四三	六	一	一五〇	四六	一	一	四八	一九八
吉原村	三四七	一	〇、二八	一			一					一
五箇村	四三六	七	一、七	一			一					一
長善村	三九	一	〇、二五									
口大野村	三三七	一	〇、三〇									
奥大野村	一五七	八	五、八七	三	一		四					四
常吉村	一九八	七	三、五三	一			一					一
三重村	三三六	七	二、一三									
五十河村	三〇一	五	一、七									
周枳村	三三九	一	〇、三									
河辺村	二六八	三	一、一									
新山村	三六八	九	二、六四									
岩屋村	二九一	八	二、八二	二	九	七	一八	一	一	一	三	二一
市場村	三四七	九	二、六九	二	九	七	一八	一	一	一	三	二一
山田村	三三〇	八	二、五一	一	五	三	九	一	一	一	三	一二
岩滝町	八一三	四	四、六六	五	一	一	七	一	一	一	三	一〇
府中村	五四三	五	一、〇九	一	一	一	三	一	一	一	三	六
日置村	二四四	一	〇、四一	一	一	一	三	一	一	一	三	六
世屋村	二七九	一	〇、三六	一	一	一	三	一	一	一	三	六
伊根村	三六七	五	一、三四	一	一	一	三	一	一	一	三	六
朝妻村	三〇八	一	〇、三二	一	一	一	三	一	一	一	三	六
本庄村	三六九	一	〇、二七	一	一	一	三	一	一	一	三	六
筒川村	三九四	五	一、三	一	一	一	三	一	一	一	三	六
野間村	二八一	一	〇、三六	一	一	一	三	一	一	一	三	六
日ケ谷村	二五三	一	〇、三九	一	一	一	三	一	一	一	三	六
計(町村二二)	一、九二四	一、七	五、七〇	二、一〇四	一、七五一	一、七五一	五、五六一	一、九二九	一、三一九	一、三一九	四、五七七	一〇、一三八

郡別	世帯数	農業	商業	工業	機業	官公吏	其他	上流	中流	下流	有ル者	無キ者
中郡	三七七	一三七	三五	三五	三六	三四	当ゴ	二四	二六	三六	三四	三三
與謝郡	三六五	一三五	三五	三五	三六	三四	当ゴ	二四	二六	三六	三四	三三

第二章　人と家に関する統計

震災前ノ職業別

震災前ノ生活程度別

震災後ノ生活程度別

震災後生計維持ノ為メ要スルヤ否ヤノ数助ヲ要スル者

被害世帯生活状態

（京都府警察部調査）

各郡に於ける震災前後の生活程度を調査するに、罹災者中一家全滅は避難移住等により前住地に世帯を絶ちたるもの、與謝郡一一、中郡二、竹野郡二六、熊野郡四、合計五三の僅少なる数字を示せるは罹災者の努力と救護施設の宜しきを得たる結果ならん。

第三節　其の他に関する事項

一、被害世帯生活状態

震災前の総戸数に対する還家の月数は合計に十倍に二十八箇月数の中へ入れ全部を合計して一括した、與謝蒲葵村は落なきため除いた。

最下段の還家率は合計には震災前の総戸数に対する還家率の絶月数に対する還家率の絶月数を示したもので、單位の異なる點から必ずしも還家の月数を示したものではないからが、震災前の総戸数に対する還家率の絶対的の比較は出来ないが、

郡別	町村	震災前ノ総戸数	震災後ノ還家総月数	全焼及潜ノ総月数ニ対スル還家総月数ノ割合	全焼	半潜	全潜	計	全焼	半潜	全潜	計
中郡	上佐濃村	三七七	三七七	一〇〇								
	田村	三七七	三七七	一〇〇								
	野村	三七七	三七七	一〇〇								
	滝村	三六八	三六八	一〇〇								
	計（一町三村）	三七七	三七七	一〇〇								
與謝郡	下佐濃村	三六三	三六三	一〇〇								
	上佐濃村	三六三	三六三	一〇〇								
	計（九町村）	三六八	三六八	一〇〇								
	合計（一町九村）	三六八	三六八	一〇〇								

備考　前表中全焼は合計に十倍に二十八箇月数の中へ入れ全部を合計して一括したるからが、與謝蒲葵村は落なきため除いた。

郡別	町村	震災前ノ総戸数	震災後ノ還家総月数	全焼及潜ノ総月数ニ対スル還家総月数ノ割合	全焼	半潜	全潜	計	全焼	半潜	全潜	計
竹野郡	丹波村	四六四	四六四	一〇〇								
	計（一町三村）	四六四	四六四	一〇〇								
熊野郡	久美浜町	一〇四〇	一〇四〇	一〇〇								
	久美浜村	四六四	四六四	一〇〇								
	海上村	四六四	四六四	一〇〇								
	川上村	四六四	四六四	一〇〇								
	計（四町村）	六四二	六四二	一〇〇								
竹野郡	網野町	二〇四	二〇四	一〇〇								
	郷村	四六四	四六四	一〇〇								
	木津村	四六四	四六四	一〇〇								
	溝谷村	四六四	四六四	一〇〇								
	島津村	四六四	四六四	一〇〇								
	吉野村	四六四	四六四	一〇〇								
	入粟田村	四六四	四六四	一〇〇								
	竹岡村	四六四	四六四	一〇〇								
	計（八町村）	三七四	三七四	一〇〇								
	合計（一町九村）	四六四	四六四	一〇〇								

竹野郡	三、二六八	一、七一八	三一七	一七九	三〇一	四八	七〇五	四五〇	一、五九九	一、二一九	三、二三五	三三	二六	三、二四二
熊野郡	八九八	五二六	五九	九九	—	一五	一九九	六七	三〇〇	五三一	八九四	四	四	八九四
合計	一一、五二三	五、三四三	一、五三六	七八六	一、一九四	二三三	二、四三一	一、四九〇	三、四四三	四、五九〇	二、四四六	七七	五三	一一、四七〇

備考　一生活程度別は町村内に於ける一般的標準に據り定めたるものとす。

二、學校と社寺被害

叙上の被害中學校及社寺に關するものは最も罹災者と關係深きものなるを以て左に其の概要を再記す。

學校は在峰山町府立工業學校、峰山高等女學校等の全潰燒失を始めとして各中等學校、小學校及び幼稚園等を通じて全潰十一、全燒六、半潰二、大破十、中破十、小破三十四に及び此被害見込額百五拾五萬六千圓に達し此復舊費見込額貳百壹萬七千六百圓を要す。

社寺は被害地を通じて國幣社以下の神社七百七十三社、各宗寺院二百八十四ヶ寺に及ぶ就中峰山の金毘羅神社、山田村の八幡神社桑飼村の大蟲神社等多額の工費を投じたる優秀の建造物及び貴重の什寶物を燒滅したる箇所もあり、神社の被害總數は全部にて三百七十六社、此被害見込額百四拾萬圓、寺院の被害總數は山田村の祥雲寺を始め百三十四箇寺、此被害貳百七拾九萬千貳百圓に達せり此の外に特別保護建造物たる文珠の智恩寺、多寶塔及國寶に指定されたる府中村妙立寺の髹漆厨子、史蹟名勝地たる天橋立及銚子山古墳などの破損したる箇所もありこれ等の被害七千參百圓に及べり。

罹災小學校の職員及兒童の死傷者を調査するに左表の如し。

罹災小學校職員兒童死亡及重傷者調査表

學校名	與謝郡 死亡 職員	兒童	重傷 職員	兒童	計 死亡	重傷
石川校	—	二	—	—	二	—
桑飼校	—	一	—	—	一	—
三河内校	—	八	—	—	八	—
市場校	—	二三	三	八	二三	二
山田校	—	一五	—	—	一五	—
岩瀧校	—	一三	—	—	一三	—
府中校	—	一	—	—	一	—
合計	—	六一	三	八	六一	二
中郡						
峰山校	三	一二八	—	—	一三一	—
吉原校	二	一八	一	四	二〇	五
五箇校	一	—	一	五	一	六
周枳校	—	一	—	—	一	—
河邊校	一	二	—	—	三	—
誠和校(長善村)	二	五	—	四	七	四
大野校(口大野村)	—	一	—	七	一	七
常吉校	—	一	—	—	一	—
新山校	—	二	—	—	二	—
磯校(濱詰村)	—	二	—	四	二	四
郷村	—	一五	—	—	一五	—
島津校	二	二一	一	二三	二三	二四
鳥取校	—	三	—	—	三	—
豐榮校	—	一	—	—	一	—
合計	二	四六	一	二九	四八	五〇
總計	一一	二七七	六	五七	二八八	六五

學校名	死亡 職員	兒童	重傷 職員	兒童	計 死亡	重傷
丹波校	—	三	—	—	三	—
合計	九	一四〇	二	二〇	一七九	三
竹野郡						
濱詰校	—	四	—	二	四	二

第三章　救護班派遣の狀況

一、京都支部

奥丹後震災の突發したる昭和二年三月七日は宛も元支部長を多年勤續せられたる皇太后宮大夫大森男爵葬儀の東京に於て擧行せられたる當日なりき男爵の本府在職中恩顧を受けたる者數十名其葬儀に列する能はざるを遺憾とし午後四時當支部に集合して遙拜式を擧げたり式は三時に始まり懷舊談に時を移し五時終了式場を整理し職員各自歸宅せんとする途次圖らずも激烈なる震動に遭遇したり依て職員は中途より支部へ引返すあり歸宅早々晩餐を認め徹夜執務すべく準備を整へ支部に出勤して各地の情報を待構へたり。

午後八時半に至り與謝郡宮津町失火の報告ありたるを以て直に支部長に報告したるに府立測候所の觀測にては今回の震源は鈴鹿山脈にして大阪神戸方面强震なりとのことなりき同十時に至り震源地は奥丹後にして與謝郡加悅谷以西一面の猛火を以て包まれたりとの報告に接したり依て直に救護班派遣の議を決し救護醫員を召集し看護婦は火急の場合なるを以て療院勤務の者を配屬せしめ而して汽車の便なきを以て自動車にて翌八日午前零時二十分第一班を出發せしめたり。自動車にて出發せしめたるは時刻深更に及び汽車の發車なく且震災地方の交通機關破壞せるを以て之を利用せんとする趣旨に出でたるなり。

次て午前一時十分第二班を出發せしむると共に各所に散在せる救護員を召集し、醫員は先づ療院醫員を初め他は臨時京都帝國大學醫學部に依賴し準備の成れるものより順次出發せしめ三月十日午後一時三十八分を最後として合計十箇の救護班を派遣したり、以下各班の行動を略叙すべし。

イ、第一班

班長は郡部診療所關醫員(京都在住)に支部技手一名(長坂)療院勤務看護婦長一名(今井)看護婦一名(田熊)に應急材料を搭載し自動車にて進行せしめたり殘雪尚堆積せる丹波路殊に激震に怯へて沿道各部落は徹宵警戒せる暗夜の道路を疾走し、途中道を失して福知山に迂回綾部診療所にて看護婦一名(安村)を同乘せしめ再び福知山より由良川に沿ふて走ること五

時刻八日早朝由良に到着せるも由良栗田間海に瀕する道路は崩潰せる岩石土砂の爲め不通となれるが故に徒歩進行することゝし徹宵せる民家に依頼して朝食を喫し徒歩進行の準備を整へ約十町餘を過ぎたる頃土地消防隊青年團員等の活動により辛うじて通行するを得頻々たる餘震に危險を感じつゝ午前八時頃宮津診療所へ到着し震災地後送重症患者の處置を爲す處へ第二及第三班到着したるを以て便宜上救護員の配屬を左の如く變更せり。

第一班　醫員　關　郁郎
- 書記　水島太一郎
- 看護婦　田熊花子
- 同　公原米子
- 同　椎原カツ子
- 同　西岡トラエ

第二班　醫員　毛利　一郎
- 技手兼書記　長坂　正興
- 看護婦長　今井すゑ
- 看護婦　北川ナラエ
- 同　畠中しづえ

第三班　醫員（京都府出張員）
- 看護婦　青山　俊惠
- 同　中島　壽子

以上の外看護婦二村ミキ、安村すて、三浦やゑの三名は公會堂援助として殘留せしめたり。

是より先き宮津診療所に常備せる救護醫極の內容を充實すると共に書記は震災救護本部（宮津警察署內）に赴き救護に向ふべき與謝郡內の被害地を聞合はせたるに主任者は部內は既に其の手當整備し必要なきを以て中郡峰山に向ふべしとのことなりき。夫れより更に山田迄自動車にて進み之れより道路は龜裂と倒壞せる家屋並燒燼後の殘骸等にて車行不可能なるを以て徒歩にて悲慘の狀態を目睹しつゝ積雪二尺中間僅に開ける山道を人夫を得る能はざるが爲めに救護材料を各救護員分荷して困難なる進行を續け一路峰山に進み元郡役所の半潰家屋に入り翌九日多數なる重症患者の應急處置を施し十日峰山町出發丹波村字赤坂の罹災患者に同樣應急處置を加へ震源地鄉村に進み同村罹災患者の處置を終りて網野町元郡役所跡に出張せる府事務官に就き協議の上濱詰村に向ひたり。

十日深更（十一日午前）濱詰村着、破潰せる區長住宅の一部に救護所を開き十一日中同村の救護に任したるが晝夜の別なく活動したるを以て救護員の疲勞甚しく而かも各團體の救護班續々到着し協議を要するものあるを認め十二月濱詰發網野町にて第二、第四班と連絡し、第四班は止まり第二班と共に峰山を經て宮津へ歸着したり。

宮津にて二日間休養の上更に新第一班を編成し十五日宮津出發中郡長善村字長岡島田方（當時役場を置けり）に於て救護を施し同十八日同村字米川籾谷方に移轉し此處に駐在して救護に任すること前後十二日其間關醫員は交代して油谷醫員之に代り三月二十七日同所出發宮津に着して解散せり本救護班が取扱ひたる患者實數四百二十六名、治療日數七百六日なりき、更正班員の氏名左の如し。

班長　自十五日至二十日　醫員　關　郁郎
- 自廿一日至廿七日　同　油谷安次郎

ロ、第二班

本班は班長毛利救護醫員に看護婦四名（畠中、北川、椎原

二村）を引率せしめ自動車に乘せて京都支部を出發したるは八日午前一時十分なりき第一班と同じく丹波路を疾走し途中舞鶴診療所にて書記を同乘、宮津にて第一班に遞還し前記の如く編成を改め書記は人夫の徵發と食糧の準備をなさんとするも全く混亂の姿にてなす能はず已むを得ず少許の鑛詰を携へ大決心を以て前進す、卽ち第一班と共に自動車にて辛うじて山田村鐵道線路まで進み各救護員は材料を分荷し沿道山田村罹災患者の救護を行ひ積雪二尺の山道を喘ぎつゝ三重村に進み風を臨んで集ひ來れる多數の患者に應急處置を施せり時に午後三時なりき。

同村に於て篤志婦人（糸井ハルエ）の義俠なる援助に依り中小車貸與の便を得書記自ら轅を執りて漸く口大野村に到着す折柄急を救はんが爲めに北行する官民は絡繹蟻行せり然れども其の以上車體通ぜず且同村の被害甚敷多數の傷病者あるが故に村當路者の乞により戶毎に出張治療を行ふ時將に日沒に際し天候降雨に變じたるが朝食以來不飮不食疲勞加はるに從ひ漸く空腹と寒冷を覺ゆるに至る、然れども瞬時の休息も許すべきにあらず、各救護員は駐在巡査、村有力者と共に東奔西走假小屋に避難せる罹災患者の救護に徹宵したり。

又一面に於ては書記は第一班との連絡を保つべく午後七時より峰山町に急行、餘震尙甚しく修羅慘劇の巷に漸く踪跡を索めて連絡を通じ夜半に近く人跡絕へたる風雨の中を積雪を攫みて飢渴を醫しつゝ再び口大野に歸還せり。

救護所は同村小學校直前の民家表に行李を解き救護員は小學校前の通路に雨に濡れつゝ露營したり。

翌九日午前五時焚き出し握り飯にて昨朝來の空腹を醫し書記は僅に通じたる電信により支部へ人夫を要求したる後宮津町へ急行して救護材料を調辨したり、又各救護員は滯在して各戶に就き救護を續行せるが雨霰々甚しく雪解と共に各河川氾濫して進行困難なるを以て尙一夜を露天生活に委ねたり。

三月十日附近患者の繃帶交換を行ひ峰山町に到着せるも同町は罹災者他に避難し他の救護班活動せるに依り峰山停車場に於ける救護本部へ到り狀況を聞き配置を問ふ、折柄恰も吉原村當の方面より救護班派出を懇願し來り其の方面へ出動を依頼され同村字安古川五造方に至れば豈圖らんや、後發の第五班在りて醫員は熱發のため一同休養せり、居合せたる村長に派出の理由を告げたるに大に喜び根據地を作るべく申出で須臾にして字上菅に至りたるも受診する患者もなき狀態なれば二三の患者を治療して再び字安古川方に引揚げ同村西山方面へ往診治療を行ひ、尙同時に自轉車を携帶せる人夫を網野方面に派し第一班の消息を探らしむ。

然るに午後六時半頃支部續發の第六班は峰山救護本部の命を受け來り會す、又一方小學校の半潰校舍には帝大救護班ありて大々的宣傳救護を行ひ他に二箇の兵庫支部班來り會し救護班同一個所に集合したるを以て書記は同村配置の救護巡査に同行を求め風雪を突進して午後八時頃相共に本部に到り協議したるに明朝十時頃確實なる配置をなすべしとのことなりしを以て引返し狹隘傾斜せる民家に各班合して二十餘名の救

護員寒氣を忍びて舍營せり。

三月十一日本部の傳令は網野方面に出動すべしとの報を齎せり、當時既に第一班は橋詰に活動せるを探り、網野には第十六師團及京都府救護班ありて救護機關充實せるを知れるが故に最早必要なきを認め第六班を同町へ出發せしめ、第五班は吉原に滯在のことゝし同地を出發峰山街道に出でたるとき陸軍救護班、支部後發第七、第八班に出會ひ竹野郡島津村に千餘の患者ある情報到達し共同して救護を爲すべく協議し再び峰山を經て島津に到着せるに情報の如くならざりしも同村小學校跡にて救護を行ひ中途より陸軍班、第七、第八班は掛津方面に赴き、來合はせたる鳥取支部救護班と共に舍營し、翌十二日同村の救護は陸軍及第七、第八班、鳥取班に一任して出發網野町に於て第一及第四班と連絡し第四班は止まり第一班と共に峰山町を經て宮津着、十三日支部へ歸還したり本班の班員氏名は第一班の記事中に登載しあるを以て略す取扱ひたる傷病者二百十七名治療日數二百五十六日なりとす。

八、第　三　班

驛て八日午前二時を報するや鐵道省は震災救護關係者輸送の爲め特に本府知事の依賴に應じ臨時列車を發することゝなせり誠に恰好の時機なるを以て第三班として看護婦四名を派遣したり後醫員書記增派の豫定なりしが本班は同乘の本府派遣救護班に看護婦なく必至困難を感じ切に依賴されたるを以て同班に附隨せしめたるが宮津に着するや府は看護婦二名のみを要求せるに依り殘部の二名は宮津町に於て第一、第二班に編入し府救護班は中郡河邊村に終始駐在し三月三十一日救護療院救護所設置に至る迄奮闘し之に引繼ぎ歸京したり。（本班に配屬せる救護員は第一班の項に掲げたり）

二、第　四　班

斯くて支部にては徹宵救護班派遣に從事したりしが八日午前五時十分山陰線下り一番列車出發するを以て第四班を派遣したり本班は班長大竹療院醫員に書記一名看護婦三名を附隨せしめ先發の三班は何れも宮津を經て被害地に向ひたるを以て山陰線豐岡驛に直行し同町より熊野郡に入らしめたり積雪六七尺の河梨峠を踏破し熊野郡久美濱町に到る、同郡は概して被害輕少なるも府より先發の事務官（中村）と協議して卽日神野村に至る、途中字甲山に於て壓死者の屍體檢案を行ひ字浦明區長黒田德太郎方に根據を作り村内の巡回診療を行ふ。

翌九日夜來の豪雨にて各所の出水甚しく交通杜絶せるも近村田村へ巡回救護を施行十日湊村より短艇を艤して救護員を迎ふるにより直に出發同村字葛野松本林助方に於て避難せる重輕傷者に治療を加へ再び短艇に乘して字湊宮にある湊村役場に於て三時に亙り受診患者に治療を施し字葛野に引返し宿泊せり。

三月十一日同村出發竹野郡木津村に到着直ちに山際にある空屋を借用して救護所を開設救護に從事し重症者には往診治療をなせり。

三月十二日書記は網野町へ急行し同町にある救護本部出張所の意見を求むべく到りたるに偶然第一、第二班と邂逅し連

絡協議するを得たり。

三月十三日木津村出發網野町字下岡第六班に合したるも竹野郡内俗に川筋と稱する各村を巡回訪問しつゝ救護を行ふことゝなり同日行李を整へ十四日出發間人町字砂方に至り同區長の要求により區長の居宅に救護所を開き診療に從事し書記は自轉車に依り間人町及豐榮村の役場を訪問するに被害僅微なり、又一面上宇川、下宇川、方面を探査するに被害少なきを確め得たるを以て翌十五日深田村に至る。

深田村は被害甚しからざるも村長の希望あり村役場隣家に救護所を開設し救護を行ひたり而して書記は鳥取吉野兩村の狀況を調査せるに鳥取村の被害は大なるも神奈川縣救護班あり、吉野村は被害輕く其他の各所は既に救護力充實せる狀況なるに依り翌十六日出發引揚げたり、此の間救護したる患者實數二百九十一名治療日數四百三十七日なり、本班の救護員氏名左の如し。

書記　後藤三四郎
看護婦　渡邊宮子
同　多賀ひさ
同　石井千代

木、第　五　班

三月八日午後三時三十五分山陰線京都驛發を以て第五班を乘組ましめ震災地へ派遣したるが本班の班長は吉富療院附醫員なり。外に書記一名、看護婦四名に人夫二名を附隨せしめ同日宮津町に宿泊す。

第三章　救護班派遣に關する狀況

三月九日汽車尚通せず宮津より自動車にて山田村迄到り徒歩にて峯山へ向ふも村の道路側に一ケの中小車あるを見附け懇請して之を借り受け材料を積載して曳行するの便を得たるも雨益々激しく時には車を擔ふて難所を通過せるあり道路川渠は甚しく氾濫艇を沒するに至るも勇を鼓して前進し漸く峯山に到着せるに第一班出發後に屬したるを以て峯山驛に在る救護本部に至り指揮を請ひ吉原村に至り救護に從事せしが班長は疲勞と感冒とに依り十日は受診者に治療を加ふるに止まり而して第二救護班來着せるを以て往診を托せり。

三月十一日第二、第六班出發し村の一部分の救護を繼續したるも他に多數の救護班充實し看護婦も亦罹病したるを以て翌十二日一先づ宮津へ歸着し班長及罹病せる看護婦二名は歸還せり當時の救護員左の如し。

班長　醫員　吉富正一
書記　奥田爲太郎
看護婦　上條キヨノ
同　鈴木つた
同　吉原シカ
同　橋川とし

三月十五日久保園醫員之に代り更正第五班として宮津町出發、口大野驛迄自動車（汽車未開通）に搭乘口大野驛より汽車にて網野町にある救護本部出張所を訪ひ濱詰村に至り糸井音吉方に救護所を開設し隣村木津村を併せ同月二十一日迄救護に從事せしが震災救護療院の設置に伴ひ班長は歸京し書記以下は網野收容所に配屬せり其の救護を加へたる患者實數前後通して三百一名治療日數五百十日なり、更正班の救護員氏名

左の如し。

書記　奥田爲太郎
看護婦　石川キヨ
同　大橋まつ
班長　醫員　久保園善次郎　同　酒井高子
同　吉原シカ
同　助澤ふさ

ヘ、第六班

三月九日午後三時五十分山陰線二條驛發にて府立醫科大學附屬病院醫員有本廉に囑託して班長とし書記一名看護婦四名を隨行せしめ且人夫二名を加へ第六班として派遣したり本班は同日宮津町泊、翌十日山田迄汽車、山田より峰山迄徒歩、中郡救護本部出張所の指揮により吉原村に至れば既に第二、第五班あり翌十一日網野へ向ふべしとの指示を受け出發沿道丹波村字赤坂の罹災患者を治療し網野に着し其筋の指示に依り同町字下岡急造バラック内に救護所を開設し界隈の救護に從事したるが同月十四日既に滯在救護の必要なきに至れるを以て歸還したり此の間に於て取扱ひたる患者實數三百一名、治療日數三百五十一日なりとす、本班に配屬したる救護員は左の如し。

書記（支部雇）佐々本健吉
看護婦　給本組江
班長　醫員　有本廉　同　石原延子
同　鎌田ミツ
同　秋月秋子

ト、第七班

三月十日午前六時十五分山陰線京都驛發にて第七班を派遣したり本班は班長を京都帝國大學附屬醫院醫員村尾勝夫に囑託し書記は適任者なきを以て之を省き看護婦長一名、看護婦三名、人夫一名を附隨せしめ第八班と共同作業を繰る同日宮津町に宿泊し翌十一日「トラック」にて前進す途に竹野郡島津村救援に向ふところの第十六師團救護班と提携することゝなり峯山町に於て晝食を了り後ち徒歩にて島津村字島溝川に至れば第二班既に救護の最中にありしが故に相共に之に當り後同村字掛津にある師團の救護班の援助に赴く。

翌十一日島溝川に歸り十五日中同村全體の救護を續行し十六日一先づ歸京せり當時の班員左の如し。

看護婦長　佐々木キヨウ
班長　醫員　村尾勝夫　看護婦　岩本護子
同　田中延
同　西村石枝

更に三月二十四日同醫員林茂之に代り震災救護療院の部署に屬し宮津町より看護婦二名を引卒し汽車にて網野を經て海路濱詰村字磯に渡り（最も不便の地）救護に從事せしが四月二日網野收容所の管轄に移し出張診療を爲すこととなり看護婦は宮津町へ引揚げて更に他へ配置され、醫員は歸還せり。本班が前後を通算して救護したる患者實數二百七十六名、治療日數三百五十七日なりとす。後發班員氏名左の如し。

看護婦　田守レイ
班長　醫員　林茂　同　梅本その

チ、第八班

第七班編成と同時に第八班を組織し京都帝國大學附屬醫院醫員椎木潔を班長に囑託し看護婦四名、人夫一名を附隨せしめ同時刻を以て出發せしめたるが本班は第七班と全く共同連絡をとり竹野郡島津村に於て救護に從事せしが十六日を以て歸還解散し看護婦は再び他の機關に附屬せしめたり。取扱ひたる患者實數二百七十七名治療日數三百六十日に及べり。班員氏名左の如し。

看護婦　岩井崇
同　田中ノギ
班長　醫員　椎木潔　同　中川スナオ
同　石田よし子

リ、第九班

第七、第八班を成立出發せしめたる當日卽ち三月十日の午後一時二十八分山陰線京都驛發を以て第九班を編成す、班長には京都帝國大學附屬醫院醫員醫學博士挾間章雄を囑託し之れに看護婦五名人夫一名を附隨し出發せしめたり、同日宮津に一泊し十一日第十班と共に加悅谷に入り加悅町淨福寺に本據を構へ三河內村及桑飼村へ巡回診療を行ひたりしが十四日本班は三河內村妙見庵に移轉し十八日引拂ひ挾間班長歸京し他の班員は宮津に止まる。

十九日交代醫員澤田卓博士到着に付卽日與謝郡岩屋村に至り同村役場を本據となし市場、三河內を併せ巡回救療を行ひたりしが二十六日市場村に震災救護療院の救護所を設置され岩屋村を兼攝することゝなり之に引繼ぎ解散したり。班員は左の通にして取扱ひたる救護患者實人員六百三名、治療日數千八百三十二日なり。

看護婦　辻たき
同　皆木智惠子
班長　醫員醫博　挾間章雄（十八日迄）　同　福田靜江
同　川中千代
班長　同　澤田卓（廿六日迄）　同　小藪壽津子
同　森田サカエ
同　齋藤ミスエ

ヌ、第十班

第九班と同時に本班を編成し同時刻に京都驛を出發せしめたり。班長は京都帝國大學附屬醫院助手中村學文に囑託し第九班と歩調を一にしたりしが本班は十七日班長として醫員福井恒夫交替したるの外最後迄加悅町淨福寺に駐在し二十九日救護療院救護所設置と共に伊藤囑託醫員に引繼ぎ解散したり。救護したる患者實數三百九十一名治療日數七百四十四日なり。班員氏名左の如し。

看護婦　松村カ子
同　伊藤時子
同　谷まつ（十八日迄）
班長　醫員　中村學文（三月十六日迄）　同　宮本貞子（十八日迄）
同　廣瀨房枝
醫員　福井恒夫（三月廿八日迄）　同　中川スナオ（十九日ノ誤リ）
同　石田よし子
同　北川志津
同　眞松あきえ

ル、京都府救護病院援助班

三月八日午前八時第一班が宮津町に入り同町公會堂内に大正十三年以來設置したる支部療院宮津診療所に到れる際既に重症の外傷患者一名同館の會場に横臥せるを見て之れに應急治療を加へつゝある際宮津町開業醫に於て與謝郡内罹災重症患者を收容治療するの計劃を知り之れが救療機關として缺くべからざる看護婦の必要を察し第一、第二班として派遣したる救護員の一部と郡部診療所員とを同所に止めこれが援助を爲さしめたり。今其の援助に當りたる救護員及府より移管以前に派遣したる看護婦の氏名を登載すべし。

自三月八日至三月十四日	宮津診療所附	看護婦	三浦やゑ
同	第一班ニ從ヒ出發シタル綾部診療所附	同	安村すて
同	第二班ニ從ヒ出發シタル外勤部附(召集)	同	二村ミキ
同	舞鶴診療所附	同	竹野たつ
同	同	雇	武長昶
自三月十一日至三月十四日	福知山同	看護婦	足立ゑはぼ
	(學校衛生講習會ヨリ歸福直ニ來着)		
三月十五日支部出發		看護婦	北川ナラヱ
同		同	鈴木つた
同		同	公原米子
同		同	西岡トラヱ
同		同	土井ユキヨ
同		同	西川美惠
同		同	波多野清子
三月十七日支部出發		同	檜本賴江
同		同	鎌田ミツ
同		同	石原延子
同		同	秋月秋子
同		同	河原ノヱ

ニ、他支部、他團體救護の狀況

三月七日震災突發するや本社各支部は謂ふを待たず地方公共團體學校病院其の他各種團體にして苟くも衛生機關を具有せるものは救護班を組織して被害地に派遣せり當時平地にても積雪三四尺以上にして線路破壞のため汽車通行せざるを以て先發のものは京都より自動車を驅り又新舞鶴港より要港部驅逐艦に便乘を乞ひ宮津に上陸したるものあり翌八日に至り丹後山田驛迄汽車開通したりと雖も其以北は道路龜裂し車行する能はす救護員は徒歩にて積雪を踏み特に其の頃洪雨氾濫し沿道脛を沒する個所ありしを以て救護員の目的地に達したる困難は到底想像の及ぶ所にあらず又全燒せる町村には宿舍に供すへき家屋なく爲に救護員は一定の地方に滯留する能はず且其の慘狀激烈なるに驚愕して被害地を轉輾するの已むを得ざるに至りたるは救護史上將來の參考となすべき事項なり。當時の狀況前記の如くなりしを以て宮津町公會堂に於て地方醫師が重傷患者を收容して手術を加へたるものゝ外多く應急處置を施すに止り其設備を整へ刀を揮つて大手術を加へ又記錄を明にして治療に系統を立つるに至りたるは實に當支部が震災救護療院を設置したる以後のことに屬す。

1 本社の救護

本社の救護班は前記の如く當支部の十班を始めとして靜岡愛知、岐阜、富山、石川、福井、滋賀、三重、奈良、和歌山大阪、兵庫、岡山、廣島、鳥取、島根、神奈川の一府十六縣の各支部より多きは三個少きも一個合計貳拾四個の救護班を派遣して應援せり是等の救護班は最初は任意に適當の地點を選定して燒殘の民家、寺院、公會堂、學校等に宿泊し多くは午前在診し午後は巡回往診したり而して秩序略整ふに及び在宮津町本府震災救護本部の指揮に依りて救護すべき方面の擔任區域を定め救護の過不足なからしめ短きは一週間長きは二三週間滯在せり各班の職員は醫員一名若くは二名看護婦三名乃至十名書記一名人夫數名にして醫員は中途交代せるもの少からず救護器械及材料は他の救護班に比すれば固より完備せりと雖も藥品は中途消盡し京都支部より補充を受けたるもの少からず而して天候不良と戰ひつゝ救護に從事したるを以て疲勞甚しく爲に後續班又は當支部の救護所の設置を待つて之に引繼ぎ若くは患者減少し救護の必要なきを認め退去したり。本班にて救護したる患者實員數は八千二百五十八名治療日數二萬三百八十四日に達せり。

本社各支部救護班派遣一覽

支部名	班名	出發月日 歸着月日	救護員	救護場所	救護人員 實人品	救護人員 治療日數	摘要
大阪	第一班	出發三月八日 歸着三月十二日	醫員二、書記一、看護婦五、小使一、人夫一、	與謝郡山田驛附近及石川村	三八八	四五一	第一班、第二班ハ合同救護ニ從事セリ
同	第二班	出發三月八日 歸着三月十四日	同	同			
同	第一班交代班	出發三月十三日 歸着三月二十一日	醫員二、書記一、看護婦五、人夫三、	石川村	四四一	四六六	
同	第二班交代班	出發三月二十日 歸着三月二十八日	醫員二、書記一、看護婦四、人夫三、	同	三四一	四一七	三月二十七日醫員一、看護婦二、引揚タリ
神奈川	第一班	出發三月八日 歸着三月二十五日	醫員一、調劑員一、醫員助手一、事務員一、看護婦四、青年團員四、	竹野郡鳥取村	五五七	一、二九六	神奈川縣衛生課トノ合同事業ニシテ一部ハ三月十七日歸縣セリ 神奈川支部ヨリハ看護婦五名ヲ負擔セリ
同	第二班	同	醫員一、事務員一、看護婦四、青年團員四、	同			
兵庫	第一班	出發三月八日 歸着三月二十一日	醫員一、書記一、看護婦五、使丁二、	與謝郡市場、山田岩屋村、三河内村	八六六	一、八〇二	
同	第二班	同	同				

支部名	班名	出發月日 歸着月日	救護員	救護場所	救護人員 實人員	救護人員 治療日數	摘要
奈良		出發三月九日 歸着三月十八日	醫員一、書記一、看護婦三	中郡長善村、	一五一	四三五	
三重		出發三月九日 歸着三月十八日	醫員二、書記一、看護婦五、人夫二	中郡口大野村	一八八	四八一	
愛知	第一班	出發三月二十三日 歸着四月六日	醫員一、書記一、看護婦五、小使二	中郡吉原村	二一三	五八五	以上ノ内看護婦六名ハ四月六日以後モ京都支部ノ指揮ニヨリ救護ニ從事ス
同	第二班	同	同	竹野郡郷村	二〇五	五二一	
靜岡		出發三月二十六日 歸着四月八日	醫員一、書記一、看護婦四、使丁一	中郡峰山町	一九七	一、三七	
滋賀	第一班	出發三月八日 歸着三月十九日	醫員一、書記一、看護婦五	中郡奥大野村	二七七	二、〇五	
同	第二班	出發三月八日 歸着三月十八日	醫員一、書記一、看護婦九	與謝郡山田村、市場村	二九一	七三五	三月十六日看護婦四名減少
同	第三班	出發三月九日 歸着三月十八日	醫員一、書記一、看護婦八	山田村（三月十二日迄）長善村来川	二九二	九二一	三月十六日看護婦三名減少
岐阜		出發三月十八日 歸着三月三十一日	醫員一、書記一、看護婦四、傭人二	中郡新山村	三二五	一、二七	
福井		出發三月九日 歸着三月二十一日	醫員三、書記一、看護婦八、使丁一	同	二五六	九九九	
石川		出發三月二十四日 歸着四月四日	醫員二、事務員二、看護婦五、小使二	中郡丹波村	三〇八	八六七	縣トノ合同事業ニシテ醫員二、事務員一ハ縣ノ負擔トス
富山		出發三月二十六日 歸着四月八日	醫員一、書記一、看護婦五、人夫一	中郡峯山町	二七七	六九三	
鳥取		出發三月十日 歸着三月十六日	醫員一、書記一、看護婦四	竹野郡島津村	二五六	五二六	
島根		出發三月十五日 歸着三月二十八日	醫員一、書記一、看護婦一一	中郡峰山町	五二六	一、〇四五	三月二十四日看護婦二名歸還ス
岡山	第一班	出發三月十八日 歸着三月三十一日	醫員一、書記一、看護婦三、人夫一	中郡奥大野村	一八一	四七五	
同	第二班	同	同	竹野郡島津村	二九五	八〇五	
廣島		出發三月二十四日 歸着四月十三日	醫員一、技手一、看護婦三、人夫一	中郡奥大野村、常吉村	四一四	一、二〇七	
和歌山		出發三月十三日 歸着三月二十四日	醫員一、書記一、看護婦四、人夫二	與謝郡山田村、市場村四辻	二九二	八八九	
合計	二十四班				八、三六	二〇、六四	

各支部救護班活動の概況

大阪支部第一及第二救護班

本班は三月八日午後三時二十五分大阪驛發列車に投じ與謝郡宮津町に急行せり朝來曇勝なりし空は次第に雨模樣となり丹波路に進むに連れ雨益々強く寒氣次第に加はり罹災地の天候に思を馳せつゝ舞鶴驛にて宮津行無燈火列車に轉乘暗夜を縫ふて午後十時十五分宮津驛に到着暫時同驛に休養し宮津警察署に就き本班の來着を告げ情況を聽取するに宮津町は救護を要する程度の被害なく近く峯山街道に沿ふて與謝郡岩瀧口より加悦七ヶ町村就中山田村、市場村、加悦町方面遠くは中郡口大野村、峯山町、網野町方面其災害著しきものゝ如し、依て「トラック」二臺を借り受け吹雪を突て峯山街道を前進す進むに連れ道路龜裂、山岳の崩壞、民家の倒壞次第に加はる山田村に到着したるは九日午前一時なりき本村は其災害著しく山地は積雪尺餘火災の跡に餘燼尙消へやらず夜中にて詳細は不明なれども路傍の一端を以て此地一帶の慘狀は想像せられ救護を要すること多大なるを思はしむ依て此地に滯留することゝし倒壞を免れある丹後山田驛避難者の滿されたる建物の軒下に材料及看護婦一同は僅かに吹雪を避くるを得せしめ醫員書記は村內諸方面に馳せ廻り救護所開設の場所を物色するも殆んど全滅の狀態にして發見する事不能なりき漸くにして只一の鐵道踏切番舍の半壞せる屋內に家財道具其儘にて人なきものを見出し鐵道省關係の建物なるを以て驛長を訪ひ其意を通するに家族は同驛構內に避難しあり一時之を借り受け一夜を凌ぐを得たり然るに吹雪は風雨に變り餘震頻々として起り安眠するを得ず唯曉を待つのみ九日夜來の風雨は愈々猛烈となり東天の白むを待ち村役場を訪問するに破壞せられたる一隅に村長の茫然として自失せるを見るのみ不得已再び山田驛に驛長を訪ひ一兩日にても踏切番舍を借受けんことを乞ひ漸く承諾を得茲に始めて赤十字旗を立て大阪支部救護所を開くを得たり同時に宮津警察署に通報す依つて二個班を合同して之を三組に分ち一組は救護所に止め二組は村內及近接の部落へ巡回診療を開始せり巡回班は終日雨中を戶別に訪問診療をなし內一組は情報により約二里を距る中郡奥大野村に派遣し午後七時歸所せり午後に至り救護所に充てたる家人の避難先

より歸り來りたるを以て茲に又救護所を轉せざるを得ざるに至り薄暮隣接せる石川村(約一里を距る)西禪寺に移轉せり本村は山田村に比すれば死傷者少く直に巡回診療をなす茲に來丹後一同初めて疊上に安んじて喫飯するを得たり雨は夜に入り少康となり餘震の數も減ず本日の診療數百八名。

十日晴一同其の意を安んず本日は四組に分ち一組は村内及山田村、市場村、加悦町、桑飼村方面の巡回診療をなす薄暮より又々降雨雪を交へ夜に入り暴風雨となり、強度の餘震連續して不安一方ならず本日の診療數七拾九名。

十一日雪前夜來の風雨は雪となり寒氣亦強し本日は三組に分ち一組々救護所に他の二組は石川村、桑飼村、加悦町、三河内方面へ巡回診療をなす巡回班の一組加悦町避難所に於て診療の際士屋侍從の御慰問あり當地の患者は殆んど手當行屆き全班の必要なきものと認め其半數を明十二日引揚ぐる事とせり本日の診療數百拾九名。

十二日曇前夜引揚ぐるに決せし第一班は旅裝を整へ午前九時出發山田に向ふ殘留の第二班は其半數を救護所に其半數は村内及山田村、桑飼村方面へ巡回診療をなす本日の診療數四拾八名。

十三日雪天本日は同樣半數を救護所に半數は村内及市場村桑飼村方面へ巡回診療をなす午後交代班來着本日の診療數三拾四名。

十四日曇第二班は午前八時旅裝を整へ山田驛着午前十時五十分發列車に投じ午後三時四十七分大阪驛へ歸着せり。

第一班及第二班の組織左の如し。

第一班　醫員勝木直次、同稻垣太朗、書記永田正夫、看護婦今村コサヲ、林鑒、大原春子、吉田君子、高木サツキ、小使人夫各一人

第二班　醫員三折義利、同淺田豐、書記影山輝夫、看護婦長長島久子、看護婦馬屋原艶子、前田ヒデノ、甘利ハナエ、嶋倉靜子、小使人夫各一人

第一次大阪支部交代救護班

本班は三月十三日醫員辻本久好、同田中利邦、書記中井常藏、看護婦小野ゆき、增井とく、小原松子、原田ひさ、堀内テイ、及人夫三人を以て組織し午前十時八分大阪驛出發午後五時丹後山田驛着同五時三十分先發班の救護所たる石川村西禪寺に到着し事務の引繼を受け翌十四日より救護を開始せり卽ち醫員一名看護婦は殘留して門を叩くの患者を治療し其他は巡回班を組織し本村及山田、桑飼、市場、三河内、加悦の各町村を巡回診療せり此行程一巡約六里、書記、看護婦、人夫をして各戸別的に訪問せしめたり十四日正午京都府救護本部加藤衞生課長視察して慰問の挨拶あり二十日第二次交代班來着に付救護狀況診療區域等詳細地圖に依り說明引繼をなし翌二十一日丹後山田驛出發同日午後七時十四分大阪驛歸着解散せり。

第二次大阪支部交代救護班

本班は三月二十日醫員宮崎松記、同稻田稔郎、書記森田耐一、看護婦宮本伊登代、中北のぶ、黑田こやさ、岩田久子、

人夫三名を以て編成し午前十時十八分大阪驛發車にて與謝郡石川村に設置せる大阪支部救護所に向ひたり同日午後五時四十八分丹後山田驛到着同六時半石川村着直に前班より引繼を受けたり而して本村は被害の中心より稍遠かり當時にては二三の重症患者を除くの外は二三十名の輕症患者なるを以て結局前班の方針を踏襲し本村を中心として山田、市場、岩屋、三河内、桑飼、加悦の各町村又遠くは中郡奥大野地方を連日徒步若くは軍用自動車　京都府使用のトラックに便乘して巡回診療をなせり二十五日永尾主事出張來所したるを以て打合の上稻田醫員、宮本中北兩看護婦は二十七日歸阪せり然るに當日午後京都支部救護所を本寺に設置し醫員一名看護婦二名駐在することゝなりたるを以て之に救護事務全部を引繼ぎ翌二十八日午前十時山田驛出發午後三時四十七分大阪驛歸着せり。

神奈川縣支部救護班

神奈川縣支部にては三月十日同縣衞生課と合同して救護班を編成し午後八時十七分横濱驛發西下したり翌十一日午前〇時十五分靜岡縣に於て京都府知事より「宮津へ直行すべし」との電報を受領し午後〇時五十分宮津驛着直に震災救護京都府出張所に至り打合せたるに竹野郡網野町へ向はれたしとのことなりしを以て貨物自動車二輛を雇備し之に分乘し行程六里積雪三尺降霰紛々たる中を突きて午後六時峯山町着此地より以北は車馬の交通不可能なるを以て各自救護材料を背にし徒步にて午後八時危く倒潰を免れたる網野警察署に着握飯二個宛の夕食にて僅に空腹を忍び午後九時には元竹野郡役所に至り避難民と共に夜を徹したり翌十二日拂曉餘震あり人心惴々たる中に午前八時鳥取村に向ふ其沿道島津村湖畔附近の慘狀甚しく難路田圃の陷沒、隆起、龜裂の狀實に筆舌に絕せり午前十時鳥取村に着直に公會堂を以て救護所に充て開所せしに未だ準備整はざるに負傷者蝟集し其混雜名狀す可らず翌十三日よりは午前中外來者の診療に從事し午後一時より五時迄は和田野、木橋等の部落へ出張診療をなせり而して十七日迄繼續せしが同日交代班到着に付事務を引繼き歸途に就きたり本班は醫員以下二十二名を以て組織し之を二個班に分ち支部より參加したるは看護婦清田靜江、小俣キヨシ、大宮トシ、井波セイ、永瀨しづの五名なりき尙遠藤主事は三月十日出發一週間の豫定を以て震災地を視察したり。

神奈川縣支部交代班

本班は三月十七日先發派遣班より事務の引續ぎを受け從前の如く鳥取村公會堂を救護所に充て全班を二個に分ち每日各班交代に和田野木橋の各部落へ出張診療をなせしが同二十五日應急處置殆ど終了したるを以て二十五日撤去したり本班の組織は醫員以下十四名にして之を二個班に分ち勤務に從事したりしが多く本縣衞生課員にして支部より參加したるは看護婦吉田キノ、藤田秀子、熊坂ちゑ、角田澄子、永井かつの五名なりき。

兵庫支部救護班

兵庫支部にては三月七日午後六時二十八分激震ありたるも

通信機關破壞して情報を得る能はざりき翌八日午前一時に至り兵庫縣廳より本縣下の被害は比較的輕微にして京都府丹後方面慘狀を極むとの報を得たるを以て京都支部に照會したるも回答を待つ能はず依つて書記一名を京都に派遣し被害の狀況及應援の要否等を打合したり八日午後一時に至り京都支部より二個班を要求せられ而して應援班は津居山港より海路乘船して網野間人方面へ向はれたしとの要求なりき依て左記九名より成る救護班二個を編成したり。

第一班

醫員　西本賴次、　書記　石田一雄
看護婦　戸根きみ、增田しづゑ、日笠蔚子、光塵はるゑ、夏川とき
外ニ使丁二名

第二班

醫員　細部良次（自三月八日至三月十四日）
同　近藤洪（自三月十四日至三月廿一日）
書記　田代喜吉、　看護婦　田熊いつ、長谷部チヨシ、小林マツエ
横田歌子、湯川スエノ、　使丁二名

八日午後六時五十分神戸驛より乘車姫路にて乘替播但線を經て和田山に向ふ風雨次第に加はり豐岡驛通過の際同所駐在書記より航行不可能の注意あり依つて倉皇として下車す時に九日午前一時四十分なりき直に自動車を傭入れ出石郡資母村へ向はんとせしも京口橋墜落の爲め江原町を迂回し暗夜十一里を暴風雨難路と戰ひつゝ九日午前五時資母村字中山に着せり然るに本村より京都府へ達する道路には積雪尙三四尺あり通行するを得ざるを以て本村長の盡力にて雪透數名を雇入れ

班員は杖に倚り僅に身を支へ幾度か蹉跌を繰返し午後六時漸くにして與謝郡岩屋村役場に到着せり立ちながら夕餉を了りたる後第一班は市場村を巡療し第二班は本村役場内に救護所を設け且巡回診療をなせり翌十日第一班は岩屋、三河內の二村を第二班は市場村を巡回診療し一方田代書記を峯山及宮津に派して震災救護本部に打合せたるに一班は岩屋村に一班は中郡三重村に駐在せられたき希望なりき依つて岩屋村青年團の援助にて第一班は午後九時三重村役場に移轉したるに本村は被害少く救護の必要なしとのことなりしを以て十一日西山醫員は石田書記と同行し峯山出張所に打合せたるに二班共に岩屋村に駐在し本村、市場、三河內、石川の各村を巡回すべき要望なりき依つて直に歸還し兩班交互に出張診療したるが十九日京都支部震災救護療院設置せられ本村にも救護所を設けたるを以て、二十日引繼を了し二十一日出發神戸に歸還解散せり。

奈良支部救護班

奈良支部は三月九日左記八名を以て救護班一個を編成し

醫員　矢追秀一、　書記　福岡平行
看護婦　河合伸子、加藤たけ、住吉マサ子

直に震災地に派置し震災救護本部の指揮に依り中郡長善村字善土寺に出張し救護所を同地平井又吉氏の機業工場寄宿舍の一部に設置し同字及附近部落を巡回診療し十七日正午閉鎖同十八日奈良支部に歸還し解散せり。

三重支部救護班

三重支部は三月九日左記要員を以て救護班一個を編成し

醫員　松重重七、前原義行、　書記　高井由太郎、
看護婦長　青木とよ、　看護婦　吉野みつ、山口ふじゑ、梅前久子、
中村たみ、辻秀子、　人夫　二名、

卽日同地出發直に宮津町震災救護本部と打合せをなし其指揮に依り翌十日より中野口大野村河野源治方に救護所を設け毎日午前七時より午後七時迄救護に從事し其間時々附近村落を巡回して診療を加へ十八日迄繼續し同日撤去歸還解散したり同地方は被害甚大なりしを以て救護したる患者は比較的多數なりき

愛知支部第一救護班

愛知支部にては本府知事より同縣知事へ依賴に依り其の轉囑に基き三月二十二日午後十時左記第一救護班の編成を了し

醫員　井上棟樹、　書記　千賀貫一
看護婦　伊藤カガ、芳賀いま、永井とら子、牧野きん、矢島ふみ
使丁　二名

翌二十三日午前七時十三分名古屋驛出發與謝郡宮津町に急行せしめたり同地震災救護本部にては中郡吉原村駐在の希望なりしを以て同日午後九時吉原村着同村小學校に駐在の京都帝國大學救護班より引繼を受け二十四日午前六時より診療を開始したり而して急患を除くの外班內にては午前七時より午後七時迄診療に從事し往診は午後四時迄に申込ましめ時間外に行ふことゝせり斯くて四月六日迄繼續せしが京都支部震災救護療院本村出張所設立せられたるを以て後繼者佐久間醫學士に引繼き七日出發歸還解散せり。

同　第二救護班

本班は第一救護班と同時刻に同一の編成を以て組織し同時刻に出發せしが震災救護本部にて竹野郡鄕村駐在を希望したるを以て當日同村着奇蹟的に倒壞を免れたる神戸鐵道管理局米子建設事務所の半永久的バラック式建物に駐在したる京都府立醫科大學救護班より引繼を受け診療を繼續せり開始の當時重症患者は既に京都支部震災救護療院網野收容所に移送しありしを以て殘留の未治患者を引受け四月六日閉鎖し後始末は全部京都支部救護機關に委託し七日出發歸還解散せり本班の職員左の如し

醫員　北小路芳次、　書記　島田宗吉
看護婦　鈴木榮、左合みさを、伊藤この、佐藤みや、深谷しま子
使丁　二名

靜岡支部救護班

靜岡支部は三月二十五日午後六時京都府知事より本縣知事へ依賴の轉囑に基き卽時左記救護班を編成し

醫員　阿形修一、　書記　廣岡梧平
看護婦　太田千代、山本さかゑ、小田シゲ、高田いせ
使丁　一名（宮津ニテ雇用）

翌二十六日午前九時材料二十六梱包を携帶し靜岡を出發せしめたり本班は途中京都府廳京都支部及震災救護宮津出張所と打合をなし二十七日午後二時中郡峰山町着同町役場の燒跡なる警察官休所に使用したる幕舍內に救護所を開設し翌二十八日早朝より診療を開始せり當時災後の秩序未だ整はす餘震續發して作業困難なりしが隣接地に建設の「バラック」出來し

たるを以て三十日移轉したり爾來患者取扱上便宜を得受診患者頓に增加したりしが四月六日京都支部震災救護療院峰山收容所の急造家屋出來し救護力擴張したるを以て協議の上同日午後三時閉鎖し翌七日峰山出發四月八日歸還解散したり本班は多數の衞生材料を携帶したるを以て療院警察署及他支部救護班に分配したるもの少からず。

滋賀支部第一救護班

滋賀支部に於ては三月七日震災突發後數時間を經て丹後地方に大被害あるを察し同夜直に看護婦を召集し左記救護班を組織し

醫　員　重永定亮、　書記　清水孝夫
看護婦　安澤はつ、山口靜、細井滿喜、林マツコ、堂阪きく

北村主事之を引率して翌八日午前九時二十七分大津驛出發午後四時宮津驛に到着したり然るに道路龜裂交通機關破壞し暗夜の前進危險なるを以て其日は宮津町公會堂に設置せる與謝郡醫師會患者收容所を應援し此所に假泊し翌九日午前七時豪雨を冒し貨物自動車に便乘して前進したり然るに山田村以西は車行不可能なるを以て步行し洪雨の爲め脛を沒する水中を徒涉し午前十一時中郡奥大野村着同村倉垣小學校內に救護所を設置したり十日午後五時同縣警察部派遣救護班來着したるを以て爾後は之と共同し診療を午前午後に分擔し非番班は巡廻診療に從事したり而して飮食は同村の焚出を受けたるを以て救護作業に全力を盡し十九日京都府衞生課救護班に事務を引繼き同地を引揚げ同日午後八時十九分大津驛に歸着直に解散したり。

同　第二救護班

本支部は震害の甚大なるを知り三月八日更に左記救護班を組織し

醫　員　大西輝彦、　書記　大塚藤藏
看護婦　山崎かね、久保せつ、鶴鵜久美、山本ひで、夏川みさを、桐溪憲子、伊香靜榮、駒井勝子、小野たき、（三月十六日四名ヲ減ズ）

午後四時三十分自動車にて京都驛に向はしめたるが故障の爲め八時四十分京都驛出發十一時舞鶴に到着せり然るに前進の汽車なきを以て不得止客車內にて夜を徹し翌朝七時四十分宮津驛に到着したり救護本部と打合中第三班到着したるを以て之と同車し午前十一時五分宮津驛出發正午山田驛に到着下車したり時恰も豪雨盆を覆すが如きを以て軒下に停立し携帶の糧食にて空腹を醫し峰山へ前進せんとしたるも携行材料の爲め意の如くならず困惑の際軍用貨車來りたるを以て積載を依頼したるも橋梁破損の爲め車行するを得ず不得止又荷物を卸し方向を轉じて上山田村に入り午後二時半潰家屋を利用し救護所を設置したり翌十日第三救護班と協議し本班は市場村字幾地へ移轉し給養上の物資は之を宮津町に求め看護婦を三分して炊事、救護所勤務、巡廻救護を交互擔當せしめ十六日以降看護婦四名を減じ十八日救護所を閉鎖し患者は山田村に駐在の和歌山支部に引繼ぎ同日午後九時十四分大津驛歸着卽日解散したり。

同　第三救護班

本支部は尙應援の必要あるを認め三月八日左記救護班を組織し

醫　員　吉田俊夫、　書記　北川源二郎
看護婦　松井すみ、松本きさ、小西香津枝、木村琴、前川きみ、森澤智惠子
川口フサ、平居たきの（三月十六日以後三名ヲ減ズ）

九日午前四時三十分大津出發自動車にて京都驛に向ひ六時十五分同驛出發同十時半先發の第二救護班に邂逅し爾後同一行動を取り山田村字上山田にて救護所を開始せしが十一日當班書記峰山地方視察の結果中郡長善村字長岡の被害甚大にして救護力不足せるを知り十二時正午山田村の救護は第二班及他救護班に引繼き貨物自動車にて午後二時長岡小字米川に着卽時救護所を設置したり當地は被害甚大なるに加ふるに峰山街道貫通せるを以て多數の患者蝟集したり勤務方法は第二班と同じく看護婦を三分し尙十六日以降は三名を減し十八日事務を前日長岡に來着の京都支部救護班に引續き卽日同地を引拂ひ第二班と同行午前九時十四分大津驛着解散したり。

岐阜支部救護班

岐阜支部は三月十八日午前九時左記救護班の編成に着手し

醫員一名、書記一名、看護婦四名、人夫二名

同日午後二時岐阜驛出發翌十九日午前十一時中郡新山村到着倒壞を免れたる同村小學校二教室を救護所に充當せり當所には從來福井支部救護班診療したるを引繼ぎ二日より其任に當りたるが開所中は概ね午前七時より診療し午後は往診せしも又來診を乞ふものも少からず本村は被害比較的輕微なりしを以て震害に依る重傷患者は少數なりしも爾後の非衞生的生活に依る疾患者多く漸次來診を乞ふ者增加せしも同三十日其必要なきを認め救護本部に打合せ卽日閉所出發し翌三十一日午後三時岐阜支部歸着解散せり。

福井支部救護班

福井支部は隣接地丹後地方に於て激震ありして以て八日本社長の承認を得左記救護班を編成し

醫　員　竹田次郎、山口平治、近藤惠得、　書記　渡邊泰通
看護婦　片板とみ、藁德しず、山田みよ、下森ちゑの、重田キミ、
入力いさを、山本しん、戶田マサオ、　人夫　一名

九日午前四時五十分福井驛を發し大飯郡高濱町に至り同町よりは小濱町より差廻したる自動車四輛に分乘し豫め到着すべき目的地を舞鶴警察署へ傳へ置くべく京都支部に電照し宮津町に在る京都府救護本部に至り打合せたるに峰山町への交通は汽車不通の爲め殆んで杜絕し幸に翌十日早朝驅逐艦榊網野方面へ航行に付便乘すべしとのことなりしを以て午前十時短艇に乘り驅逐艦に至りたるに風波激烈にして上陸不可能の故を以て便乘を拒絕せられ不得止再び救護本部に交涉し救護員は汽車と徒步に依り材料は貨車を以て運搬することゝせしが道路龜裂前進困難にして一進一止の狀況なりしも漸く峰山町に到着し京都府出張所に就き打合せするに新山村に於て開始の希望なりしを以て午後七時指定地に就き十一日早朝より救護を開始せり本村は比較的被害輕微なりしを以て重傷患者少數なりしが漸次增加し災後の內科患者及附近の重症患者診療

を乞ふに至れり而して本班は往復一週間の豫定を以て出發せしも京都府救護本部及地方罹災民永く滯在を希望せしを以て更に延期し時恰も本支部副長の視察ありたるを以て打合せの上三日間延期とし二十日交代班岐阜支部救護班に事務を引繼き二十一日本支部に歸還し卽日解散したり。

石川支部救護班

本支部は三月二十三日京都府知事より本縣知事への依頼に基き本縣衞生課と協同して左記救護班を編成し醫員二名及事務員一名の給與は縣の負擔とし看護婦及書記の給與並救護材料は支部の負擔とし二十四日午後一時を以て支部に參着せしめ同日午後十一時金澤驛を出發せしめたり。

班長　石川縣技師、村田常一、　醫員　同縣警察醫池田信吉
事務員　巡査部長林與次郎、　書記　支部技手戸部元大郎
看護婦　中田金、高崎もと、塚本瀧、山森初重、本國喜久代、使丁　一名

二十五日午前十時二十分宮津驛着直に宮津町なる救護本部に至り京都府衞生課長に打合せたるに峰山町附近丹波村に駐在すへく希望したるを以て直に出發午後一時丹波村役場着同村當局と打合の上役場內に救護所を開設し翌二十六日より診療を開始せり同村には從來字矢田に京都市醫師會字丹波に大阪市醫師會の救護班設けありしが大阪市の分は二十五日本班到着と同時に閉鎖し京都市の分は二十七日閉鎖歸還せり當救護所に充てたる村役場は罹災民に對する配給品推積し且多數の村民出入し救護所として使用し得るは八疊敷の一室と患者待合所として一疊餘の地積を使用し得たるのみ依つて二十六日附近に約九坪の天幕一張を建設し二十七日移轉せり而して醫員一名及看護婦二名は村內四個部落を巡廻診療せり二十七日本縣衞生課長北條光丸來着し直に診療に從事し二十九日本縣防疫醫小幡一志、巡査部長吉岡藤作來着したるを以て北條課長、村田技師、林巡査部長は三十日出發歸還せり而して四月三日迄繼續せしが同日午前八時閉鎖し九時二十二分峯山驛發にて歸途に就き途中敦賀に一泊翌四日午後〇時三十分金澤驛着卽時歸部解散せり。

富山支部救護班

富山支部は三月二十五日左記救護班を編成し

醫員一名、書記一名、看護婦五名、人夫一名

翌二十六日午前九時四十分富山市を出發し二十七日正午峰山町着救護所は同町に建物なきを以て方錐形天幕二張を建設し一個は診療所に一個は班員の休養所に充てたりしが四月二日以後は京都府にて建設したる急造バラックに移轉したり診療時間は別に規定せず起床より就床迄之に從事し重症者及急病者は往診を行ひたり而して四月六日京都支部震災救護療院峯山收容所の建築落成し收容力擴張したるを以て材料及患者は之に引繼き午後五時三十分閉鎖し七日午前七時十三分峯山驛發八日午前七時三十分富山驛着歸部解散したり。

鳥取支部救護班

鳥取支部は三月八日震災に付京都支部宛應援の要否を電照したるに同九日宮津へ派遣を乞ふ旨廻電ありたるを以て卽時編成に着手したり其氏名左の如し。

醫員　福永儀親、　書記　戸井奎藏
看護婦　島岡壽野、德田靜子、猫山よし、森田千代子外ニ使丁二名

十日午前零時五分鳥取驛發宮津に於て救護本部と打合をなし翌十一日より竹野郡嶋津村の半壞せる小學校を救護所に充て同村に駐在の京都支部二個救護班並に陸軍省派遣二個救護班と協力して分擔を定め三個班は巡廻救護をなし二個班は小學校に於て成るへく廣汎なる區域に涉り神速機敏に救護したりしが本村の被害は震源地に近く且火災に罹りたるを以て最も慘烈を極め從つて多數の重傷患者に應急手當を加へたり三月十四日略處置終りたるを以て後事は陸軍省救護班に委託し翌十五日午前九時同地を引拂ひ十六日午後三時十三分鳥取驛歸着歸部解散したり。

島根支部救護班

島根支部は三月十四日午後十一時三十分救護員に召集電報を發したるが十五日午後二時三十分各員應召し直に身體檢査を行ひ支部副長より一場の訓示を與へ八時三十九分松江驛を出發せしめたり本班編成左の如し

醫員　古瀨久敬(三月廿一日歸還)、土江武彌(三月廿一日以降服務)
書記　澤田　敬
看護婦　川津モト(三月廿三月歸還)、森脇シゲノ(三月廿三日歸還)
原田フノ、飯塚マツノ、高藤シメ、大谷キクエ、吉川日出子、
松下たつ子、秦野貞子、藤田コナミ、細田ヌイ、

本班は十六日午前八時宮津町着救護本部に於て蜂須賀技師と打合の上午後二時貨物自動車にて出發午後四時三十分峯山町着同町字白銀に天幕二張を以て救護所を設置十七日午前八時より診療を開始したり本班は來患者の外重症者は一日一回若くは二回往診をなし且每日二回づゝ看護婦をして患家に就き繃帶交換檢溫、病狀視察等をなさしめたり而して三月二十七日迄繼續せしが同日之を閉鎖し午後一時同地出發翌二十八日午前六時五十分松江驛着歸部解散したり。

岡山支救護班

岡山支部は奥丹後震災の報傳はるや京都支部へ應援の要否を尋にたるに何分の依頼をなす迄見合せられたしとのことなりしが同月十七日京都府知事より本縣知事に電請あり其委託に基き卽時左記二個救護班を編成したり。

第一救護班

醫員　山本太郎、　書記　小出三津
看護婦　松岡英野、森卯眞、石原夏野、　外ニ使丁一名

第二救護班

醫員　川口　潤、　書記　津田猪四衞
看護婦　光森八重子、谷村ますよ、河田伊佐子、　外ニ使丁一名

前記二個班は十八日午後一時二十分岡山驛出發途中和田山にて一泊十九日宮津町着救護本部にて加藤衞生課長と打合せ第一班は中郡奥大野村小學校に於て救護所を開き第二班は竹野郡島津村に於て救護所を開設したり。

第一班が奥大野村に於て晝夜の別なく診療中二十五日交代班廣島支部救護班到着したるを以て事務を之に引繼き第二班に合併したり。

第二班は島津村字掛津に至る途中字島溝川にて日沒し且暴

風雨ありたるを以て行動意の如くならず不得止同地に一泊し翌二十日午前八時掛津着一避難小屋に救護所を開設したり然るに二十三日正午に至り網野町に於ける京都府出張所より島溝川小學校にて救護したる和歌山支部救護班を繼續すべく依頼ありたるを以て之に移轉し又二十六日に至り第一班の來り合併するあり掛津、遊、三津の三部落を往診區域とし同月三十日午後三時閉鎖し患者は京都支部震災救護療院島津救護所に引繼き卽日出發途中福知山町にて宿泊し三十一日午後四時三十一分岡山驛歸着卽日解散したり。

廣島支部救護班

廣島支部は三月二十二日京都府知事より本縣知事へ依頼の轉囑に依り二十三日左記救護班を編成したり。

醫員　平岡忠美、　書記　佐々木龍之助
看護婦　石田ノブ、宋田キヨ子、二木田アヤオ、　使丁　一名

二十四日廣島出發二十五日宮津町着同地救護本部の指示に依り中郡奥大野村小學校に於て救護所を開きたり同校には災害發生以來滋賀支部岡山支部救護班の駐在したりしが其後を引受け午前中は此所に於て診療を加へ午後は重症者を往診し且常吉村三重村に巡廻診療を行ひ四月十日重症患者は京都支部震災救護療院峰山收容所に送り輕症者は同口大野救護所に引繼き當日同地出發十三日廣島歸還解散したり。

和歌山支部救護班

和歌山支部にては三目十二日左記救護班を編成し

醫員　井上禎三、　書記　西村辰二
看護婦　海渡やゑの、小田ハルノ、瀬戸川靜子、中筋綾子、　人夫　二名

十三日午前八時五十分和歌山驛出發午後六時宮津町着救護本部に打合せ十四日午前京都府使用の貨物自動車に便乘し與謝郡石川村に到着せしが本村には他班の駐在せるを以て更に本部に交渉し同郡山田村字上山田に至り苦無神社に於て天幕二張を以て救護所を建設し同日午後四時より診療を開始したり而して別に亞鉛板一枚を以て賄所を設け又極めて簡單なる便所を造りたり同村には滋賀支部駐在したりしが其引揚後を引繼き十八日以後は市場村へ巡廻診療を行ひたり而して本日神社境内に府營のバラック六戸急造せられたるを以て借受け休養室兼食堂に充當したり衞生材料及班員の給養品は宮津町にて購入し又は救護本部より補給を受け困苦を忍んで服務せしが二十三日引揚に際し重傷者五名は在宮津町の京都支部震災救護療院に輸送し其の他の患者は京都府醫師會救護班に引續ぎ卽日歸還解散したり。

2　他團體の救護班

其他の團體の救護は多種多樣にして府縣市町の地方公共團體及京都帝國大學附屬醫院を始め官公私立病院、醫師會、藥劑師會、陸海軍衞生隊、遞信局、鐵道省、新聞社、保險會社、宗教諸團體より派遣せるもの合計約九十班に及べり就中官公立病院及官公署の派遣に係るものは救護の各機關及衞生材料整頓し沈着に機敏に活動して應急處置を施すに遺憾なかりしと雖も其の他は醫員、看護婦、事務員等の各職員完備せず又多くは衞生材料不足して各所に轉輾し出張日數短きは數日永きも十日に滿たざるものあり而して出入交替異動頻繁にして救護本部に於て之が統一を保つに困難なりしと雖も咄嗟の際傷病者に慰安を與へ救護したる功勞は偉大なり取扱ひたる患者は延約一萬五千人なりとす。

第四章　三月十九日以後に於ける京都支部施設救護機關の狀況

震災救護應急の施設一段落を告ぐるや當支部は爾後一切の救護を負擔するの計圖を定め半永久の設備をなせり卽ち宮津岩瀧、峯山、網野、の四ヶ町に患者收容所を設け加稅、市場山田、三河内、岩屋、石川、桑飼、口大野、吉原、丹波、河邊、鄕、濱詰(磯)、島津、鳥取、木津、の十六ヶ町村に救護所を置き之を總稱して日本赤十字社京都支部震災救護療院と稱し別に支部出張所として宮津町字鶴賀の立野運送店を借受け支部書記を派遣し療院事務員を兼務せしめ前記二十ヶ所の統轄文書の往復通信衞生材料患者需給品の配給等をなさしめたり。

院長は京都府立醫科大學長淺山忠愛に囑託し別に醫務を同學教授河村叶一、同鈴木正次、同助教授松永周三郎に囑託し醫員調劑員は主として淺山院長の推選に基き同學附屬醫院の醫員調劑員に囑託し不足の分は地方開業醫を以て充當し而して事務長は元堀川警察署長警視藤田則國に囑託し事務員は當支部より技手兼書記一名書記二名雇一名療院より書記一名雇一名を派遣して兼務せしめ其他元郡役所書記町村役場書記等を臨時採用して執務したり。

看護婦長及看護婦は主として當支部所屬のものを以てせしも尙不足せるを以て本社長に電請して五十名派遣を依頼せしが社長は愛知、滋賀、三重、福井、大阪、兵庫、鳥取、和歌山の八支部及本社病院に命じ六名若くは七名づゝ出張せしめられたり今各所に於ける職員の配置を一表にするときは左の如し。

日本赤十字社京都支部震災救護療院職員表

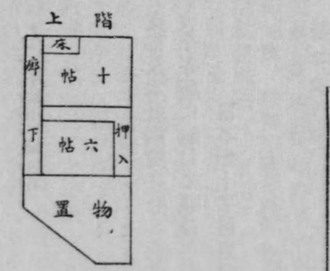
個所	院長	醫長	醫員	調劑員	事務長	事務員	看護婦長	看護婦	傭人	運轉手	計
療院本部	一	—	—	—	—	四	—	一六	三	二	二二
宮津收容所	—	一	二	一	—	二	一	六	九	—	三二
岩瀧收容所	—	一	一	—	—	一	—	六	二	—	二一
峰山收容所	—	一	三	一	—	二	一	八	五	—	三一
網野收容所	—	一	三	一	—	二	一	一三	五	—	二六
市場救護所	—	—	二	—	—	一	—	七	一	—	一一
口大野救護所	—	—	二	—	—	—	—	八	一	—	一一
島津救護所	—	—	二	—	—	—	—	六	一	—	九
石川救護所	—	—	一	—	—	—	—	二	—	—	三
桑飼救護所	—	—	一	—	—	—	—	二	—	—	三
加悅救護所	—	—	一	—	—	—	—	二	—	—	三
三河内救護所	—	—	一	—	—	—	—	二	—	—	三
山田救護所	—	—	一	—	—	—	—	二	—	—	三
吉原救護所	—	—	一	—	—	—	—	三	一	—	五
木津救護所	—	—	一	—	—	—	—	二	—	—	三
丹波救護所	—	—	二	—	—	—	—	五	—	—	七
河邊救護所	—	—	一	—	—	—	—	三	—	—	四
鳥取救護所	—	—	一	—	—	—	—	三	—	—	四
鄕救護所	—	—	一	—	—	—	—	二	—	—	三
岩屋救護所		市場救護所ヨリ兼務									
濱詰(磯)救護所	—	—	一	—	—	—	—	二	—	—	三
計	一	四	二六	三	一	三	三	一〇四	二六	二	一八六

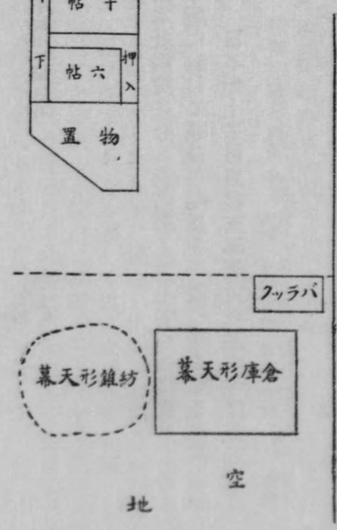
前記職員は職員の事故に依る交替異動あり又患者の減少するに隨ひ漸次減員せしが其の最充實したる際の員數を示せるものとす。

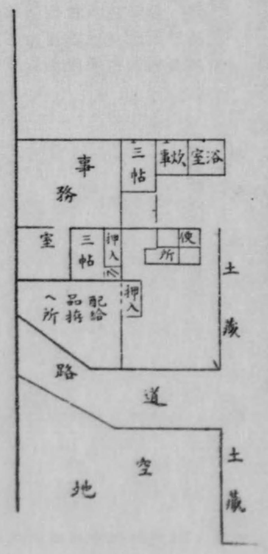
而して前記二十ケ所に於て取扱ひたる患者實數は一萬二千三百六十七名治療日數八萬八千五百六十七日に達す。今各所に於ける概況を述ぶるときは左の如し。

イ、療院本部並に支部出張所

三月十五日支部書記一名(鈴木)を先發せしめ支部出張所設置に適當なる場所必要に付諸所捜索の末宮津町役場大江書記の斡旋により同町字鶴賀の海岸に電話の取り付けある元立野運送店跡の一戸を借受け之を充當せり、翌十六日より最初第一班に屬して出動し休養中の郡部診療所書記一名(水島)と共に本社より贈送の救護材料到着を待ちつゝ殘留救護班の連絡斡旋に從事せしめたりしが、三月十九日小林本社囑託の來着と共に技手を派出し救護に關する一切の業務を擔當せしめたり次て震災救護療院本部を此所に置き三月二十三日藤田事務長着任し總て被害地方に於ける救護事務は此處に於てなさしめたり、卽ち左圖の如く階下を事務室に、階上を應接室、事務長室に、隣接せる區劃外の土間を配給品の捗へ所、別に道路を隔てゝ東方にある「バラック」を利用し、尙天幕二張を建てゝ配給材料を格納せり。







此地右方(南)二百米突にして宮津停車場あり、宮津收容所へは僅に三百米突、左方は廣き空地を以て海岸に面し實に至便の地たり而して多數の收容所及救護所の開設に付之が交渉を始め官憲との協調、救護材料の調辨供給、救護員の配置頻繁なる往復送迎、食糧品の購買配給等實に多端を極めたるも關係諸員の誠實熱心なる努力と材料の取扱に熟練せる藤田醫工の眞摯なる援助とにより着々進捗し順調に經過したるが土地の狀況より罹災患者の增減等を精査熟慮し別表の如く三回の整理を行ひ六月十五日救護機關を閉鎖して當面の殘務整理を行ひ六月三十日全く本所を撤廢するに至れり。

救護機關第一次整理表

所別	醫長 現在	醫長 新規	醫員 現在	醫員 新規	調劑員 現在	調劑員 新規	看護婦 現在	看護婦 新規	備考
宮津收容所	一	一	二	二	一	一	一六	一二	活用上丹波救護所付看護婦四人ヲ引上ゲ缺員補充ト共ニ雜務トス
峰山收容所	一	一	三	三	一	一	一九	一〇	醫員一人調劑員一人看護婦五人ヲ減ジ郷
網野收容所	一	一	三	二	一	一	一三	一八	救護所ヲ雜務セシム
岩瀧收容所	一	一	一	一	一	一	六	五	看護婦一人ヲ減ジ山田救護所ヲ雜務セシム
市場救護所	一	一	一	一	一	一	七	五	看護婦二人減、岩屋救護所雜務及附近町村ノ外來ヲ受診セシム
口大野救護所	一	一	一	一	一	一	五	三	醫長一人、看護婦三人ヲ減ズ
島津救護所	一	一	一	一	一	一	六	三	看護婦二人減ノ外島取救護所醫員削減ニ付雜務トス
山田救護所	一	一	一	一	一	一	八	六	醫員一人、看護婦二人ヲ削リ岩瀧ヨリ雜務セシム
吉原救護所	一	一	一	一	一	一	二	一	
郷救護所	一	一	一	一	一	一	三	三	
石川救護所	一	一	一	一	一	一			全部網野ヨリ雜務
桑飼救護所	一	一	一	一	一	一			罹災患者一人ヲ殘スモ岩瀧ヘ收容シテ廢止
加悅救護所	一	一	一	一	一	一			罹災患者ナキニ至リタルニ依リ廢止
三河内救護所	一	一	一	一	一	一	二	二	同右
岩屋救護所	一	一	一	一	一	一	二	二	同右
河邊救護所	一	一	一	一	一	一	二	二	全部市場ヨリ雜務
丹波救護所	一	一	一	一	一	一	三	三	罹災患者ナキニ至リタルニ依リ廢止
島取救護所	一	一	一	一	一	一	四	四	看護婦ハ峰山收容所ヨリ雜務
木津救護所	一	一	一	一	一	一	五	五	醫員看護婦全部ヲ削リ島津救護所ヨリ雜務
磯救護所	一	一	一	一	一	一	二	二	罹災患者ナキニ至リタルニ依リ廢止
									網野收容所ヨリ雜務

所別	醫長 現在	醫長 新規	醫員 現在	醫員 新規	看護婦 現在	看護婦 新規	傭人 現在	傭人 新規	備考
計	七	六	三	一三	三	二	一〇三	六一	
增 △減	—	△一	—	△九	—	△一	—	△四一	

救護機關第二次整理表

所別	醫長 現在	醫長 新規	醫員 現在	醫員 新規	事務員 現在	事務員 新規	看護婦 現在	看護婦 新規	傭人 現在	傭人 新規	備考
宮津收容所	一	一	二	二	二	二	一一	一一	七	五	傭人二人減
峰山收宮所	一	一	三	三	二〇	二〇	一〇	一〇	五	五	
網野收容所	一	一	二	二	八	八	五	五	四	四	醫員看護婦ヲ減セザルハ郷救護所兼務ノ爲、傭人一人減
岩瀧收容所	一	一	一	一	五	五	二	二	二	二	係員ヲ減セザルハ山田救護所兼務ノ爲
市場救護所	一	—	一	一	五	三	一	一	一	一	醫長一人、看護婦二人減
口大野救護所	—	—	一	一	三	三	一	一	一	一	
島津救護所	一	—	一	一	六	三	—	—	一	一	醫長一人、看護婦三人減、傭人女一人增
山田救護所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	岩瀧收容所ヨリ兼務
吉原救護所	—	—	一	—	三	—	—	—	—	—	廢止 罹災患者ナキニ至リタルニ依ル若シ後發患者アルトキハ峰山ヘ
郷救護所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	網野收容所ヨリ兼務
岩屋救護所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	廢止 開業醫アリ、患者發生ノ場合ハ市場ヘ
丹波救護所	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	廢止、開業醫アリ、同上峰山ヘ
鳥取救護所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	廢止、開業醫アリ、同上島津ヘ
磯救護所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	廢止 但シ網野收容所醫員特志ヲ以テ時々往診シ居レリ
計	六	四	一三	一一	六一	三二	三三	一九	一〇		
增 △減	—	△二	—	△二	—	△八	—	△三			

救護機關第三次整理表

所別	醫長 現在	醫長 新規	醫員 現在	醫員 新規	事務員 現在	事務員 新規	看護婦 現在	看護婦 新規	傭人 現在	傭人 新規	備考
宮津療院	一	一	二	一	二	二	一一	七	五	三	醫員一人、看護婦四人、傭人二人減
峰山收容所	一	一	三	三	二	二	二〇	二〇	五	五	看護婦ニ餘裕ヲ生スルトキハ隨時適當ニ減員ノ見込
網野收容所	一	一	二	一	二	二	八	六	四	二	醫員一人、看護婦二人、傭人二人減、郷、島津、兩救護所兼務
岩瀧收容所	一	—	一	—	一	—	五	—	二	—	廢止 未治患者一名ハ宮津ヘ移送
市場救護所	—	—	一	—	—	—	三	—	一	—	罹災患者ナキニ至レルヲ以テ廢止
口大野救護所	—	—	一	—	—	—	三	—	一	—	同右
島津救護所	—	—	一	—	—	—	三	—	一	—	救護員ヲ全廢スルモ開業醫ナキニ依リ網野存置期間同所ヨリ隔日往診
郷救護所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	同右
山田救護所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	罹災患者ナキニ至レルヲ以テ廢止
計	四	三	一一	五	七	六	五三	三三	一九	一〇	
增 △減	—	△一	—	△六	—	△一	—	△二〇	—	△九	

茲に以上の期間中本部に於ける職員氏名、事務長の手記せる日誌及同事務員の記錄したる日誌(重複のものは省く)を登載して執務の一般を窺ふに便ならしむ。

職員表

到着月日	轉出月日	職	氏名	摘要
三月廿二日囑託	六月三十日	院長	淺山 忠愛	府立醫科大學長
三月廿三日	同	事務長	藤田 則國	元堀川警察署長
三月十九日	同	事務員	長坂 正興	支部技手兼書記
三月十五日	同	同	鈴木源次郎	同 書記
同	三月卅一日	同	水島太一郎	郡部診療所書記、復歸
四月四日	六月廿八日	同	谷口松太郎	元警部
三月廿八日	六月三十日	同	武長 昶	郡部診療所雇

三月十九日　三月廿九日　同　三井三一郎　支部雇、市場ヘ轉ス

(日誌)

三月十六日　曇

本日當支部宮津出張所を設置す。

駐在員　書記　鈴木源次郎
同　同　水島太一郎

左の件京都支部に報告す。

一、出張所設置の件

本日宮津町役場の援助により驛前より海岸に至る約二丁の所に家屋を得、今日の場合他に適當の場所なく驛、救護本

部出張所（京都府）、公會堂（救護病院）等に接近し且つ電話を有し他に得難き場所なるを以て支部長の承認を受け之を借入るゝことに決定支部宮津出張所とせり。

二、本社より送付の荷物は（貨車貸切扱）未だ到着せず。

三、材料配給に關する件

本日迄の震災救護事務は未だ各分擔の定まれるにあらず依然として各種の救護班出動し居るを以て材料の配給は救護本部出張所に於て之を司り赤十字社より送附の分も昨日府に引繼たりと云ふ。（主事の命により水島書記之を行ふ）（之等の材料は、何れも府衛生課西地方技師の要求せるものなり）材料の件に就て、尚交渉を要するも本日は其の運びに至らず。

宮津公會堂に設置せるものは京都府救護病院と改稱せりと雖も未だ病院組織の經營に至らず内容は依然として應急の救護所なり、今後材料は支部宮津出張所宛送付するを要す

尚宮津診療所の所有に屬する物品中手術臺、藥品棚、調劑用器具の如き其の使用中のものは目下の收容患者の（重症六十名以上）現狀より、又今日迄の府との關係上今俄かに引揚ぐる能はず新たに府に新調せしむるか又は借用證にて供用するかの方法を採らざるべからざるものと思考す。

尚西地方技師より依頼せる本社より送付を乞ふ藥品到着の際は必す通知せられ度き旨申出ありたり。

四、看護婦の件

昨朝關班に看護婦五人（長善村）、久保園班に同五人（濱詰村）從屬出發せしを以て昨夜鈴木書記看護婦四人引率到着の際は支部看護婦三人殘留せるのみにて、計七人となれり。（病院配屬の看護婦の食餌は府負擔）

五、支部自動車（磨工同乘、江口運轉手操縱）午後四時到着、材料補充の爲關班より來れる武長雇及人夫を乘せ長善村長岡へ向へり。

六、通信連絡及材料配給の方法

支部自動車便を以てするより外方法なし、但し役場に公衆電話開通せるものは電話を以て通信するを得。

七、午前八時島根支部より古瀬醫員外十五名より成る救護班到着午後峰山に向へり、（主として内科の準備あり）又滋賀支部救護班は一部を殘留大部分引揚げたり。

八、水島書記加悦谷方面に出動の豫定なりしも物品其他の關係上中止せり、尚出張所駐在員は公會堂、救護本部（電話にては間に合はす）等を飛び廻りて絶へす交渉せざるべからざるを以て二人居らざれば受話に差支を生す尚小使（人夫にても宜し倉庫丁を兼務せしむ）の如きもの一人を要す以上。

本日は駐在書記二人、人夫二人救護病院より寢具を供用して宿泊せり。（貨車到着せず毛布なきにより）

三月十七日　晴

一、京都支部より電話命令により三河内村役場、加悦町役場へ電話をかけ左の件傳達方依頼せり。

「三河内村挾間班より看護婦二人及加悦町福井班の看護婦二人計四人を加悦町隔離病院（傷者收容しあり）配慮せしむる件」

二、京都支部の電話命令により在三河内村救護班醫員挾間博士に左の件使を以て傳達せり。

「十八日引揚の旨電報あり、醫員は引揚歸京差支なきも看護婦以下は宮津出張所へ殘留し置かれ度し」

三、午前十時二十分看護婦檜本賴江外四名到着、救護病院に配屬。

四、午後五時頃三河内班の辻看護婦打合に來る。

五、午後六時半鈴木書記打合せのため三河内班及加悦班に赴き午後九時半歸所。

六、府西技師と配給の件に付打合せをなす。

三月十八日　晴

一、加悦班看護婦交代の件に付支部と協議す（電話）本社送付の貨車未着。

一、兵庫支部技手三浦茂一郎使丁一名引率救護班に關する件打合せに來訪。

一、竹野郡濱詰班と通信せんと欲せるも不通。

一、兵庫支部と交代の件に付支部と通話す。

一、午後一時五十分挾間班三河内を引揚げ歸着。（醫員一、看護婦七、使丁一）

一、午後四時二十二分醫員挾間博士出發歸京。

一、午後水島書記加悦班材料補給のため出張。

一、今朝本社發送の貨車未着に付支部より梅小路驛を取調べたるに同驛を通過せず、北陸線によりしならんと米原驛を調査せしに十六日午後八時發七七五列車にて出發せりとの通報ありたりと、舞鶴驛は前二回驛より電話にて照會せるも何れも未着なりとの返答なりしが（列車番號と貨車番號の相違によりしか）前記の京都支部よりの電話により驛より取調べたる所舞鶴にあり、十時頃到着せり。

一、三重支部班引揚

一、明日醫博澤田卓氏十時頃到着の旨電話あり（挾間醫員交代）

一、看護婦中川スナヲ、石田よし子到着（加悦班交代員）

三月十九日　雨　夜風雨劇し

一、本社よりの荷物、貨車より出張所へ搬出、格納す。

一、午前十時二十分中川スナヲ、石田よし子を加悦班へ交代のため出發せしむ。

一、宮津療院及峰山天幕病院は支部の版圖に入りたるも準備整頓迄其儘繼續治療することとし協議す。

一、同十一時西原主事、澤田醫學博士到着。

一、午後〇時二十分小林本社囑託、長坂技手、三井雇到着。

一、午後〇時半岡山支部救護班二班到着、奥大野及島津村へ派遣せらる、又今朝岐阜支部救護班着新山村へ派遣せらる。

一、午後三時兵庫支部救護班と交代のため、澤田博士看護婦辻たき外六名と共に岩屋村へ出發。

一、午後五時半加悦班看護婦貞松あきゑ外六名歸所。

一、午後五時四十分救護醫員油谷安次郎到着。

三月二十日　風雨

一、午前五時四十五分支部より左の電話あり。
本社より電報「大阪支部より看護婦長一、看護婦六、滋賀和歌山、兵庫の各支部より看護婦六名づゝ派出を命せらる阪本副社長。
一、午前九時看護婦長二名召集の上送られたき旨支部へ電求す。
一、關醫員米川より來所。
一、小林囑託來所。
一、救護看護婦長佐々木キヨウ外五名午前十時十七分到着。
一、西原主事來所。
一、本日網野收容所陸軍班引揚に付引繼のため救護材料を準備す。
一、午後一時二十分在峯山、府衞生課長より新設せんとする病院、救護所に要する醫長、醫員は與謝郡以外の分は全部之を府大に求め内科外科の醫員を依頼するやう取計ふこと右支部長の命により傳達す。
一、午後小林囑託は視察の爲め長坂技手は隨行及網野病院を引繼を受くる爲め關醫員、油谷務員と共に出發。
一、午後一時五十分谷まつ外二名荷物整理の爲め（二日間往復共）大阪支部病院へ歸還せしむ。（本年卒業のもの）
一、午後二時五十一分看護婦長佐々木キヨウ外看護婦八名網野病院へ配屬出發。
一、午後四時トラックを以て救護材料を網野へ輸送す。（三井屋出張）
一、午後五時十七分松永府立醫大助教授到着。（病院其他醫員の件に付）
一、午後七時三十二分滋賀支部救護看護婦中島よね、外四名（本社派遣）到着、旅館に宿泊せしむ。
一、午後九時四十三分後藤書記、藤森看護婦長到着。

三月二十一日　晴

一、午前六時五十四分西原主事歸京。
一、午前九時小林本社囑託宮津救護療院を視察。
一、午前十一時二十分小林本社囑託歸東。
一、午前十一時三十分大阪支部書記森田耐一使丁藤田德次郎來訪。（石川村駐在救護班）
一、午後看護婦長藤森たけの宮津療院へ配屬。
一、滋賀支部本社派遣看護婦五名到着宮津療院へ配屬。
一、午後二時五十一分兵庫支部書記宇賀良次看護婦六名（本社派遣）を引率到着、旅館北野屋に宿泊せしむ。
一、午後四時二十二分發にて波多野清子外二名荷物整理のため大阪支部病院へ歸還せしむ。
一、午後五時十七分大阪支部書記青井金十郎、高藤看護婦長外看護婦六名引率到着、旅館北野屋に宿泊せしむ。
一、午後七時三十二分和歌山支部書記藤田楠松看護婦六名引率到着、旅館へ宿泊。
一、後藤書記峰山病院引繼を受くる爲め炊事具、糧食、救護材料を自動車に積載峰山へ出發。
一、武長雇（關班付）物品請求購入等のため來所。

一、水島書記長善村米川より歸所。
一、午後〇時十三分高藤看護婦長以下看護婦十八名峰山病院に配屬出發。
一、峰山病院及島津、口大野、市場の各救護所バラック建設に關する件電話を以て支部長の決裁を求む。
一、藤田則國氏に着任期を電報を以て照會す。
一、峰山病院へ救護材料、食糧、薪炭等を輸送す。
一、長坂技手打合の爲め京都支部へ出張。
一、水島書記救護班の件に付長善村米川へ出張、
一、三井雇同件に付岩瀧町へ出張。
一、濱田篤志支會長震災地慰問の爲め來宮。
一、岩本滋賀支部書記救護看護婦林まつこを引率來所、看護婦は直に宮津病院に配屬。
一、京都支部より峰山病院、島津、口大野、市場の各救護所にバラック建設の件決裁濟の旨通知あり、之を直に加藤府衞生課長、一井技師に通知す。
一、午後九時三十分藤田事務長より二十三日午後二時着任の旨回電あり。
一、網野病院より救護材料補充のため人夫來る。
一、濱詰村より引揚網野病院へ移りたる酒井看護婦來所齒痛のため歸京治療の件願出たるを以て承認す。
一、谷まつ外二名歸所す。
「事務長日誌」
一、震災地出動の決心と共に家事上の整理殊に留守番の備入

「事務長日誌」
一、早朝下山駐在巡査野澤飛鳥氏來訪、震災地出張中の知事の命なりとて傳達する所によれば自己に救護事務を擔當せしむべく出動せよとのことなりしが事の突然なるご要領を得ざる爲躊躇中午前九時三十三分下山驛着列車にて西原主事態々來訪せられ親しく悲慘の狀況を告げ決心を促されしか何等の抱負なきと家庭の事情上困難の點あり一日の猶豫を求め熟考せしに震災被害の甚大なる一身上の都合に依り辭退すべき限りに非ずと思料し斷然決意して快諾の旨を電話報告す。

三月二十二日　晴

一、午前十時二十五分青井大阪支部書記、藤田和歌山支部書記、出發歸任。
一、午前十時二十一分人夫一名京都より着す。
一、午前後藤書記峰山へ歸る。
一、午前十一時二十四分久保園醫員人夫一名濱詰より歸還、

れに焦慮準備其の他に終日忙殺せらる。

三月二十三日　晴

一、午前九時長坂技手京都より歸所す。
一、午前十時二十一分峰山療院醫長正木、醫員河内、（桜本、杉原兩氏は先着）調劑員山田、網野療院醫長島、醫員久石河野（外一名後着）調劑員安藤、岩瀧療院醫長宇多小路、醫員市川氏等府立醫大小林書記附添着任、
一、午後水島書記救護所位置撰定交渉のため市場、口大野、島津村へ出張、
一、午後二時四十七分網野、峰山兩療院附醫長醫員調劑員出發赴任。
一、同　時事務長藤田則國着任。
一、同　時愛知支部救護班二ヶ班到着、府の命に依り郷村及吉原村へ配置さる。
一、京都支部より左件電話照會あり。
「本社救護課長より電報あり、京都府知事より石川、富山の知事に救護班派遣方要求の由、貴部の救護計畫に關係ありや」と、
左の旨返電す。
「支部救護計畫に關係なし、支部計畫完成せば撤廢するものなり。（引揚げたる跡へ補充の分）
一、峰山療院へ物品輸送。
「事務長日誌」
一、午後〇時十七分下山驛發列車にて漸くに準備を了し震災地に赴く。
一旦海岸の事務所に落付き少憩の間もなく直に宮津警察署に出張中の村松警察部長並に加藤衞生課長を訪問し救護事務開始以來の説明を聞きたり。
此夜深更に渉り赤十字社支部出張員より支部の方針並に救護開始以來の經過を聽取す。
因に臨時救護の事務は本月十九日より全く日本赤十字社京都支部の手に移りしも尚救護班（他府縣）は各所に殘存し居れりと云ふ。

三月二十四日　晴

一、午前七時水島書記、市場、口大野、島津の各救護所（天幕）建設のため出張。（材料、人夫、トラック二臺）
一、午後宮津療院の事務引繼を了す。
一、午後藤田事務長、長坂技手は岩瀧救護療院の件打合のため同町へ出張、
一、午後岩瀧療院開設に付宇多小路、市川醫員赴任、材料輸送す。
一、午後岩屋村駐在救護班に救護材料及糧食補給。
一、午後波多野清子外二名歸所、土井ユキヨ感冒に罹り水野トノヨ來る。
一、午後七時三十二分京都支部より囑託醫員藤森鶴龜麿、林茂及看護婦山本タミ外二名到着。
一、午後三重支部書記平岡貞雄、看護婦長代理小竹マサ外看護婦六名を引率到着。

一、愛知支部救護班看護婦一名到着せるも配置場所へ一人夜行困難なるを以て宿泊せしむ。（府より依頼せる救護班付）
「事務長日誌」
一、加藤衞生課長より患者輸送用自動車京都市並に何鹿郡用二輛の處置に關し協議を受けたり。
一、療院に充當せる宮津公會堂を視察し左の措置を爲せり。
㈠震災の爲に大破し居れるを以て危險の有無に付審査方を府技術官に依頼す。
㈡收容傷病者に對し就任の挨拶を述べ慰問したり。
㈢同病院に收容せる傷病者は七十三名、之と略同數の附添人、職員及備入等を合すれば二百人に垂んとす、然るに便所の室數僅に三、洗面所、洗濯所便器置場等の設けなく炊事場も亦殊に狹隘にして擴張又は新設の要緊切なるものあるを認め之れが急施方支部長に禀議す。
一、午後岩瀧收容所を巡視す、東京市より出張せる醫學士戸塚文卿、日置村開業醫田井高成の兩氏より引繼を受け本日中に準備を整へ二十五日より支部事業として開始することゝなせり。
一、醫員林茂氏は竹野郡磯部落へ、藤森氏は中郡丹波村へ配置したり後更に藤森氏を竹野郡木津村に配置したり。
一、宮津、岩瀧、網野の療院又は收容所に配置すべき事務員は京都方面に於ける警察退職者等より選任すべく警務課長に依頼しありとの話ありしも事急施を要するにより可及的宮津町にて物色することゝなし福田町長の援助を得て大體に人選を了す、其の内森本喜平太（元當郡書記）のみは本日より服務したり。
一、此の夜加藤衞生課長より峰山收容患者は成はべる府の急造せる「バラック」に收容する樣取計ひたしとの希望ありたり、天幕を避けるの意と解す。
一、岩瀧收容所に配置すべき事務員は糸井岩瀧町長の盡力に依り同町糸井時藏を採用することゝなし本日より服務せしめたり。
一、宮津、峰山、網野の各所に配置すべき事務員は宮津町長の援助に依り凡て其の選任を終り明二十五日より服務せしむることゝなれり則ち左の如し。

宮津收容所　石井德藏
峰山收容所　川崎信太郎
網野收容所　三宅豐治郎

一、此の日淺山院長の出張を要求す。

三月二十五日　金曜　少雨

一、午前八時藤田事務長市場、口大野、峰山、網野、島津の各療院、救護所巡視、三井事務員隨行。
一、午前八時烏取支部より看護婦六名到着。
一、午前十時二十一分市場、口大野、島津救護所醫員六名及峰山療院交代醫員一名計七名到着。
一、午前十時三十分岩屋村及加悦町に駐屯の救護班に對し二三日間引揚中止方電話す。
一、午後〇時十三分藤森醫員及看護婦二名丹波村へ林醫員看

護婦二名濱詰村磯へ駐屯のため出發。
一、午後二時四十七分島津救護所醫員二名網野へ向け出發。
一、午後三時半長尾大阪支部主事來訪。
一、午後七時三十分京都支部より看護婦十名及福井支部より看護婦六名を小野田主事補引率到着。

「事務長日誌」

一、早朝より自動車を飛ばして峰山、網野、島津、丹波、口大野、市場等の各所を巡視す。
峰山收容所は全町焦土と化したる爲設備殊更に不備なるも府の急造「バラック」二十室(各四帖半)も附近にありて收容上支障なく患者の希望に依り之に收容せしむる方針を取れり、但し患者は天幕を完全なりと思料せるものか申出極めて少なし。
一、新任川崎事務員を同行し峰山收容所に配置したり。
一、網野收容所に於ては府出張官、警察當局並に町代表助役濱岡六右衞門氏等と救護上に關する打合せを爲したり。
一、島津村に於ては村長並に村有志者多數と會見し假役場附近に救護所(バラック)設置のことを談じ頗る歡迎を受けたり。
一、丹波村長を同村役場に訪問救護所設置の件を協議せり。
一、口大野村に於ては村長並助役等に面會し現下の狀況を聞取り救護所設置の場所を定む。
一、口大野村へ派遣すべき醫員中村喜代治、黑住勳及市場村へ派遣すべき醫員信太格二郎、阿原道雄等着任せしも時間の都合上明早朝赴任せしむる筈。
一、岩屋村救護班として勤務中なりし澤田博士の一行引揚方申出に依り市場より巡回診療をなすことゝせり。
一、療院、收容所、救護所とも風呂を設備するの必要を認め府出張所と協議して之れが準備に着手す。
一、患者輸送車使用方に付加藤衞生課長より協議ありしが京都市の分は必要多く何鹿郡の分は比較的其の用少なかるべき見込を以て京都市用のものを返し何鹿郡用車を使用する旨の伺を發す。
一、府一井技師に對し網野收容所に充て居れる舊郡廳舍危險豫防の方法に關し調査方を依頼し及峰山「バラック」急施方を懇談す。

三月二十六日　土曜　風雨

一、午前七時十一分市場、口大野、島津救護所開始各配屬救護員出發に付三井事務員市場へ藤田本社磨工口大野へ、水島書記島津へ共に出張、材料は「トラック」三輛を以て輸送す。
一、淺山院長、松永部長來所及宮津、岩瀧、峰山各療院視察事務長同行。
一、小野田福井支部主事補來訪。
一、加藤府衞生課長町村診療所に充當の「バラック」建設の件に就き來訪。
一、同朝支部自動車返還、江口運轉手歸京に付乘用自動車を

備入る。
一、網野、峰山、岩瀧の各療院へ材料及食料を輸送す。
一、岩屋村駐在支部救護班澤田博士一行引揚來所、午後四時二十二分澤田博士のみ歸京。
一、峰山療院より交代の榎本氏來所。

「事務長日誌」

一、與謝郡醫師會長の周旋に依り、同郡內未開設救護所の擔當醫員を定む、則ち左の如し。

石川村　鞭求馬
桑飼村　市田登
加悅町　伊藤源一
三河內村　稻田左膳
山田村　江口重雄

一、丹波村へ派遣したる藤森醫員一行は、同村の希望に依り退去せしを以て更に木津村に轉勤せしむ。
一、此の日各收容所及市場、口大野、島津救護所を除く他の十三ケ村の救護所用「バラック」を建設するに決定したる旨加藤衞生課長より通知ありたり。
右に對し僅に一巡事情を詳知するに由なきも必要薄しと思料し得べき箇所あるを以て案を具し之れが取捨を伺ひ出でたり。

三月二十七日　日曜　晴

一、午前八時三十分淺山院長網野療院巡視に付事務長同行。
一、石川、桑飼、三河內、加悅救護所開設に付醫員を囑託し、看護婦二人つゝ配屬せしむ。(不足せる看護婦は一時宮津療院附を配置す)
一、午前十一時石川縣衞生課長北條光九氏(地方技師)來訪。
一、午前富山支部、靜岡支部救護班到着。(府より依頼し縣より派遣の分)
一、午後網野、峰山、岩瀧の各療院、島津、口大野、市場各救護所、木津、磯の救護班に材料供給。
一、午後長善村米川に駐在せる當支部救護班一行引揚げ歸所。「事務長日誌」
一、此日淺山院長と共に中郡口大野村、峰山町、竹野郡鄕村網野町、島津村、及與謝郡市場村の各所を巡視す。
一、鄕村には愛知支部の救護班あり本月二十三日より二週間滯在の豫定。(期限は四月五日に當る)
但引揚けに際し、看護婦六人を殘し置き當支部に配屬せしむる交涉あるものとす。
同村には赤痢患者四名を出したる關係ありて衞生上特に注意を要す。
一、長善村救護班は本日限り引揚ぐるを以て口大野救護所より巡回診療を爲さしむることゝなせり、尙此の主旨は同村役場員並に駐在巡査を介して周知せしむる方法を執れり。
一、此の日竹野郡濱詰村磯に赤痢疑似患者二名發生し尙疑はしき患者ある見込に付特に注意を要す。
一、竹野郡內必要の個所に設置する救護所擔當醫員は交涉の結果同郡醫師會其の衝に當る事となり左の如く決定す。但

し救護班(他の)の引揚と同時に決行の豫定なり。

深田村　大道哲
郷村　伊藤某
木津村　坪井孝太郎
濱詰村　坪井孝太郎
鳥取村　梅田馨吉

一、中郡醫師會副長小谷直敏氏は吉原救護所設置の場合は其の位置を字新治に定めたしとの希望を述へ居れり。
一、市場救護所より岩屋村へ巡回診療を開始す。
一、何鹿郡用自動車は經伺の上二十八日より府の移管を受け使用することゝなる。
一、市場、口大野、島津の各救護所用「バラック」は契約濟の旨加藤衞生課長より通知あり。
一、各所へ配付すべき風呂の一部府の周旋に依り到着し峰山收容所は本日より使用したり。

三月二十八日　晴

一、油谷救護醫員午前六時五十四分出發歸郷。
一、石川村長落合金造氏同村救護の件に付來所。
一、綾部町助役遠藤憲治氏郡病院自動車使用上の件に付來所
一、滋賀支部看護婦武立久夫(島津救護所詰)鐵道院看護婦罷免の運命に至るべきを以て歸省の儀申出でたり。
一、長善を引揚げたる郡部診療所看護婦三浦、竹野、足立、安村の四名各所屬へ復歸す。
一、長坂技手山田村救護所開設に付看護婦、引率設備に出張其の節市場救護所を視察す。
一、本日自動車を使用すること三輛。
一、京都より大工中島千吉一行到着公會堂(宮津收容所)及本部の修理增築を命す。
一、加悦駐在支部救護班引揚げ旅館北野屋に宿泊せしむ。(福田醫員、看護婦三名)
一、二村看護婦靜養のため歸京。
一、三井事務員加悦谷方面救護所設置及其他の雜件交涉を終り歸部す。
一、午後十ケ所の「バラック」建設の件に付山虎組來る。
一、立花淺次郎(元救護班附屬人夫)京都より再び來り使丁となす。

「事務長日誌」

一、綾部町助役と自動車使用上に付協議せしに全く無條件にて宜しとのことなるも、謝意を表する爲め同町へ幾分の心付を要する勿論なりとす。
一、石川村長は救護所用バラック建設の希望を述べたり。
一、宮津療院に便所、浴場、洗濯場、便器置場、炊事場等の新設又は擴張の爲め公會堂建物並に土地使用の件を宮津町長に依頼し快諾を受けたり。
前項と同時に汚物掃除法令の關係緩和方に付宮津警察署及同町掃除巡視の諒解を得たり。
一、京大產婦人科教室勤務中なりし醫學士太田武夫氏は本籍地三河內村に歸來し何時にても勤務の申込に應ずる旨を聞く。
一、本府建築係實力技手に對し必要に迫れる救護所用「バラック」の急施方を依頼す。
同人の言に依れば其の完成は四月十五日頃なるべしと、斯くては甚だ緩慢、漸次其の必要なきに至るを以て緩急を謀り急施を要する分より着々進行することをも併て依頼せり
一、之の日支部より本月二十六日提出したる十三ケ所の「バラック」建築取捨に對する伺に對し「救護所に使用する建物は罹災町村に不利を來さゞる限り町村當局と熟議し現存物を利用し差支へなきも然らざる場合には「バラック」を建築すべし」との指令に接す。
右に依り加藤衞生課長と謀り、十ケ所分に着手することゝ爲せり、外三ケ所は現存物利用の見込十分なるに依る

三月二十九日　曇　後雨　火曜

一、醫員福田恒夫、人夫木村千代治歸京す。
一、西原主事、午前九時六分着打合の上事務長と岩瀧收容所を視察の上午後四時二十二分發歸京。
一、看護婦辻たき、川中千代を加悦救護所へ配置す。
一、三井事務員を石川加悦方面救護所付として市場救護所へ配置す。
一、福田靜江、土井ユキヨ京都より歸宮、
一、皆木智惠子、小藪壽津子、山田救護所へ出張せしむ。
一、岩屋村長坂根直右衞門救護上の件打合のため來所
一、鈴木書記午後五時四十一分歸京す。

一、靜岡支部書記廣岡梧平來所。(救護事務上問合のため)
一、吉田勤兵衞供給の自動車本日限り解約
一、三津善　同上
一、本日より加悦谷方面各救護所へ傳令を開始す、網野へは今井清三郎を配置す。

「事務長日誌」

一、神奈川縣支部より派遣の竹野郡島取村駐在救護班は明三十日中に撤退するを以て豫ての計畫に基き引續き救護所を設置することゝ爲し同郡溝谷村醫師梅田馨吉氏に依囑し救療繼續の準備を爲せり。
一、與謝郡岩屋村に對する巡回診療不行屆の嫌ある旨府衞生課員より內報あり、直に事務員を派遣し督勵を加ふ。
一、西原主事と救療實施に關する諸般の打合を爲し、午後同道岩瀧收容所を視察す。
一、本日十五銀行小切手にて始めて五千圓の送金を受け、卽時長坂技手と共に宮津銀行に預け入の手續を爲し自今凡ての支拂に對し小切手制度を取ることゝす。

三月三十日　水曜、風、曇、雨、

一、子の刻過より暴風鳴動甚しく、午前二時半事務長は療院へ出向、午前四時半風稍凪ぎ歸宿。(同時に人夫をも派遣す)
一、朝、事務長は桑飼村配置中川スナヲ、石田よし子、石川村配置松村かね、福田靜江、山田出張の皆木智惠子、小藪壽津子を同乘せしめ各町村視察バラック設置場所決定。
一、右配置に付宮津療院より假配置の看護婦四名歸院せしむ

一、京都在住滋賀支部所管看護婦木村琴京都支部に應召午後五時四十一分到着。
一、午後水島書記は丹波、周枳へ派出救護醫員交渉のため峰山へ出張せしむ。（自動車）
一、午後口大野、市場救護所醫長來所
一、石川支部技手戸部元太郎來所丹波駐在救護班の概況を語る。
一、立野組トラック使用す。
一、網野方面傳令今井清三郎來り午後七時三十二分發歸網。
一、午後十時過ぎより激震二回皆驚く。
一、峰山收容所川崎事務員來所。

「事務長日誌」

一、午前二時頃より強雨吹き荒み震災の爲め大破せる建物の危險を慮かられしを以て直に宮津療院へ赴き患者を慰問し其の儘警戒に從事して夜を徹す。
一、午前八時より交迭せる看護婦の配置を兼ね加悅谷方面の各村を巡視し町村當局と協議し「バラック」建築場所を左の如く決定す。

山田村	水戸谷峠上り口西入路傍
市場村	村役場西橫手
三河内村	村役場と道路を隔てゝ筋向ひの場所
加悅町	隔離病舍使用に付不用
桑飼村	村役場前
石川村	村役場入口の廣場

一、木津救護所詰藤森醫員事故歸京に付豫定計畫に基き濱詰村醫師坪井孝太郎氏を任用繼續執務の手續を執る。
一、鳥取村救護所附看護婦は島津救護所より派遣することゝなせり。

三月三十一日　木曜　晴

一、丹波村へ救護所用天幕建設のため「トラック」を使役人夫を派遣せるも同村寺院に設備することゝなり中止して歸る
一、藤田事務長口大野、峰山、丹波、周枳、鳥取、島津、網野の各所へ出張。
一、丹波村、周枳村（河邊村兼務）鳥取村に救護所設置。

配置、

丹波村	醫員　幸野國太郎（三十日付）
	看護婦　木村琴、皆木智惠子、小藪壽津子、
周枳村	（河邊救護所兼務）
鳥取村	醫員　梅田馨吉
	看護婦　岡村ゆり、渡邊貴美、

一、川崎峰山附事務員來所、峰山自動車に便乘歸峰せしむ。
一、鈴木書記、二村ミキ、午前十時十七分着宮。
一、河邊村へ出張中の看護婦青山俊惠、中島壽子（第三班）は府衞生技手に伴はれ挨拶に來り直に歸京す。
一、木津派遣の藤森醫員歸京の旨電話にて通知ありたり。
一、人夫森繁吉本日依願解傭す。
一、水島書記午後四時二十二分發郡部診療所へ復歸す。

一、鳥取救護所用諸材料は「トラック」を以て森繁吉を附し送附す。

「事務長日誌」

一、峰山收容所新築工事は順調に進行し豫定期たる四月五日には竣工し得るものと見込み居れり。
一、丹波村に派遣したる救護員は當分同村字矢田長安寺に於て救護に從事す。

同村に活動中の石川支部救護班は四月二日限り退去する豫定に付之が決行の曉は長安寺の救護所を適當の場所に移し更に救護員增員の必要を生ず。

一、竹野郡鄕村愛知支部救護班引揚げの場合は直に之に代るべき救護所開始の必要あり網野警察署に依囑し其時期を調査す。
一、坪井木津救護所醫員は同村開業醫兵頭氏に對する義理合上執務を躊躇せるや兵風聞あるに對し兵頭氏は目下府の防疫係を依囑せられ各村に亙りて執務せるの狀況を示し何等會釋の必要なき旨を申送る。
一、島津救護所の受療患者は昨今百名以上に達す、各村救護班撤退の結果なるべく當分益々多忙なるべく察せらる。
一、鳥取救護所は假設村役場の西隣に區有公會堂ありて使用上支障なきに由り本日より同所に移轉し從つて「バラック」建設の必用なきに至る。

囑託梅田氏は本日より勤務に就き、炊事は同村處女會之を引受け諸事好都合に運べり。

一、救護班撤退の後を受けたる中郡河邊、周枳兩村合併の救護所は河邊村役場內に之を置き周枳村傷病者は其の遠近に依り便宜同所又は口大野救護所を利用せしむることゝ爲せり。

四月一日　金曜　晴

一、朝傳令を加悅谷、峰山各地方へ飛ばして患者數を調査せしむ。
一、本日「トラック」二輛を使役す。
一、午前午後の二回吉原村駐在愛知支部書記來所。
一、午前六時二十五分頃强震あり爾來終日餘震頻々たりしが午後六時三十分再び强震ありて人心過敏甚し。
一、阪本副社長、西原主事午後〇時十三分着山嘉樓に宿泊。
一、小林囑託は京都驛に於て隨行の前山書記病氣のため一列車遲れ二時四十七分着宮、直に宮津療院視察。
一、阪本副社長は町役場を訪問後宮津療院及本部を視察さる（藤田事務長隨行す）
一、午後七時三十二分岩田清臣（醫員）到着指定旅館に宿泊。
一、午後宇多小路岩瀧醫長來所。
一、奥田網野附書記午後四時二十二分着來所打合せをなす。

「事務長日誌」

一、午前六時三十分强烈なる餘震あり直に各所異狀の有無を問合す。

其後餘震頻々午前中數十回あり人心恟々、其の爲め宮津警察署前廣場の如き俄に天幕を張り避難せるもの多數を占め

宮津測候所の觀測によれば本日實に百數十回の餘震ありしと云ふ。

然れとも其の結果は加悦町に於て半壞の家屋一戸倒れたる外異狀なきを得たりと因に與謝村にては餘震に驚き二階より飛降り三名負傷せりと云ふ。

一、午後二時四十七分列車にて內閣代表左の大臣一行來津。

町田農林大臣　秘書官一、屬一、
宮內工務局長　書記官一、山本技手、
潮　地方局長　社會局書記官一、屬一、
荒川大藏書記官　染田書記官、屬一、
京都府知事、古賀中村兩事務官、清水庶務課長、
秋山、中西兩屬、

以上一行は清輝樓を宿所とし直ちに岩瀧、加悦谷方面を視察し午後五時三十分宮津療院患者を慰問せらる。

一行退去の後各病室に就き大臣來訪の趣旨を說明して傷病者を慰撫激勵す。

一、右終りて支部長を旅館に訪問是迄の經過を報告し更に諸種の指揮を受く、而して本報告中赤十字社の經濟は淨財の結晶なれは深く其の趣旨を體し冗費の節約に重きを置くは勿論「バラック」の如きも町村當局と熟議し可及的現存物を利用する等努めて濫費を愼しむ旨の陳述に對し支部長は其の趣旨は可なるも節約は常にあり斯る非常の場合には先づ救濟に重きを置き「バラック」の如きも苟も必要あれば、どし〳〵建設すべしと極めて積極的の指示ありしは如何に長官が救護に熱心なるかを想せられ深く感激したり。

一、此の夜大臣一行に提出すべき書類の作製にて多忙を極めたり。

四月二日　土曜　晴

一、本社磨工藤田爲吉午前十時二十五分發歸東、滯在中眞摯熱誠援助せられたり。

一、阪本副社長一行岩瀧收容所を始め、山田、市場、三河內加悦、桑飼、石川の各所を巡視さる。（事務長東導）

一、醫員岩田清臣は河邊救護所へ、看護婦二村ミキは鳥取村へ配屬出發。

一、醫員小田榮、太田喜直（峰山杉原醫員と交代のため）來着

一、醫員中元慶太郎本日來着卽日網野收容所へ出發。

一、愛知支部收護班（鄉村）技手島田宗吉打合のため來所。

一、峰山傳令兼使丁として京都より北村太八到着午後七時三十二分發峰山へ向ふ。

一、本日乘用車二輛、トラック一輛及人夫を使役す。

一、磯派遣中の救護員林茂、看護婦二名引揚げ、林醫員は卽日歸京。

「事務長日誌」

一、午前八時三十分より副社長一行を東導し午後五時過歸津、副社長は山田、三河內、加悦に於て少年赤十字に對し震災に因める訓話を試みられたり。

一、本所の事務多端にして手不足を感するに依り元網野署長たりし谷口松太郎を聘すべく其の意見を聞きたり。

四月三日　日曜　晴（夕方より雨）

一、看護婦渡邊貴美の祖父母舞鶴町より來り現配置先迄自動車に便乘せしむ。

一、北野屋宿泊の太田醫員（峰山）小田醫員看護婦二名（丹波）を自動車にて配屬地へ送る。

一、阪本副社長一行東導のため藤田事務長午前八時より出發中、竹野各所を經て午後五時歸着。

一、本部內に浴室及所要棚の設備をなさしむ。

一、本日トラック二輛及乘用車二輛及び人夫を使役す。

一、島津救護所附看護婦林マッコ病氣のため歸宮、宮津療院へ配屬休養せしむ。

一、淺山院長來宮山嘉に宿泊。

一、丹波村派出小田醫員、看護婦二名、救護所の都合により歸宮。

「事務長日誌」

一、午前八時より阪本副社長一行と共に口大野、峰山、網野島津、鳥取、丹波、河邊等の各所を視察す。

一、峰山町及其の附近に於ける現在の救護班は富山、靜岡、愛知（吉原）の三班にして何れも本月六日を限り撤退する豫定なり、而して各班一日の救療患者數は各五十名內外なれば是等各班撤退後の峰山收容所は一日平均百五十名內外の外來患者增加を覺悟せさるべからずと思料せらる。

一、竹野郡鄉村愛知支部救護班は本月六日撤去の豫定。

一、丹波村字矢田に設置の救護所を視察するに既設救護員は巡廻診療中に係り新に着したる醫員及看護婦二人の一班は指示者なき爲め休養し居たり、故に之に對し丹波村の中心地點たる役場所在地に引揚げ幸野醫員の一班と共に活動すべき旨を示し同時に駐在警官に援助方を依頼し置けり。

四月四日　月曜　終日雨

一、阪本副社長一行午前十時二十五分發歸東。

一、福田宮津町長來所。

一、事務員谷口松太郎本日より出勤。

一、看護婦中島壽子到着。

一、峰山詰醫員杉原秀、太田醫員と交代の上來所、午後四時二十二分發歸京。

一、三輪利雄本日より使用（人夫）

一、午後淺山院長、藤田事務長と共に峰山へ出張、淺山院長は峰山驛より歸京。（午後三時十八分發）

一、小田醫員、看護婦二名再び丹波村へ出向す。

「事務長日誌」

一、旅館山嘉へ赴き視察後の講評及更に今後の計策を協議す

一、副社長出發後、院長府衞生課長、實力技手等と共に峰山收容所に赴き竣工に頻する新築「バラック」の設備に付視察し會議の上左の諸件を依囑す。

イ、外來患者用腰掛の用意。

ロ、患者室內輸送車の購入。

ハ、炊事場地盤の不滲透質設備。

ニ、外科治療室手洗場の擴張。

ホ、宿直室、看護婦室の疊入れ。
ヘ、患者室、事務室、宿直室等に棚の用意。
ト、食餌配給所通路雨覆の設備。
チ、汚物燒却場の設備。
リ、炊事場物置に棚の設備。
ヌ、隣接元郡廳舍の倒壞防止の設備。(府)
一、副社長は「バラック」建築の場所を極めて少數にて足れりとの意を洩されしが這は目今進行しつゝある建築上の計畫に至大の關係あるを以て加藤衞生課長並に實力技手と協議し峰山より歸途同技手は製作地たる市場に立寄り實地を調査したる結果として午後八時過島津、口大野、市場を除く外三ケ所則ち吉原鄉山田の三救護所に充つる部分の工事を進め他は暫く之を見合はす旨を答へたり、但し之に要する大工二十五人滯在中なるを以て至急何分の指揮ありたき旨を附加せり。
右趣旨は直に電話を以て支部と打合せたり。

四月五日　火曜　雨後曇

一、峰山收容所正木醫長の交代として古玉太郎博士來所、正午過任地へ出發。
一、口大野村醫師谷口海山氏を同郡適當の場所に招聘希望の旨與謝(內山)中(小谷)兩郡醫師會長と會議の上申出でありたり。
一、谷口事務員をして丹波村の救護狀況を視察せしめ吉原村に駐在の愛知支部救護班より引繼の件協議のため出張せしむ。
一、寶力府土木技手來所。(バラック建設上の件)
一、加藤衞生課長暇乞挨拶のため來所。
一、鄉村駐在愛知支部技手島田宗吉打合のため來所。
一、京都支部よりバラック建設の件(山田、吉原、鄉の三ケ所に建築し他は現存物を利用すべき旨の指示)電話通牒あり、卽時寶力技手に通知す。
一、本日各救護所への配給は何鹿自動車を使用せり。
「事務長日誌」
一、丹波村救護所を視察せしむる爲め谷口事務員を派遣す。
一、吉原村愛知支部救護班撤退するを以て豫ての計畫に基き峰山町佐久間醫師の出動を促がす爲め谷口事務員をして交涉せしめ快諾を得たり。
一、宮津療院收容患者慰安の意味を以て初めて蓄音機を聞かしむ皆大に喜ぶ。

四月六日　水曜　雨

一、藤田事務長、長坂技手人夫十名を引率峰山收容所授受及移轉のため出張途に丹波村救護所を視察す。
一、午後〇時十五分着大阪支部病院看護婦監督小畑あい來訪宮津療院を慰問し峰山收容所へ向ふ。
一、同時本社長の命による本社病院看護婦酒井はな外五名到着。
一、支部より電話にて岩瀧詰看護婦若林一江の代員を送り、網野詰助澤看護婦歸京せしむべき件、及滋賀支部所管看護

婦引揚の件通牒あり。
一、河村府大外科部長來着岩瀧を視察す。(長坂技手隨行す)
一、愛知支部派遣救護班、鄉、吉原の分本日引繼を受け、看護婦は各所三名づゝ居殘り更に本社派遣員となる。(吉原に駐在の分は現位置に止まり鄉駐在のものは夜間網野收容所に宿泊せしむ)
一、トラック一輛使役。
「事務長日誌」
一、峰山收容所に充當すべき「バラック」落成に付授受並移轉のため午前七時四十一分宮津驛發。
天候不良にして材料の運搬殊に患者の移轉に著しく困難を感したるも霽間々々を利用し人夫を督勵して午後三時漸く全部の移轉を了せり。後病室に赴き病舍新築の苦心、今後に於ける治療上の利益等を述べ併て災害地に對する府當局並政府の配慮に涉り懇諭したるに何れも感謝の意を表し頗る安心の態に見へたり。
一、丹波村救護所は村長との諒解必要なるを感じ特に注意し置きたり。

四月七日　木曜　雨

一、本社病院派遣看護婦酒井はな外五名を鈴木書記引率島津村へ交代のため出向。
一、滋賀支部派遣看護婦四名(武立久夫は親危篤の報により昨六日單獨出發)挨拶に來る。
一、午後四時二十二分左の四名に宮津療院に加療中の林マツコを加へ五名出發す。
一、藤田事務長は河村院長代理と共に吉原、峰山、網野、島津等へ出張、河村院長代理は歸路山田驛より乘車歸京。
一、看護婦森澤智惠子(岩瀧配置若林の代員)午後七時二十二分到着。
一、岩瀧配置看護婦山本たみ電話を以て歸京を願ひ出づ。
一、吉原村へ救護材料未着に付三輪使丁をして持參せしむ。
一、小畑大阪支部病院看護婦監督來訪。
一、市場救護所醫員阿原道雄交代申込のため來部。
一、同所配置三井事務員來る。
一、鈴木書記は網野より、木津、鄉村へ、救療事務打合せの爲め其儘出張す
「事務長日誌」
一、本月一日來餘震殆んど其跡を絕ち人心安定し居りしが午前四時前及六時前に稍强烈なる二回の餘震ありたり。
一、河村院長代理は此の日峰山に於ては瀧野元助役を往診したる外峰山、網野各收容所の重病者を回診したり。
一、貴族院議員の一行震災地を視察し峰山網野兩收容所患者を慰問したり其の氏名左の如し。

子爵　八條　隆正　　子爵　裏松　友光
子爵　鍋島　直縄　　男爵　藤村　義朗
男爵　有地爲三郎　　關　直彦
田中　數馬　　南　弘
田村　新吉　(鐵道省政務次官)　佐竹　三吾

四月八日　金曜　雨

一、森澤智惠子岩瀧へ配置出發す。
一、岩瀧より山本たみ及若林一江歸部午後一時五十分出發歸京。
一、山田へ出張する看護婦自動車にて送らしむ。
一、午後五時四十五分、午後六時五十五分强震聊心を寒からしむ、同九時四十五分三度目の餘震甚强く宮津療院へ駈付けたるも異變なかりき、事務長は深更迄患者を慰問す。
一、自動車破損のため福知山より職工を呼寄せ修繕せしむ。
一、トラック一臺を使役す。
一、療院小使稻岡正巳都合により本日解雇す。

「事務長日誌」

一、宮津理髮業組合は公休日に相當するを以て男女組合員十數名療院に來り收容患者の理髮を爲せり、本行爲は全く好意に出でしものにして本日は其の第二回に當り凡て無料なるのみならず男患者には「フケ」取り刷毛各一個宛、女患者には櫛及簪等を洩なく寄贈したり誠に奇特と謂ふべし。
一、宮津小學校男女職員三名は患者慰問の爲め宮津療院に來り蓄音機を聽かしめたり。
一、附添人中當局の厚意に感し自發的に炊事其の他の雜務を手傳ふものあるに至れり。

四月九日　土曜　曇

一、市場附阿原醫員歸京、忽ち其の日の事業に支障を來す直に支部へ代員派遣方電話にて要求す。
一、藤田事務長打合せの爲め宮津一番發列車にて上京。
一、中島壽子鳥取配屬出向せしむ。
一、山虎組のもの證明書受取のため來る。
一、午後府救護本部宮津出張所より治療用藥品消耗品殘品の引繼を受く。
一、三井事務員市場より來る。
一、岩瀧醫長より山本たみの代員要求あり。

四月十日　日曜　曇

一、山本三省氏來部峰山迄自動車に便乘す。
一、長坂技手救護事務指導のため岩瀧、口大野、吉原、峰山網野、木津、島津、鳥取、丹波、河邊へ出張。
一、府立醫大より丹羽喜隆氏、岩瀧在市川醫員と交代のため來部即日出向。
一、市場村長山本淺次郎氏來訪。
一、府より引繼を受けたる材料領收す。
一、府物資掛へ慰問品全部を引渡す。

四月十一日　月曜　曇

一、事務長午前十時十三分歸着。
一、岩瀧詰市川醫員歸京の途立寄り挨拶す。
一、小野宮津町役場員來部。
一、午後長坂技手加悅谷方面救護事務指導のため出張す。
一、山田救護所新築バラックへ移轉す。
一、本日トラック一輛を使役す。
一、森本事務員來る（宮津）。

一、峰山川崎事務員來り歸途は「トラック」に便乘す。

「事務長日誌」

一、口大野村醫師谷口海山氏は今回の罹災者なるが同村には支部の救護所ありて自然同氏の業務を奪ふ形となり大に困難せるやの聞へあり中郡醫師會よりも同人救濟の意味を以て何れかに採用方與謝郡醫師會長迄申出でしとの事に付其の眞否を取調ぶるに同醫師は三重支部の看護婦一名を伴ひ無料診療を標榜して活動し就職希望なしとのことを確む。
一、竹野郡深田村開業醫大道哲氏は豫てより就職を希望し又同郡醫師會よりの申出もあれば內山與謝郡醫師會長を介して他村勤務の條件を附し出動如何を照會せしに應じ難き旨回答に依り其の交涉を打切る。
一、療院勤務の醫員は何れも宮津町開業醫師交代勤務にして其の人員多數に上り勢ひ意見區々に岐るゝが故に之れが統一方に關し內山醫長に考慮を促す。
一、療院收容患者附添人中院內の雜務に從事し衷心感謝の意を表する等奇特者と認むべきもの左の如し。

峰山町　小西リツ　二十八年（家族多數と共に收容せられ其の恩義に感するもの）
桑飼村　長島とめ　二十年
網野町　佐竹ハル　十九年（處女會訓育の結果なるべし）

四月十二日　火曜　晴

一、鳥取支部派遣看護婦水口、別所、竹本の三名午前八時十八分發歸還す。
一、藤田事務長各所へ出張。（寫眞師同行す）
一、淺山院長明後十四日午前十時二十一分宮津到着の旨府立醫大小林書記より通報ありたり。
一、府衞生課木村警部は到着挨拶のため森岡課員と共に來部。
一、宮津療院勤務秋月秋子、河原ノエ午後四時二十二分發歸還せしむ。
一、三井事務員來所、桑飼駐在看護婦の件協議方を命す
一、本日警察電話架設せらる。
一、鈴木書記石川駐在看護婦の件に付打合のため出張。
一、本日トラック一臺使役。
一、後藤書記（峰山附）歸京す。
一、岩田常憲（市場交代醫員）到着。

「事務長日誌」

一、早朝より各收容所及救護所の撮影を兼ね視察す。
㈠、口大野救護所

係り員能く勉勵し異狀なし、同所の揭示左の如し。

診察時間　自午前九時　至午后五時

但急患は之の限にあらず

（參考）最初救護用に供したる二張の天幕中一張は浴場用として殘置の要あり。

㈡、峰山收容所

（一）結核患者病床の隔離的設備を要す。
（二）病室橫斷通路に沿ひて小仕切又は幕張を爲すの必要あり。
（三）汚物（屎尿）排除の實行方に關し町役場と協議實行

を期せり。

（四）　看護婦間融和に付注意をなせり。

（五）、公衆電話架設の見込立たざるに依り一時應急的に警察電話架設方を依頼す。

㈠、郷救護所付看護婦（愛知支部）詰替の要あり。

㈡、網野收容所　入院患者漸減の傾向あり、但し外來患者は減少の兆なく且つ磯及郷救護所へ巡廻診療の要あるも峰山に比較すれば大に閑散なり。

㈢、島津救護所　（午後二時）一班は巡廻診療中、一班は現に治療に從事中にして成績普通。

㈣、鳥取救護所　（午後二時四十分）外來患者の診療を大部分終り將に往診に赴むかんとするの間際にして救護員一同克く精勵し成績可良。

㈤、河邊救護所　特記事項なし。

㈥、山田救護所　（午後四時）診療を終り救護員全部引揚後なりしが事情調査の上診療時間延長の要否を定めんとす

㈦、岩瀧收容所　入院患者に增減なきも外來、往診共に寧ろ增加の傾向あり、救護員に尙一層努力すべく其他意見を述べ置けり。

四月十三日　水曜　晴

一、岩田醫員（市場附）午前七時四十一分發赴任。

一、午後丹波救護所醫員小田榮氏歸京のため來所、同四時二十二分出發。

一、午後網野附奥田事務員打合せのため來所。

一、午後四時二十二分長坂事務員（支部技手）打合のため京都へ出張。

一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、舞鶴警察署長に對し同町理髮組合篤志者をして峰山收容所患者の理髮を爲さしむること能はざるやの交涉を爲したり。

一、石川村罹災患者水戸はる（二十一年）は下腿複雜骨折の重症者にして豫後最大切なるを耳にしたり。

一、宮津療院附添人中篤志者あるの件調査するに左の如し。

甲　峰山町浪花小西リツ當二十八年父母兄弟等十一人の家族なりしが同人は震災當時夢中に逃れんとして木材に敷かれ一時自由を失ひたる間もなく餘震と共に逃るゝを得たり、其の當時住家は既に倒壞し中より援を求むる聲頻りなるに驚き死力を盡くして板庇の窓を破り實母とう六十八年實兄鹿藏四十年外三名を助け出し更に鹿藏と協力して木材に敷かれ居りし實父豐藏及隣家に止宿中なりし兄の子清十四年等を援出したるも他の四名は遂に慘死するに至れり、而して兄鹿藏は之の活動の際倒潰物の爲に肋骨を折られ一家擧て收容せられたるものなるが、リツは一家族凡てを救助さるゝ恩義を感じ患者小康の際には多少たりとも立働き萬分の一に報ひむことを自發的に覺悟し炊事其の他掃除の手傳を爲し居れるものにして其の心懸け殊勝なりとす。

乙　桑飼村長島とめ二十年は實母ケイ五十三年の附添とし

て入院中のものなるが看護の餘裕あるときは常に雜務に從事し其の心懸け殊勝なりとす。

一、郷救護所用「バラック」は山虎組より引渡の申込ありしものなるか取調ぶるに硝子戸の不備に依り使用不能に付峰山詰川崎事務員をして同町山虎組出張所へ交涉せしむ。（再檢を要す）

一、本月九日　總裁宮殿下御西下の途次特に支部長を車內に御引見遊ばされ今回の震災に付救護員が迅速機敏に難に赴き晝夜兼行能く其の任務を盡せる廉に對し優渥なる御言葉を賜はりたるに付詳細傳達すべき旨の通牒ありたり。

四月十四日　木曜　少雨

一、午前十時十七分淺山院長來津、午前中宮津療院、午後岩瀧、峰山收容所廻診、事務長同行す。

一、同時刻神原政明氏岩瀧收容所宇多小路醫長と交代のため來着午後赴任

一、午後京都支部より電話。

「和歌山支部より交代看護婦三名明日午前出發、峰山へ直行せしむる旨電報ありたり、又大阪支部高藤看護婦長、佐藤矢部、甘利看護婦は十五日頃交代せしむる旨通知ありたり」

右の件直ちに峰山收容所へ通知す。

一、吉原救護所バラック電燈設備の件に付同村駐在衞生係巡査より電話を以て照會あり本件に付峰山附川崎事務員をして山虎組出張所へ交涉せしむ。

一、本日乘用車一臺備入る。

「事務長日誌」

一、朝來餘震頻々（午前三時、五時、六時、午後數回）ありしも強烈ならざりき。

一、午前淺山院長と宮津療院に赴き狀況を視察し、豫告に依り靜肅謹愼せしめ、森嚴に御言葉を傳達し事務長尙之を敷衍し何れも深く感動せり、尙之と同樣傳達式を擧行せし個所左の如し。

口大野救護所、岩瀧收容所、峰山收容所

一、療院に於ては附添人中の特志者小西リツ及長島とめの兩人に賞を與ふ。

一、峰山收容所結核患者室の仕切及外科病室通路の仕切を山虎組に命じ補修せしむることゝなせり。

給水狀態は水量不足の爲め支障なきやを氣遣はれしが圓滑に進捗し居れり。

一、舞鶴警察署に照會せし理髮業組合員は來る二十三日の公休日を利用し峰山收容所患者の理髮を爲すことに決定したる旨通知ありたり。

一、淺山院長は峰山町に於て元助役瀧野新兵衞を往診し及同收容所に於て多數の患者を診療したり。

四月十五日　金曜　雨

一、午前八時半淺山院長網野收容所廻診藤田事務長隨行。

一、宇多小路前岩瀧收容所醫長交代歸京の途來所、午前十時二十五分出發。

一、午前十時十七分長坂技手歸所。

一、午前舞鶴警察署より、十八日午前六時五十分發にて理髪業組合代表十名峰山へ直行する旨通知ありたり。
一、同福田宮津町長は人件上に付來訪。
一、同川崎峰山附事務員來所。
一、午後三時半淺山院長、事務長歸着、院長は午後四時二十二分發歸京。
一、同七時峰山收容所より電話、「和歌山支部よりの交代看護婦米田マスエ、山本マツエ、島田ミヨシの三名到着。醫員加藤繁三、大須賀德雄と交代院長と共に歸京。
一、鳥取支部派遣看護婦足立智惠子父危篤の電報により歸還を命す。
一、本日トラック、乘用車各一臺使役。

「事務長日誌」

一、午前二時頃稍強度の餘震ありたり、此の日中竹兩郡を視察するに雨後の餘震に依り道路山麓等の崩壞せる個所尠からざるやに見受けたり。
一、淺山院長と共に視察せし個所左の如し
河邊、鳥取、島津、網野、峰山、丹波の各收容所救護所
右の內河邊、鳥取、島津、網野、丹波の各所に於て　總裁殿下の御言葉を傳達したり。
次回は鈴外科部長來診の筈。
一、森本事務員府防疫監吏に任ぜられ辭任。

四月十六日　土曜　曇風寒し

一、峰山收容所太田醫員の代員として中川直矢來着午後〇時十三分發峰山へ。
一、和歌山支部關本書記は峰山收容所より歸還看護婦鹽路イヨ、名倉ミサヨ、田中マサキの三名を引率來所、午後出發す。
一、森本事務員本日解職。
一、京都林田より發送の藥品本日受領す。
一、療院事務員候補者尾崎助松來る。(宮津警察署長の推薦野間村の人五十五年)
一、トラック一臺使役

「事務長日誌」

一、職員服務規程の制定に從事す。
一、療院並に同附屬病室を撮影す。
一、本日は主として內務に從事す、豫算の細目に涉りて經理方針を協議す。

四月十七日　日曜　晴

一、峰山詰醫員太田喜直、中川氏と交代歸京す。
一、藤田事務長寫眞師を伴ひ加悅谷各救護所へ出張。
一、尾崎助松療院事務員として本日より出務。
一、山尾峰山詰醫員、黑住口大野詰醫員來訪。
一、島崎府中村醫、富岡府中小學校長、山中岩瀧校首席來訪
一、淺山院長來宮、蓄音機レコード十七枚寄與卽日歸京。
一、鳥取詰渡邊貴美を岩瀧へ、網野在愛知支部所管看護婦三名を鳥取へ配屬變更。鳥取詰岡村ゆりを歸らしむ。(宮津へ)
一、乘用自動車一輛(十一時より午後五時頃迄)使役。

「事務長日誌」

一、本日左の箇所を巡視せり
(イ)山田救護所　(ロ)市場救護所
(ハ)(岩屋村に於ける現況調査)　(ニ)三河內救護所
(ホ)加悅救護所　(ヘ)桑飼救護所
(ト)石川救護所
各所とも御言葉の傳達、記念撮影、患者の病類別觀察。

四月十八日　月曜　快晴

一、本日の快晴に震災の氣分和らぐ。
一、舞鶴理髪(十人)結髪(十二人)業者二十二人(組合長高橋嘉吉引率)峰山收容所に到り患者及附添人に對し理髪を爲し午後四時三十分峰山發列車にて歸舞せり。
一、右に付事務長出向、傳染病者發生時の對策を警察署、町役場に協議し解決す。
一、鈴木書記打合のため網野收容所へ出張。
一、府社會課理事小瀨松次郎氏網野町に於ける傳染病者治療の件に付來所。
一、岩瀧配屬森澤看護婦母危篤の報を受け歸還せしむ。
一、口大野詰曾根みつ、廣瀨とあ及鳥取詰なりし岡村ゆり歸還せしむ。
一、府立醫大小林書記より外科第二部長鈴木正治博士來る木金曜日來診の通知ありたり。
一、奥田網野詰書記打合のため來る。
一、傳令立花淺次郎を峰山驛へ、三輪人夫を岩瀧へ急派せり。
一、丹波村配屬梅本その病氣のため歸京せるを聞く。(所屬醫員の承諾を受け)

「事務長日誌」

一、本日視察の箇所左の如し。
(イ)丹波救護所　豫想外に患者尠なきを以て、調査するに峰山收容所へ赴くもの多きに依るを確めたり。
(ロ)峰山收容所　本月十七日の患者中に疑似赤痢の者あり觀察室に一時收容したりと云ふ而して峰山町役場に於ては豫ての計畫に反し傳染病患者の收容所に充當せる「バラック」を他に貸與せしとのことに付其の善後策に就き役場及警察署へ赴き左の協議をなす。
(一)　傳染病患者收容所に充つる爲震災當初建築したる急造「バラック」の內二棟を充當すること。
(二)　患者發生し之を收容したるときは適當の番人を附すること。
(三)　傳染病舍傭人は二種に分ち健康地帶と有毒地帶との使用別を明確にすること。
(四)汚物消毒上の設備を完成すること。
因に森野助役は峰山町外五ヶ村聯合隔離病舍組合は峰山吉原、五箇、長善、丹波、新山の六ヶ町村なるに依り收容所に於ては他町村の患者を取扱はざる樣せられたしとの希望ありしも之は法令の精神に背反するものなるに依り其の趣旨を告げ尙收容所に於ても成るべく希望には副ふ樣注意する旨を附加し置きたり。

一、峰山收容所に於て觀察中の患者は午後三時三十分赤痢疑似と決定直に警察署と町役場に通知し法定の手續を爲さしめたり。

患者　吉原村字新治農常藏母　上羽　ひの　六十一年

四月十九日　火曜　快晴

一、後藤書記峰山より事務打合のため來所。

一、大阪支部派遣婦長高藤カツ、看護婦佐藤アサノ、矢部クマ、甘利ハナエ峰山より歸還の途立寄り旅費手當の支給をなす。

一、市場救護所岩田醫員は所屬看護婦二名を伴ひ來る。

一、何鹿郡病院自動車は運轉手田中誠一操縱歸綾す。

一、島津より天幕三張、口大野より天幕一張、外雜品寢臺等を持ち歸る。

一、網野收容所より府より引繼を受けたる材料を持ち歸る。

一、救護所寫眞十六組支部へ發送す。

一、鳥取支部より交代看護婦植垣スミエ、高橋久子、瀧川勢美子、口大野救護所へ到着し歸還員佐々木シゲ、花原ナカ挨拶を兼ね來所。

「事務長日誌」

一、第一次整理案考究の爲諸般の調査に從事す。

四月二十日　水曜　曇　暴風時々細雨

一、午前十時頃より南風漸次强力となり午後殊に夜に入り暴風砂礫を飛ばし家屋を振動せしむ。

一、事務長午前八時より中、竹野兩郡收容所、救護所狀況調査の爲め出張。

一、鳥取支部へ歸還の佐々木、花原兩看護婦午前八時十八分出發。

一、福井支部書記池田彌內は交代看護婦清水はなゑ、川端きくゑを引率到着。

一、本社より贈附の毛布梱包入十八個立野運送店の扱により京都支部へ發送す。

一、京都堂阪醫療機械店員(鈴木)顯微鏡携帶到着、檢査の上峰山收容所へ持參せしむ。

一、本日トラック一臺、乘用車一臺を使役す。

「事務長日誌」

一、早朝より左の各所を視察し第一次整理計畫を樹つ。

丹波救護所　患者稍多く加ふるに衞生狀態注意を要する點あり消化器病發生の兆あるに依る。

峰山收容所　峰山町發生の傳染病患者を赤十字社收容所に於て治療せりとの報を爲すものありて網野町役場より本府並に赤十字支部へ峰山と同樣配慮を受けたしと申込みたる趣に付其の誤謬を糺し警察署、町役場、收容所等各關係方面へ誤解なき樣注意し置きたり。

郷　救護所　異狀なし

木津救護所　實地踏査するに相當の患者なきに非ざるも何れも普通患者にして震災直接の者なく大體平常に復したるものと認むるを以て近く同救護所を廢止せらるべき意味を坪井醫員警察及村當局に吹聽し置けり。

網野收容所　收容患者漸減して二十名となり尙本月中には約其の三分の一を減ずる見込あるのみならず外來患者も亦漸減の兆あるに依り近く縮少の見込を以て患者收容其の他の手心に關し醫長並に事務員に注意し置きたり。

島津救護所　依然患者多く尙存續の要切なるものあり。

鳥取救護所　患者尙多きも罹災患者少數となり近く整理の必要あり。

河邊救護所　患者あるも大體普通のものにして近く廢止の必要あり、其の旨村當局に內示し置たり

一、夜間暴風雨となりしに依り深更迄療院の警戒に從事す。

四月二十一日　木曜　朝雨　晝曇　夕晴

一、午前三時半頃より暴風方向を轉し稍凪ぎ雨を誘ふ諸員警戒裡に黎明を待ちたり。

一、鈴木外科部長午前十時十七分到着直に療院視察午前十一時過來所。

一、晝食後鈴木博士は口大野峰山收容所を經て岩瀧へ廻り山嘉樓に宿泊、鈴木書記隨行す。

一、藤田事務長は武長事務員を伴ひ加悅谷巡回。(救護所存廢問題協議のため)

一、療院附福井支部派遣看護婦入力いさを、重田きみは池田書記に引率され午前十時二十一分出發歸還す。

一、配給の爲め加悅方面へ立花、其他へ中田を遣す。

一、トラック一臺、乘用車二輛を使役す。

「事務長日誌」

一、鈴木部長と療院に赴き午後は別に加悅谷方面を視察す石川、桑飼、加悅、三河內の各救護所に於ては一々患者日誌に就き症狀と震災との關係を究め其の內容を示して當該町村當局に諒解を求め置きたり。

一、市場救護所　異狀なく特記すべきことなし。

四月二十二日　金曜　快晴

一、鈴木博士は事務長と共に市場及竹野郡各救護所診察、視察の上網野より歸京。

一、武長事務員統計事務打合のため口大野、河邊、吉原、丹波各救護所へ出張。

一、療院規則承認の指令及罹災患者に非ざる患者は診療せざる件支部長より通牒ありたり。

一、石川救護所松村看護婦來る。

一、全國銀行一齊休業の新聞號外あり。

一、トラック一臺、乘用車一輛使役す。

「事務長日誌」

一、午前八時より鈴木博士と同行各所を巡視す。

①　市場救護所　醫員並に看護婦に對し執務上の注意をなす。

㊁　河邊救護所　異狀なく寧ろ好評なり。

㊂　島津救護所　救護事務に關し注意をなせり。

㊃　網野收容所　鈴木博士收容患者全部を診察し午後二時五十分網野發歸京。

㊄　郷　救護所　患者多かりしも特記事項なし。

㈡ 峰山收容所　峰山町に「チブス」患者發生の報あり、古玉醫長外一名及佐久間主治醫と共に患家に臨み調査す。

四月二十三日　土曜　快晴

一、藤田事務長岩瀧收容所へ視察、協議のため出張。
一、武長事務員患者統計上の用務のため竹野郡各收容所救護所へ出張。
一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、療院に於て左の整理をなす。
㈠ 附屬病室收容の丹毒患者全治退院に付消毒を行ふ。
㈡ 患者退院漸く多く第一號病室を廣間に併合し應接所を置く。
一、宮津小學校に校長を訪ひ同校職員の熱心なる慰問に對し謝意を述ぶ。
一、宮津警察署に防疫係を訪ひ救護事務と共通上の問題に付打合を爲したり。
一、岩瀧收容所　入院患者の病症及外來患者の狀況を調査し整理案に資す、但し當分繼續の外なきものと思料す。

四月二十四日　日曜　快晴

一、終日患者の統計をなせり。
一、峰山付調劑員山田義一本日午後歸京、交代員橫田寅太郎昨日午後着峰。
一、府立醫大より峰山附山尾醫員の交代者二十五日午前六時二十七分二條發出發に付。事務引繼準備方電話にて照會あり直に峰山收容所へ報知す。
一、松村石川附看護婦來る。（齒科治療のため）
一、石井療院事務員、旗竿立改築の件に付來る。
一、トラック一臺使役。

四月二十五日　月曜　快晴

一、府大より外科醫藤田登山尾醫員と交代のため着峰。
一、京都支部より電話にて和歌山支部派遣看護婦石井ミネ父危篤歸還の報あり、直に峰山へ照會す。
一、右午後四時二十二分峰山より到着、迎ひの伯父午後五時十七分着引渡を了す。
一、鈴木書記事務打合のため上京す。
一、河邊詰看護婦土井ユキヨ、西川美惠來る。
一、トラック一臺使役。（車體破損のため夕方歸る）

「事務長日誌」

一、第一次整理に關する件承認の指令に接す。

四月二十六日　火曜　快晴

一、府立醫大松永助敎授午前十時十七分到着、事務長と療院を經て來所晝食後岩瀧、山田、市場、口大野、峰山、丹波等へ引續き出張。
一、峰山附山尾醫員歸京。
一、市場村三井事務員網野へ配屬變更。
一、宮津出張所詰警部補、供給品調查依賴のため來る。
一、傭入トラック山田驛の手前に於て荷馬車と行違の際積荷衝突のため定傭人夫中田辰藏、三輪利雄の二名トラック上より墜落し三輪人夫は暫時にして元氣恢復し豫定の配給を終りたるも中田は人事不省となり漸くに醒覺せるも痴呆狀となり他のトラックに載せられ歸所松永助敎授に受診せしめ安靜加療す、療院より平賀看護婦日沒迄介抱のため派遣。
一、藤森療院婦長、松村石川附看護婦來る。
一、峰山附屬自轉車大破修理を命す。
一、大阪支部より笹田晏代、植田一惠、井田みか、交代のため來着。
一、本日乘用車一輛、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、午前松永助敎授と共に療院視察。
一、午後早々より松永助敎授と共に岩瀧、山田、口大野、市場、峰山の各所を視察し第一次整理に關する通告を爲したり、尙松永助敎授は峰山に於ける內科患者を診察す。
一、救護員の風紀問題に關しては夫々警告を與へ置きたり。
一、救護員全般に對し警告書を發す、要は近來時日の經過と共に緊張を缺き動もすれば震災氣分に遠ざからむとするの傾向あるに依る。

四月二十七日　水曜　快晴（過暖）

一、藤田事務長は松永助敎授と共に網野方面巡回、終て木津鳥取へ救護所撤退豫告のため出張。
一、人夫中田辰藏を療院へ收容す。
一、岩瀧丹羽醫員と交代のため今西義男來着直に岩瀧丸にて出向。
一、峰山在勤大阪支部所管堀看護婦外二名來所午後一時五十分發歸鄉す。
一、奥田書記は網野收容所勤務の處本日支部へ復歸す。
一、鈴木書記午後二時五十分一先づ歸着して再び京都へ出發す。
一、峰山附大阪支部所管松村ハサヨ妹病氣の電報により午後歸阪す。
一、田瀧宮津警察署長來訪。
一、トラック一臺、乘用車一輛使役。

「事務長日誌」

一、午前八時出發河邊、鳥取、島津、網野等の各所を視察し專ら氣風宣揚に關する警告に努め第一次整理に關する準備を爲したり。
一、松永助敎授は網野收容所に於て廣く患者を診察したり。
一、木津救護所を視察し更に同村役場に村長を訪ひ本月限り救護所廢止の旨を告げ其の諒解を求めたり、擔任醫員不在に付書面を以て其の意思を傳ふ。

四月二十八日　木曜　晴

一、藤田事務長は救護所廢止準備のため加悅谷へ巡行。
一、京都支部より福田、川中、水野、小藪、谷の五看護婦產婆兼修として入學に付五月一日歸還せしむべき旨電話ありたり。
一、峰山附大阪支部所管看護婦鳴千數親看護歸省願出に付歸還せしむ。

一、峰山收容所へ醫員廣戸節（大塚醫員交代）齋藤敏夫（中川醫員交代）到着。
一、本日氣溫高く室内七十四度（華氏）に達す。
一、乘用車、トラック各一臺使役。

「事務長日誌」

一、第一次の整理計畫たる加悦谷壹圓の救護所撤度期日切迫に付内容調査に誤謬なきやを再調し及當該町村當局とも充分に諒解を得置くの必要あるを以て左の町村を巡視す。

㈠ 石川　傷病者は大體常態に復したるも廢止迄に全治を見ざる水戸はるを殘すを以て之に對しては村長並に鞭醫員とも協議し患家の希望に依りて岩瀧又は宮津へ收容することゝなせり。

救護所に充てたる寺院の借家料は使用期間を通して參拾圓を支拂ふことに村長と打合せたり。

落合村長は震災直後より支部の執りたる厚意に對し深く感謝の意を表し居たり。

㈡ 桑飼　所定期日に撤廢するも殘患者なく全く普通狀態となりたる旨市田醫員は言明せり。

村長不在に付助役に對し本月限り廢止の旨を告げしに厚く謝辭を述べたり。

㈢ 加悦　伊藤醫員に就き現狀を聞くに全く舊態に復せる旨を言明す。

細井町長に對し前記事情を述べて本月限り廢止の旨を告げしに深く感謝の意を表せり。

同町に補償すべきもの左の如し。
救護所に充てたる隔離病舍の修繕費拾圓五拾錢。

◎所　感

加悦救護所勤務の看護婦辻たきは平素の勤務嚴格にして而かも要領を得成績優良なりと認め居りしが同所勤務中患家の信用を深くし交々物品を贈りて謝意を表せむとするもの十數名に達せり。然れども同看護婦は一切之を更けす終始一貫能く規律を守り赤十字社看護婦たるの信用と體面を十二分に發揮し褒賞の價値充分なりと認む。

㈡ 三河内　前記各所と同樣。

四月二十九日　金曜　快晴

一、吉原詰愛知支部派出看護婦永井とら子、盲腸炎に罹り峰山收容所へ入院。
一、峰山附中川、大塚兩醫員本日歸京。
一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、第一次救護所整理に關し遺憾なきを期する爲め諸般の調査を續行す。
一、療院收容患者殊に附添人の規律漸く弛緩の傾向あるを以て特に警告を與ふ、注意事項の重なるもの左の如し。

㈠ 氣溫漸く高く室内に於て採暖の必要なきに至りしを以て病床間に濫りに火鉢を置かざること。

㈡ 附添人の動作日を逐ふて怠慢に流るゝ嫌ひあり斯くては退院後の劇務に支障あるべきに依り各自反省して心身の弛緩を防ぎ健康保持に心掛くべきこと。

㈢ 市外へ無斷通話するは不都合に付必要を生じたるときは其の都度事務室へ申出て承認を受くること

一、救療事務の最終に當り依託患者としての收容力を調査したるに。

㈠ 佐藤病院　二十床
㈡ 中村病院　十　床

四月三十日　土曜　快晴

一、長坂技手救護所引揚げに付河邊、木津、口大野、三河内、加悦、桑飼の各所へ出張。
一、救護所第一次整理
（閉鎖）河邊、石川、桑飼、加悦、三河内、木津
（兼攝）鳥取（島津より）　丹波（峰山より）
山田（岩瀧より）　郷（網野より）

右に付配置救護員大異動を行ふ。

一、鈴木書記午後五時十七分宮津着。（仕拂金携帶）
一、引揚げたる救護員全部及大阪へ歸還すべき産婆兼修生は全部指定旅館へ宿泊せしむ。
一、口大野救護所中村、黒住兩醫員歸京す。

「事務長日誌」

一、本日第一次の整理を行ふ。
○口大野救護所　醫員看護婦半減
○丹波　同　醫員は解囑せず看護婦を峰山に移し同所より半數通勤。
○網野收容所　醫員一、調劑員一、看護婦五人を減し郷及磯の往診に當らしむ。

一、會計上の困難

財界の變動に依り各銀行「モラトリアム」の爲め其の影響を受け加ふるに時適々「節季」に當り支拂上非常の困難に遭へり。

一、此日鈴木書記は現金壹萬九千七百五拾貳圓拾四錢を持歸りたるも銀行閉鎖後に付差當り臨時支拂に要する金額を扣除し田瀧宮津警察署長の承認を得て警察金庫に一時預け置けり。

五月一日　日曜　快晴

一、三重支部所管救護員小竹マサ外七名市場救護所にて交代後來所即日午後四時二十二分發歸還す。
一、産婆兼修看護婦谷まつ外四名歸還せしむ。
一、交代したる口大野（鳥取所管）宮津（福井所管）吉原（愛知所管）鳥取（愛知支部）岩瀧（渡邊宮島）網野（伊藤）の各看護婦集合に付指定旅館に於て休養せしむ。
一、看護婦渡邊貴美舞鶴へ歸還す。
一、市場詰岩田醫員は交代員到着に付歸京す。
一、谷口事務員缺勤。
一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、四月節季に當り現金の到着後れたる爲日曜に拘らず請求あり頗る支拂に差支ふるに依り一時預けと爲せし金庫より

現金を引出し長坂技手に交付す。
一、第二次計畫に關し調査を始め相當多忙なりしも特記すべきことなし。

五月二日　月曜　曇少雨

一、福井支部六名、鳥取支部六名、愛知支部四名の各看護婦午前八時八分發歸還せしむ。
一、京都支部宮島捷子は支部療院勤務者に付歸還せしめ、同中島壽子は宮津詰となす。
一、事務長事務打合のため上京。
一、市場救護所信太醫員の代員中澤龜太郎來所午後〇時十三分出發。

「事務長日誌」

一、第二次整理計畫に關し指揮を受くる爲め支部へ出張伺中の處承認ありしを以て早朝より準備を整へ、先づ警察金庫へ假預けせし現金全部を引出し所要額を引去り殘額壹萬壹千圓を宮津銀行へ預け入れ午前十時二十二分宮津驛出發京都支部へ赴く。
一、支部に於て府立醫大中道幹事に醫員手當を手交す
一、主事に對し第二次整理の件に付詳細意見を述べ其の解決を宿題とす。

五月三日　火曜　曇

一、慶松警部補來る。
一、鄉村役場より「チブス」豫防注射を依頼し來りたるも府防疫課と協商の上同課よりの依頼により應ずべき旨を答ふ。

一、藤森婦長(宮津)一時歸還方の件支部より電話照會あり。
一、平賀勢津(宮津詰)本日歸還せしむ。
一、宮津附淺野調劑員は宮津町役場より借入れたりと云ふ體溫計の件に付來る。
一、常備人夫立花淺次郎歸京せしむ。(整理)
一、トラック一臺使役。

五月四日　水曜　快晴

一、京都府囑託佐藤巖治警視廳寄與品の件に付來所。
一、武長事務員は夕食前舞鶴へ出張。
一、藤森婦長一週間歸京せしむべきに付(勤務所鐘紡京都支店)臨時交代として早見せつ(救護看護婦長京都衞戍病院婦長)來る八日來津の旨支部より電話通知あり。
一、トラック一臺使役の處器械故障の爲め歸らず。

「事務長日誌」

一、第二次整理計畫に關する調査を爲す、事務打合せの際協議したる救護員慰藉の方法に就ても計畫したり。

五月五日　木曜　晴　日沒後降雨あり

一、藤田事務長岩瀧加悅谷方面へ手當金交付及狀況視察のため出張。
一、菅沼府事務官警視廳寄與品交付取消のため來所。
一、久下府囑託及警部補一名天幕の件に付協議のため來る。
一、網野警察署より鄉村豫防注射の相談あり府防疫課より依頼あれば援助すべき旨回答す。(電話)
一、幸野囑託醫員(丹波)來所。

一、京都支部より最初依頼して他支部より貸與を受けたる天幕の構造坪數等調査方支部へ依頼し人夫請負小林種吉の召喚を托す。
一、早見看護婦長は七日午後七時三十二分着宮の旨支部より電話通知あり。
一、新任杉山長官明七日震災地巡視の旨宮津警察署より通知ありたり。
一、大江宮津町役場書記公會堂(宮津療院)使用期間問合のため來所。
一、トラック、乘用車各一輛使役。

「事務長日誌」

一、第二次整理の計畫と實地對照の爲及三、四月諸給與支給の要務を以て岩瀧、山田、市場、岩屋、三河內、加悅、桑飼、石川の各救護所及當該町村役場へ出張。
一、菅沼事務官急遽東上に付震災救護に關する成績表を交付す、要は臨時議會說明の材料に供するもの。
一、川崎事務員來訪。
一、與謝郡開業醫一部の行動を內查するに加悅谷方面に於ては本社救療事業延長するに於ては同業者の脅威なれば成べく早く打切る樣申出でゝは如何との內儀ありと云ふ。
一、岩瀧收容所の患者は本月二十日頃に至らは入院(外科三內科一名位迄)減少すべしとの醫員の意見なりき。

五月六日　金曜　朝快晴午後曇降雨

一、河村院長代理、伊藤源一(加悅囑託醫)來所、事務長と共に療院診療、終て峰山、岩瀧、網野へ出張。(事務長同行せず)
一、杉山知事午後〇時十三分着驛に付事務長出迎。
一、人夫司配小林種吉右同時到着す。
一、糸井(岩瀧)三井(網野)事務員打合のため來所。
一、午後杉山長官は療院を視察せらる。
一、トラック、乘用車各一輛使役。

「事務長日誌」

一、河村(府大)外科部長は加悅町より伊藤醫員と共に來所打合せの上療院に赴き診察の後峰山、岩瀧、網野の各所を巡視す。
一、杉山知事一行は自動車二輛に分乘岩瀧、山田、市場、三河內、加悅、桑飼、石川の各町村巡視後更に療院患者を慰問せらる。
一、河村部長は午後二時五十分網野より歸京。

五月七日　土曜　晴曇雨不定

一、長官巡視に付藤田事務長中、竹野郡破害地へ出張。
一、市場村チブス豫防注射援助の件に付市場村長、岩破府囑託醫等より依頼あり、承諾、應援方市場救護所へ電話通牒す。
一、トラック及乘用車各一輛使役。
一、早見看護婦長本日午後七時三十二分到着直に療院へ入る。

「事務長日誌」

一、杉山長官一行午前八時旅館出發口大野、長善、吉原、峰

山、郷、島津、網野の各町村視察午後二時五十分網野驛發歸京せられたり。
右に付先づ峰山に赴き收容所前に一行を迎へ經過を報告し夫より病室に患者を慰問せられ更に職員一同に對し叮重なる挨拶ありたり。

一、網野收容所前同樣に付略。

五月八日　日曜　快晴

一、本日天幕の整理をなし古き分五張を返却す。
一、藤森婦長午前六時五十四分發歸京す。
一、第二期救護所整理を內申す。
一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、第二次整理調査を遂げ實施期限を本月十五日と定め立案の上伺を出す
一、療院を視るに收容患者漸次良好の經過を取り退院相亞き本日を以て三十二人に減す。

五月九日　月曜　快晴

一、天幕調査のため人夫司配小林をトラックに便乘出張せしむ
一、峰山在勤看護婦永井とら子、伊藤コノ(愛知)本日午後出發歸還せしむ。
一、小林をして天幕五張を返納せしむ。
一、菅沼事務官歸京挨拶のため來所。
一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、療院視察、過般來外科手術患者に對し「レントゲン」に依り調査の結果不良のもの少からず注意を密にせり。

五月十日　火曜　快晴

一、後藤書記打合の爲め來る。
一、事務長岩瀧へ出張。
一、峰山付大阪支部看護婦井田ミカ夫病氣の爲め歸還す。
一、鈴木書記現金受領の爲め京都支部へ往復す。
一、口大野(石川)市場(松任)救護所看護婦打合のため來所。
一、水島郡部診療所書記、救護班時代職務上の件に付來る。
一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、早朝より第二次整理を考究し十時より資料蒐集の爲め岩瀧へ出張、糸井町長の意嚮を探るに赤十字社の施設に深く感謝の意を表すると共に近く救療を廢止するも遺憾なき旨申居りたり。
尙町長は數日前市場村開業岩破醫師同町に來り開業醫島田暉三、糸井素太郎氏等を訪問し震災地の秩序も大に回復したるを以て成るべく早く赤十字社の診療を打切り呉るゝ樣交涉しては如何と申出に對し島田氏等は時期尙早の旨答へたるやに聞き及べり。
一、療院を視察す異狀なし。

五月十一日　水曜　晴

一、事務長午前宮津町役場へ震災關係書類調查のため出張。
一、宮本復興局出張所長來津の由。

一、淺山院長午後五時十七分着宮直に來所種々打合の上山嘉に宿泊。
一、岩瀧詰二村、西岡、廣瀨、宮本の各看護婦來る。
一、支部より供給の天幕全部集り荷造りをなさしむ。
一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、宮津町役場並に警察署を訪問、震災誌資料蒐集方の打合をなす。
一、午後〇時十三分復興出張所長宮本書記官來着。

五月十二日　木曜　快晴

一、淺山院長、藤田事務長は岩瀧、市場、峰山、網野其他へ出張。
一、府衞生課出張員鄉、鳥取救護所存否問合せの爲め來る。
一、天幕及ストーブ本日支部へ發送す。
一、島津救護所員の患者取扱方に付網野署長より內報あり。
一、三井網野附事務員看護婦手當受領のため來る。
一、トラック、乘用車各一輛使役。

「事務長日誌」

一、午前七時四十五分より院長と共に左の各所を巡視す。
① 岩瀧收容所　今西醫員に對し風紀問題に付院長より注意ありたり。
㋺ 山田救護所　異狀なし。
㋩ 市場救護所　醫員の件に付夜來院長に協議す。
山本村長に對しては本月十五日限醫員看護婦半減の旨を告ぐ。
㋥ 口大野救護所　異狀なし。
㋭ 丹波救護所　本月十五日限り廢止する旨を村長、醫員に通告し若し患者發生の場合は峰山收容所に依頼する樣取計ひ置く。
㋬ 吉原救護所　本所も亦本月十五日限廢止する場所なるが村長不在に付役場員に其旨通告せり、看護婦は峰山へ轉勤の筈。
㋣ 峰山收容所　院長は所內視察の上內科に屬する十一名の患者を診察したり、看護婦傭人に手當を給す、記念撮影をなす。
㋠ 網野收容所　院長は數名の患者を診察したり、町長に面談收容所存續の件に付意見を聞くに意見なく近く撤廢するも異存なき旨を洩せり、院長は網野より汽車にて歸京。
㋡ 島津救護所　谷田醫員外一名の患者取扱に付注意を加へたり。
㋒ 鳥取村役場に村長を訪問し本月十五日限り救護所廢止の旨を告げ諒解を受く。
㋑ 溝谷村に梅田醫員を訪ひ在任中の手當金を交付す。
一、歸所後網野署長より島津救護所醫員に對する情報あり、近時救護員中往々震災氣分に遠ざからんとする傾向あり。

五月十三日　金曜　晴

一、市場附醫員中澤龜太郎歸京せる報あり。

一、小林種吉を歸京せしむ。
一、各院所へ救療事務に關する注意を爲す。
一、トラック一臺使役。
「事務長日誌」
一、醫員の風儀不良なる者は交迭せしめ一面警告發送の手續を爲したり。
一、療院を視察し過日附添人に注意を與へたる結果自發的に風呂焚、病室内の掃除をなすに至れり。

五月十四日　木曜　雨

一、武長事務員三、四月分會計書類送達並其他打合の爲め京都支部へ出張卽日歸所。
一、滋賀支部へ救護員手當銀行爲替を以て送付。
一、本日三郡町村長へ震災に關する事項調査方を依賴す。
一、宇多小路醫員本日午後七時三十二分着指定旅館に宿泊。
一、トラック一臺使役。
「事務長日誌」
一、療院を視察す加悅町より入院せる吉岡すて四十四年死亡せり速に處置せしめ弔意を表せり。

五月十五日　日曜　終日降雨

一、吉原、丹波、鳥取救護所本日限り閉鎖及市場、島津救護所縮少に付處理のため鈴木書記を出張せしむ。
一、市場救護所附公原、中川、岡田の三看護婦を島津へ移し本社病院より派遣の看護婦を峰山附に變更し和歌山支部派遣（峰山附）のものは歸還せしむることゝし市場を除く外は降雨に付十六日交代のこととなす。
一、岩瀧詰神原醫員歸京し宇多小路醫員再び交代として到着
一、廣戸峰山詰醫員歸京し只木良信交代。
一、藤森看護婦長歸著し早見婦長午後九時九分發歸京す。
一、乘用車、トラック各一輛使役。
「事務長日誌」
一、此の日を以て第二次整理を施行す
㈠ 宮津　傭人三人を減ず。
㈡ 網野　同一人を減ず。
㈢ 岩瀧　定員異動なきも山田を兼務せしむ。
㈣ 市場　醫長及看護婦二人を減ず。
㈤ 島津　醫長及看護婦三人を減じ傭婦一人を置く。
㈥ 吉原　廢止。
㈦ 丹波　同。
㈧ 岩屋の出張診療廢止。
㈨ 鳥取　廢止。
㈩ 磯へ出張を廢す。

五月十六日　月曜　快晴

一、久下社會課囑託天幕の件に付來る。
一、和歌山支部主事田村和夫峰山へ前夜着歸還看護婦引率來所手當旅費交付の後出發。
一、本社病院派遣看護婦六名峰山收容所へ轉ず。
一、府立醫大より松永助敎授、中道幹事、口大野、峰山交代醫員と共に十七日朝出發の旨通報あり。

一、本日鳥取、吉原、丹波各救護所の殘品整理を行ふ。
一、約十日以前退院の大腿頸部骨折患者相馬ぬい再び療院へ入院願出に付許可すべきや否や電話あり依て醫員承諾ならば入院せしむべき旨を答ふ。
一、トラック一臺使役。
「事務長日誌」
一、療院醫員の合議に依り「レントゲン」試寫の結果

山田村	長島　市藏	四月二十九日	結果不良		
同	牛田　ぬい	同	同（退）		
同	牛田　ゆく	五月	四日	同	
市場村	木下　のぶ	同	同		
同	赤松　よね	五月	五日	同（退）	
峰山町	相馬　ぬい	同	同（退）		
山田村	川島　活治	同	骨折發見		
石川村	山崎きくゑ	五月	十日	結果（良）	

五月十七日　火曜　晴

一、午前十時十七分松永府大助敎授來津午後岩瀧、市場、加悅谷を巡視、事務長同行。
一、峰山收容所藤田醫員山尾宰と交代、口大野中村醫員中川氏と交代。
一、市場永原醫員は吉川醫員と昨十六日交代。
一、峰山附田守看護婦は市場に轉勤。
一、午後六時内山與謝郡醫師會長來訪。
一、加藤府衞生課長より島津村豫防注射援助方依賴の電話あり。
一、長坂技手午後四時二十二分發上京。
一、三輪利雄缺勤。
一、トラック、乘用車各一輛使役。
「事務長日誌」
一、松永助敎授到着打合せの上岩瀧、市場、山田、加悅を巡視し指定旅館に宿泊。
一、松永氏は到る處に於て患者診察の上醫員の風儀に關し警告を與へたり。
一、第三次整理計畫に就て調査す。

五月十八日　水曜　雨又晴

一、午前七時カトリック敎會婦人（姓名不明）午後九時より敎會に於て震災傷病者並に死者のためミサノ聖祭を行ふにより事務長の臨席を乞ひ度しとて來訪。
一、午前八時松永助敎授、藤田事務長と共に口大野、峰山、網野島津を巡視。
一、午後八時半内山郡醫師會長より三月十五日以降十八日に至る府震災救護療院へ赤十字社より派遣したる看護婦の氏名通知方電話照會あり。
一、トラック、乘用車各一輛使役。
「事務長日誌」
一、松永助敎授と共に出張、峰山、網野收容所に於て内科患者診察の後醫員看護婦に警告を與ふ。
一、峰山收容所視察中降雨ありて所々に漏水し爲めに病床を

移轉し又藥局治療室の如き多少作業に故障を生ずるに至れり。

一、峰山收容所の外來患者は日々二百五十名以上に達し存置するの必要あるが如き實況なるも震災患者としては漸次減少しつゝありと認めらる。

因に同町開業醫は未だ業務を開始し能はざる實況にありと思はる。

五月十九日　木曜　晴又微雨

一、午前十時府立醫大より外科部長鈴木博士午後一時二十八分京都發來津の旨電話あり。

一、同　福知山にある水島書記と口大野救護所傭人の件に付通話す。

一、同　十時二十五分長坂技手歸着。

一、昨夜十一時頃西村利雄博士岩瀧收容所へ着任。（今西醫員と交代）

一、午後五時十七分鈴木博士來着山嘉に宿泊。

一、峰山、網野收容所へ明二十日鈴木博士回診の旨通知す

一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、第三次整理案講究。

五月二十日　金曜　快晴

一、事務長は鈴木部長と共に峰山、網野へ出張、鈴木博士は網野より歸京。

一、岩瀧町役場員三上某豫防注射援助依頼のため來所。

一、トラック、乘用車各一輛使役。

「事務長日誌」

一、鈴木部長と共に巡視す。

㈠　峰山收容所　部長は外科患者を診察し六月十五日に至り殘留すべき患者調査の結果一二名に止るべしと云ふ。

第三次整理策を的確ならしむる爲左の調査を行ふ。

（一）目下峰山へ入込める勞働者數一日平均一千名內鮮人三百人內外。

（二）開業醫小谷直敏は數日後に、柳田國藏醫は六月中旬頃開業し得らるべく、佐久間辨次、幸野國太郎の兩醫は未定なり。

（三）峰山外五ヶ村組合隔離病舍は本月末日迄に竣工。

（四）峰山開業醫は今後現金制を執ると云ふ。

（五）義捐金の分配は六月初旬。

㈡　鄉村役場訪問、開業醫なき爲め一日も長く救護所を存置せられ度き意見、「バラック」拂下げ希望。

㈢　網野收容所　鈴木部長は外科患者診察後午後二時五十分發歸京。

㈢　口大野村役場　救護所撤廢異存なし、「バラック」は託兒所用に充つるため拂下げ希望。

一、此の夜整理案を整へ支部長の承認を經て出京のこゝなれり。

五月二十一日　土曜　快晴　風稍強く飛塵甚し

一、藤田事務長京都支部へ出張。

一、鈴木書記事務整理の爲め口大野、網野へ出張。

一、尾崎療院事務員橋立新聞を携帶して來る。

一、德川副社長視察の件。（京都支部にて後藤書記、命せられたる通報を峰山附醫員より午後九時電話）

五月二十四日午後七時二十分東京發、二十五日午後〇時十三分宮津着、同日收容所視察、宿泊

二十六日各收容所視察、宮津泊、二十七日午前十時十五分宮津出發。

一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、午前六時五十四分發支部に赴く。

西原主事に面會詳細整理上の意見を述べ成るべく早く決裁を受け豫め關係町村に內示し置くの必要を申告し置く、加藤衞生課長も立會したり、「バラック」建築問題に關する山虎組の申込に付て協議したり。

一、德川副社長一行出張の報を耳にす。

五月二十二日　日曜　朝雨　後快晴

一、午前豪雨、電雷あり、街衢水溢る。

一、福田町長は德川副社長一行宿舍の件に付來訪。

一、谷口事務員缺勤す。

一、後藤書記午後〇時十三分着宮來所打合せの後午後二時四十七分發歸峯。

一、增田峰山付調劑員退去、代員吉富浩太着任。

一、口大野詰中川醫員退去代員二名直接到着。

一、峰山川崎事務員より水道斷水に關する件に付交涉あり。

一、峰山收容所に於ては後藤書記不在中天幕九張を返納したる旨報告あり。

一、トラック一輛使役。

五月二十三日　月曜　快晴

一、德川副社長視察に付提出書類其他注意のため藤田事務長各所へ出張。

一、京都支部より復興課員十名宿泊のため峰山收容所の一部供用方照會あり、同時に柿沼本社會計擔任副參事、副社長と同行の旨通知ありたり。

一、宮津町役場員體溫計の件に付來る。

一、福田宮津町長、副社長一行宿舍の件に付來所。

一、第三次救護計畫縮少の件決裁濟の旨電話通知ありたり。

一、トラック、乘用車各一輛使役。

「事務長日誌」

一、岩瀧、山田、市場、口大野、峰山、鄉、島津、網野の各所視察。

五月二十四日　火曜　朝少雨後晴

一、副社長一行旅館其他協議のため福田宮津町長來所。

一、石井療院事務員を召喚す。

一、支部へ德川副社長宿舍の件通知す。

一、岩瀧詰西村博士、新來の來須正男と共に來所、晝食後退所、但來須醫員は宇多小路醫員と交代の筈。

一、トラック一輛使役。

「事務長日誌」
一、提出すべき書類作製に從事す。
一、福田町長打合の爲來所、同町長は公會堂明渡しの必要なき旨言明し居りたり。

五月二十五日　水曜　晴曇不定

一、福田宮津町長は大阪急行要件出來のため後事を助役に委托の旨を告げたり。
一、事務長は鈴木書記を伴ひ山嘉旅館及療院へ出向。
一、午前十時十七分河村部長來着。
一、午後〇時十三分德川副社長、高橋課長、支部副長、主事細田書記來着、河村部長、事務長と共に旅館山嘉樓へ投ず。
一、午後一時三十分出發療院の視察を了し二時出發市場、岩瀧を經て午後六時頃歸宮す。
一、午前十時過佐藤京都府囑託來所。
一、午後久下府社會課囑託天幕の件にて來所。
一、午後五時半頃より峰山後藤書記より復興課員二名病舍使用上打合せのため先發し來れる旨電話あり。
一、乘用車二、トラック一輛使役。
「事務長日誌」
一、德川副社長一行に隨行し先宮津收容所に赴き後市場救護所を經て岩瀧收容所を視察せり。

五月二十六日　木曜　快晴

一、午前八時より副社長一行中、竹野二郡の救護機關視察せらる。
一、午後〇時十三分柿沼副參事、長島書記を隨へ栗山支部書記と共に來着、峰山、網野へ出張、鈴木書記同行す。
一、鵜澤副長、高橋課長、西原主事、事務長と共に來處視察ありたり。
三輪(人夫)に命じ需用品を網野收容所に送らしむ。
一、乘用車三輛、トラック一臺使役。
「事務長日誌」
一、德川副社長の一行は午前八時より自動車二輛に分乘左の各所を巡視せらる。
① 山田救護所　西村博士の一班詰合せ居りしも未だ患者の集合に至らず。
㊁ 口大野救護所　救護員全部出動し、患者亦來集し居りて普通の常態なりしが一行は天幕內の浴室及炊事場等迄詳細に視察したり。
㊂ 峰山收容所　救護員一同に對し慰勞の辭あり更に病室に患者を慰問し、記念撮影の上出發す。
峰山收容所視察中鵜澤副長に親しく病舍の視察を求め閉鎖後の處置に關し稟請する所ありたり。
㊃ 鄕　救護所　島醫員は看護婦二名と共に勤務中、外來患者も集合せり。
㊄ 島津救護所　谷田醫員及看護婦等は送迎せり、特記事項なし、但し同村は被害甚大の場所なるを以て特に村中央部被害地の視察を求め震災の爲め異形を生じたる小濱湖畔を撮影したり。

㊅ 網野收容所　同所に於ける狀況は峰山と略同樣なりき右にて視察を了し歸宮したるは午後三時なりき。
一、河村博士は午後四時二十二分宮津發歸京。
一、之より先柿沼副參事は長島書記と共に着峰山、網野を視察し會計整理上の注意をなせり。

五月二十七日　金曜　快晴

一、午前十時副社長一行事務所視察の上同十時二十五分宮津發歸京。
一、長島本社書記會計事務檢査を行ふ。
一、午後事務長療院へ出向。
一、久下社會課囑託、天幕の件に付來る。
一、足立、安村の二看護婦(郡部診療所附)來る。
一、乘用車二輛、トラック一臺使役。
「事務長日誌」
一、長坂書記と共に柿沼副參事を訪問し會計事務整理に關し打合はす所ありたり。
一、內山療院醫員を自宅に訪問本月末實施すべき整理の內容(醫員一人減、看護婦五人傭人若干減員)を示して承諾を求め更に六月十五日を以て療院を閉鎖せらるべき模樣をも內示し其の際殘留する入院患者の見込を糺したるに、患者記名表に就き詳細審査の上大體十二名なるべき旨答へたり。
尙殘留患者の委托方に付與謝郡醫師會として引受くることの能否に關し協議し置かれたき旨を附加せり。

五月二十八日　土曜　晴

一、藤田事務長第三期整理豫告並に準備指導の爲め各所へ出張。
一、長島本社書記來所し會計檢査を行ふ後舞鶴へ向ふ。
一、久下府社會課囑託來る。
一、トラック、乘用車各一輛使役。
「事務長日誌」
一、第三次整理實行準備のため早朝より左の箇所を巡視す
① 山田村役場　本月限り救護所廢止の旨を告げて其の後措置の準備を促し尙救護所用「バラック」の處分に關し希望を尋ねたるに靑年會場に充用する爲め安價拂下を希望せり。
㊁ 市場村役場　山本村長に前同樣廢止の旨を告げしに非常に之を惜み且つ「バラック」は村會其の他の會場に充つる爲め安價拂下を希望せり。
㊂ 市場救護所　吉川醫員熱心に作業中他に異狀なく、看護婦に峰山へ異動の內意を示し置けり。
㊃ 口大野は曩に協定濟に付略。
㊄ 峰山警察署長に對し六月中旬頃收容所を閉鎖せらるべき見込を告げ其の感想を聞くに至極同意の旨を述べたり
㊅ 峰山收容所　職員一般に對し閉鎖時に於ける器具器械其の他整理上の方針を豫告し更に書面を以て誤謬なき樣指示し置けり。
㊆ 島津救護所　新に交替せし土屋醫員熱心に執務し居れり看護婦に對しては廢止後網野へ轉勤の旨を示し置けり

㋖ 網野收容所　第三次整理に當り減員となるべき醫員の交渉及閉鎖時に於ける物品整理の方針を峰山と同樣內示し置きたり。

㋗ 岩瀧收容所　本月限り廢止の旨を告げ看護婦に異動の內意を含め更に收容患者を一々慰問して閉鎖後に於ける心得方を諭したるに何れも感涙を浮べ感謝の意を表せり

五月二十九日　日曜　晴

一、長島本社書記終日會計事務檢查。
一、今井婦長午前十時二十一分通過の際支部托送の書類を受取る。
一、武長事務員夕食前歸所。
一、午後事務長療院警察署及佐藤府囑託を訪問す。

「事務長日誌」

一、近く不用に歸すべき救護所用「バラック」の處分方に付本府囑託佐藤巖治と協議せり。

五月三十日　月曜　晴

一、長島本社書記、終日會計事務檢查、本日終了。
一、後藤書記(峰山)打合のため來所。
一、事務長及鈴木書記岩瀧收容所へ引揚げ準備のため出張。
一、大阪石津作次郎封緘の麻醉用エーテルは發賣禁止となり五封度宮津警察署へ沒收さる。
一、府衞生課技手、供給物件問合の爲來所。
一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、岩瀧收容所閉鎖準備の爲め鈴木書記と共に出張、本收容所廢止に當り罹災患者二名を殘せしを以て宮津へ移送することゝなせり。

五月三十一日　火曜　晴

一、鈴木書記は市場、岩瀧、武長事務員は口大野以奥へ第三期整理のため出張。
一、長島本社書記午前六時五十四分發歸東。
一、松永助敎授、中道幹事午前十時十七分來着、事務長と共に岩瀧、峰山、網野方面へ出張。
一、第三期整理を行ふ。

1　岩瀧收容所廢止　收容患者中罹災者二名は宮津療院へ收容、西村博士は峰山へ、來須醫員は一度來所の上歸京看婦婦全部峰山へ。

2　市場救護所廢止　醫員吉川氏は歸京、看護婦三名は宮津へ引揚げ六月一日峰山へ派遣。

3　口大野救護所廢止　醫員二名は歸京、看護婦三名は宮津へ引揚ぐ。

4　峰山收容所　他所管看護婦全部交替のことゝなり六月一日宮津へ引揚、古玉醫長は歸京。

5　網野收容所　久石醫員歸京、看護婦二名は峰山へ、二名は宮津へ引揚ぐ。

6　島津救護所　土屋醫員宮津へ引揚げ、看護婦三名網野へ移す。

7　療院(宮津)　看護婦一名(六月一日)峰山へ四名は(二日)歸還。

「事務長日誌」

一、歸還者に對する諸給與支給等のため頗る多忙。

六月二日　木曜　曇

一、齋藤ミスエ、森田サカエ、助澤フサ、石田よし子、中川スナヲは午前六時五十四分、石川キヨ、大橋とし乙、西村石枝、寺本イネは午前十時二十五分出發歸京。
一、事務長は宮津出張所、警察署等へ出向。
一、三輪(常雄)(人夫)をして峰山網野へ出張せしむ。

「事務長日誌」

一、第四次最終整理に關する計畫をなす。
一、五月三十日宮津收容所に收容したる府防疫課員尾崎担次は入院後熱型不審にして「チブス」の疑なきにあらず然るに訪問頻々にして危險の虞あると、患者の靜養上にも害あるべきを察し之に對し注意を與へ尙患者の取扱食器消毒の屬行等專ら警戒を加へしむ、可檢物は細菌檢查出張所に於て檢查中なり。

六月三日　金曜　終日曇

一、鈴木書記午後〇時十三分歸着。
一、午後事務長宮津銀行及療院へ出張。
一、第四次整理を伺ひ出づ。
一、トラック一臺使役。

「事務長日誌」

一、病院收容注意患者佐藤担次の可檢物は陰性と決定す。
一、救護所用「バラック」處分方伺に對し指令急送方を京都支

部へ催促す。
一、療院閉鎖に關する準備調査に着手す。
一、鈴木書記現金一萬六千七百圓及德川副社長より交付せられたる菓子料百五十九圓五十錢を持ち歸り直に現金は宮津銀行へ預け入る。

六月四日　土曜　終日曇

一、小林種吉本日到着す。
一、後藤書記打合のため來所。
一、峰山へ物品輸送「トラック」に托す。
「事務長日誌」
一、救護所用「バラック」處分は伺の通り決裁ありたる旨支部より通知ありたり。
一、峰山町太田助役より同收容所廢止の上は同町開業醫の診察所に充つるため貸與せられ度希望ありと申越したり。
一、島津村役場に對し救護所用「バラック」不用に歸したる場合の處置方に關し考慮し置く樣申送れり。

六月五日　日曜日　曇

一、天幕內に於て荷造りを開始す。
一、鈴木書記物品調査のため網野峰山へ出張。
一、三輪利雄病氣缺勤す。
一、峰山へ配給「トラック」便。
一、石井事務員統計事務疑義問合のため來る。

六月六日　月曜　晴（夕方より曇夜半雷雨甚し）

一、三井事務員打合のため來所。

一、梅田警部補挨拶のため來る。
一、小野宮津町役場書記府時代よりの療院購入物品請求書携帶し來る。
一、京都支部より電話にて六月一日現在患者累計、救護員現在數問合せ來る、
一、支部發送の梱包布到着。
「事務長日誌」
一、宮津理髮美進會の奉仕的事業に關する功勞及宮津小學校職員患者慰問に關する件を調査す。
一、峰山收容所用「バラック」は府廳に於て不用の見込に付同町當局と交涉すべき旨支部より電話通牒あり。

六月七日　火曜　晴（午前二時頃驟雨）

一、「バラック」處分のため事務長各所へ出張。
一、梅田警部補來所。
一、府立醫大より淺山院長八日午後一時四十分出張の旨通知ありたり。
一、荷造したる梱包積載所に充つる爲めピラミット型天幕を張る。
「事務長日誌」
一、深更猛烈なる雷鳴、驟雨來る、之につき峰山收容所雨漏の有無を調査せしに多少の漏水ありしも客月十八日に比し非常に少なかりしと云ふ、惟ふに其の後の手入奏效せしものと思料せらる。
一、此の日殘務整理の準備就中「バラック」處分の爲め島津、網野、鄕、峰山、吉原、口大野、市場、山田の各町村を巡視す。
一、吉原村は「バラック」役場員に整理上の內意を含め後より申出でしむることゝ爲せり。
一、峰山、吉原を除くの外は凡て「バラック」の處分を結了したり。
一、網野收容所入院患者は六月十五日に於て三—五名に減ずる見込み立ちたり。
一、峰山收容所入院患者兵庫縣宍粟郡西谷村製材工中田伊太郎（四十八年）は客月二十日口大野村製材業小林兵治郎方に於て作業中器械に觸れて重傷を負ひ同日より入院治療中のものなるが今後の經過尙二ケ月位を要する見込なるのみならず罹災患者と趣を異にし殊に工場法令の關係もあれば同收容所閉鎖迄に引取るべき旨小林工場へ注意し置きたり。

六月八日　水曜　晴

一、午後事務長宮津收容所に出張。
一、同　五時十七分淺山院長來着。
一、各員引揚準備をなす。
「事務長日誌」
一、前日の注意に依り小林兵治郎來所善後策に付歎願したるが同人は無手續の儘工場を開始し居るものにして負傷者中田の素行經歷等不明なり。
一、最終整理方伺出に對し決裁なりたる旨支部より電話通知あり。
一、療院全部を廢止するに際し殘留する患者の取扱方に關し
　甲　支部療院に移送收容。
　乙　府立病院へ依托。
　丙　與謝郡醫師會へ依托。
　右三案中何れを可とするやに付書類を以て稟議す。
一、午後宮津收容所に到り整理準備督勵す。

六月九日　木曜　快晴

一、事務長は院長と共に峰山、網野の收容所へ出張、院長は網野より歸京。
一、後藤書記午後〇時十三分着來所、同二時十七分發峰山へ歸る。
一、第四次整理案決裁せらる。
一、トラック一臺使役。
「事務長日誌」
一、午前七時四十分院長と共に視察、院長午後二時五十分網野發歸京。
一、歸途鄕村役場、吉原村役場、峰山町役場、峰山警察署を歷訪し閉鎖準備に付打合を爲したり。

六月十日　金曜　快晴

一、三井事務員午後來る。
一、終日物品整理、同乾燥狀態を撮影す。
一、配給鐵道便に依る。
一、米井岩瀧元事務員來る。
「事務長日誌」

一、殘務整理準備行爲として各救護所關係書類の整理を爲したり。
一、夕食後療院重症患者糸井富美の母來所。
一、救療廢止に關する重要問題に付支部と電話協議する所ありたり。
一、配給汽車便。

「事務長日誌」

一、内山醫長を療院に招き本月十五日限り閉鎖に決し殘留患者は府立醫大へ依托することに決定の旨を傳へ同醫長の意見を聞き閉鎖迄に退院せしむべきものと移送する者とを決定する方法を執り當時の入院十九名中左の八名は移送の必要ある者と決定す。

山田村	長島市藏	四十八年	
石川村	水戸はる	二十一年	
岩瀧町	楠田とう	三十九年	
山田村	小卷鐵夫	三十八年	
同	荻野わき	四十五年	
口大野村	長谷川よね	四十五年	
岩瀧町	小室りゑ	二十六年	
同	糸井富美	十七年	

更に患者及家族の意見を夫々本人に糺したるに荻野、小室及糸井の三名は親族と協議の上確答することゝなれり、退院患者に對しては退院後の心得方を諭示す。
一、峰山、網野の收容所も同樣の手續を爲さしめたるに兩所とも移送一、協議中二と決定す。
一、患者移送に關し宮津驛長に謀り輸送車の周旋方を依賴す日時は來る十六日午前六時四十六分網野驛發とし同所より

一、事務長は輸送患者決定のため宮津收容所へ出張。
一、夕食後療院重症患者糸井富美の母來所。
一、配給汽車便。

「事務長日誌」

一、事務長打合の爲め京都支部へ出張。
一、午後富岡府中校長、夕食後一井府技師來所。(一井技師は九月中峰山出張所附を命せられたり)
一、三井事務員早朝來所下り一番にて網野へ歸る。
一、配給鐵道便。
一、各員物品整理。

「事務長日誌」

一、午前九時支部より事務打合の爲め出京すべき旨電話通知あり、同十時二十二分發上京

六月十二日　日曜　晴(雷雨あり)

一、事務長歸省。
一、谷口事務員缺勤。
一、配給鐵道便。
一、各員物品整理。

六月十三日　月曜　晴

一、宮津町長來所。
一、患者輸送上手配のため事務長、長坂技手宮津驛長訪問。
一、本社より贈付の「ミルク」變敗に付電話にて支部長の許可を受け廢棄處分を爲す。
一、順路患者を收容しつゝ午後二時十八分京都驛着の手筈。(即日支部に報告す)

六月十四日　火曜　晴

一、患者輸送上及閉鎖上の打合等の爲め事務長は鈴木書記を伴ひ網野、峰山へ出張。
一、閉鎖後救護關係者慰勞の件に付支部より通知あり。
一、糸井富美の父來る。
一、小野町役場書記、公會堂消毒の件に付來所。
一、配給汽車便。

「事務長日誌」

一、午前七時二十分より鈴木書記と共に峰山及網野へ赴く同所よりの移送患者は各一名と決定。
一、鄉村、山田村役場に於て「バラック」拂下代金を領收。
一、宮津收容所に赴き熟考中の殘留患者の意見を確めたるに野、小室の二名は退院、糸井富美は移送に決す。
一、叙上の調査に依り各所を通じ移送患者八名に決定、直に支部及府立醫大病院に電話報告したり。
一、患者中松井きぬ(峰山)糸井富美(宮津)は重症にして輸送途中危險に付近親より請書を徵し置きたり。

六月十五日　水曜、曇、午後雨

一、午前石井事務員を招致
一、午後長坂技手歸還看護婦へ給與金交付及患者移送の準備諸種の整理促進其他打合のため各收容所へ出張。
一、午前峰山附、鎌田、二村、西川の三看護婦荷物始末の爲め來る。
一、配給トラック便。
一、療院及收容所本日限り廢止。

「事務長日誌」

一、篤志者の調査を爲し案を具して支部長に報告の手續を爲す。
一、峰山町、島津村、市場村は尤も被害甚しき場所にして窮民多く救護機關撤退の後も尙引續き救療の必要あるを以て藥品及衞生材料の殘部無償交付方支部長に稟申す。
一、各所閉鎖の形式を了す、但し重症者は依然殘留せしめ療院は其數多きを以て遺憾なく準備を整へしむべく夜間諸種の注意を與ふ。
一、此の日夜に入り風雨となり移送日の天候大に氣遣はる。

六月十六日　木曜　雨

一、殘遺患者の全部を左の方法により京都へ移送す。

網野收容所	患者一名	醫長一名 看護婦三名
	午前六時四十六分網野驛發	
峰山收容所	患者一名	醫員二名 看護婦六名
	午前七時十三分峰山驛發	
宮津收容所	患者六名	看護婦三名
	午前八時十八分發車	

二等ボギー客車(四十八人定員)貸切一輛に全部搭乘、本部より鈴木書記、谷口事務員同乘、藤田事務長由良驛迄同乘して見送りをなす。

前日來の降雨尚歇まず細雨蕭々たる中を秩序整然出發、午後二時十八分京都着無事引渡を終了す。

一、峰山より歸還の皆木、西岡、中島、宮本、廣瀬、波多野の各看護婦歸着に付指定旅館へ宿泊せしむ。

一、府衞生課技手、網野より引繼を受けし寢臺の件に付來る

一、網野收容所へトラック二臺を送り物品を輸送す。

一、配給汽車便。

「事務長日誌」

一、風雨尚歇まず移送準備上困難を感じたるが早朝宮津收容所に赴き諸員を督し移送準備を調ふ。

午前七時二十分より霽間々々を利用して携帶品等を運搬せしめ最後に患者を宮津驛に移す、定刻に至り患者を載せたる貸切車は列車の最後に連結され徐々に停車せり、見送り人多く雜沓し殊に僅に三分停車にして非常に繁忙なりしも無事乘車せしむるを得丹後由良驛迄同乘して見送り車中救護員附添人に注意を加へ一々患者を慰問して下車、直に引返へしたるが最重症者二名とも存外平靜を保ちしに安堵せり。

午後四時前鈴木書記より、多數の看護婦を引率京都驛に出迎たる府立醫大松永助教授の盡力に依り無事同病院へ引渡したる旨報告ありだり。

右にて診療事務の終局を告げ殘務を整理するのみとなれり

一、支部の通牒に基き慰勞會招待の手續を爲す。

一、職員勤務成績を調査し支部長に內申す。

六月十七日　金曜　晴

一、午前事務長は療院跡始末の指揮及慰勞會準備行爲に付出向。

一、鈴木書記、谷口事務員午前十時十七分歸着。

一、峰山より歸還看護婦皆木智惠外五名歸京す。

一、網野より佐々木婦長、田中金子の二看護婦、三井事務員三宅事務員引揚げ歸着。

一、峰山收容所バラック拂下及藥品衞生材料交附に關する伺裁決あり。

一、峰山より諸物品を運搬。

一、トラック二臺使役。

「事務長日誌」

一、宮津收容所後始末指揮の爲め同所に臨む。

一、慰勞會は山嘉樓にて開催のことゝなし打合せの上同樓主に一任せり。

六月十八日　土曜　晴

一、婦長佐々木キヨウ、看護婦田中延、金子靜、岩井崇午後歸京す。

一、午前十時十三分支部長、副長到着に付事務長出迎ふ、同時に西原主事齋藤書記到着。

一、午後二時四十七分淺山院長着、府大武內書記隨行。

一、峰山收容所殘員西村博士、山尾醫員、吉富調劑員、後藤川崎兩事務員、今井婦長、看護婦三名午後四時二十分歸宮し婦長以下は公會堂へ宿泊せしめ他は指定旅館へ送る。

一、山嘉樓に於て救護關係者に對し鵜澤副長より挨拶あり。

一、毛布、蒲團類支部へ發送す。

一、乘用車一輛使役。

一、杉山支部長午後四時二十二分發歸京。

六月十九日　日曜　晴

一、淺山院長、西村博士、山尾醫員、吉富調外員午前十時二十五分發歸京。

一、西原主事、齋藤書記同時北行。

一、本日より公會堂に於て引揚げたる事務員、婦長、看護婦をして統計其他の殘務を處理せしむ。

一、公會堂內臨時施設の撤廢及修理に着手す。

一、舞鶴診療所へ殘品中所要の藥品材料を送附す。

六月二十日　月曜　晴

一、雨降らず水道水の流勢衰ふ。

一、公會堂にありし(療院時代使用)蒲團毛布類全部を京都府出張所員に引渡を了す。

一、各員殘務整理に多忙を極む。

一、事務長は警察署及町役場訪問。

六月二十一日　火曜　晴

一、殘務整理の進行捗々しからず支部へ事務員一名派遣方を要求す。

一、救護盡力者へ贈與品支部へ要求す。

六月二十二日　水曜　晴

一、物品の整理に熱中し箇數百四十四個を支部へ合同運送店に托送す。

一、具足島支部雇午後五時十七分着。

一、大丸吳服店より手巾二十六打着。

一、事務長警察署長訪問。

六月二十三日　木曜　晴

一、事務長は最後の挨拶及バラック代等整理のため各所へ出張。

一、物品の整理進捗し荷物百五箇を支部へ向け發送す。

一、川崎事務員本日限り解雇。

一、乘用車一輛使役。

六月二十四日　金曜　晴　微雨

一、公會堂引渡し準備をなす。

一、統計事務結了せざるも都合上擔當諸員指定旅館へ移る。

一、石井、尾崎事務員本日限り解雇。

一、物品の整理頗る手數を要するものゝみとなり進捗緩なり

「事務長日誌」

一、一齊に殘務整理に努め本日患者調査の大部分を終る。

一、物品整理は複雜なる爲今後尚數日を要する見込。

一、療院に使用したる公會堂の加工物取除き掃除、消毒、修理等引渡準備をなす。

六月二十五日　土曜　晴

一、統計の下調べ漸く纏まる。

一、物品整理未だ落着せざるも天幕を撤するに至る。

一、滯在看護婦の手傳により醫療器械を包裝整理す。

一、公會堂を正式引渡を了す。
一、宮津町役場員へ挨拶す。

六月二十六日　日曜　晴曇不定

一、山本市場村長代理挨拶のため來所。
一、長坂技手網野町に於ける諸未拂金交付のため出張。
一、午後四時二十二分淺野調劑員、藤森、今井兩婦長、松任松村、田守、辻、鈴木の各看護婦歸京す本日を以て招聘、召集したる救護員全部解散せり。
一、荷造り物品九十八個京都支部へ發送す。
一、保養所へ引渡品府中村へ運搬す。

六月二十七日　月曜　晴

一、後藤書記、三井事務員、三宅事務員擔當殘務結了す。
一、全員撤退の準備行爲及殘存荷物の整理をなす。

六月二十八日　火曜　晴

一、後藤書記、三井三一郎、具足島支部雇本日歸京。
一、事務長は直接間接援助したる外部有志者へ挨拶す。
一、今田宮津町役場員代表して挨拶のため來る。

六月二十九日　水曜　晴

一、事務長は綾部町役場へ謝儀贈呈のため先發。
一、午後より家明け渡し準備、殘存物品荷造り發送等漸く日沒の頃終了す、殘員悉く指定旅館に移る。

六月三十日　木曜　曇

一、午前六時五十八分殘員(事務長は綾部より乘車)長坂技手、鈴木書記、武長雇、小林種吉等宮津驛發同十一時三分二條驛着西原主事の出迎を受け支部へ到着す。
一、午後事務長、長坂技手、鈴木書記は府立醫大へ出向淺山院長松永助教授を訪問し且依託患者を慰問す。
一、事務長は解囑午後五時四十五分二條驛發歸鄉す。
一、奥丹後震災救護機關全部震災地を撤去す。

物品供給の狀況

宮津、峰山收容所は三月十九日現狀の儘京都府より移管し網野收容所は三月二十日陸軍救護班より引繼を受けたるに依り諸材料は差當り其儘襲用し得たりと雖も岩瀧收容所は三月二十四日開設し其他の各救護所は多く同月二十六日より開設し各所に要する諸材料は悉く一齊に調辨供給せざるべからず、而して通常物品と普通藥品とは概ね宮津町に於て購入し得たるも醫療上に用ふる器具器械の如きは本社より貸與を受けたる器具器械材料を應用し一面遠く京都市より急遽購買して以て漸く開設することを得たるが如き當時の困難想像するに難からず、爾來各所より日々請求する材料殊に藥品は其の種類頗る多種に渉り間々調辨し得られざるものありき。

患者附添人(患者一名に付附添人一名を限り食料を給與す)及救護員の食糧に就ては宮津、峰山、網野の三收容所は經驗ある傭人の手に依り炊爨せられ、岩瀧收容所は多く看護婦の手に依り、桑飼、三河内の救護所は篤志者の周旋に依りて賄はる、其の他の各救護所は悉く看護婦の手に依りて炊爨せられたり。

各所に要する食料品、薪炭等は最初は大體の見込を立て二三日分づゝを一時に供給したりと雖も四月に入りてよりは漸次氣候の溫暖となるに伴ひ變敗の虞ありしと秩序の立ちたるとに依り日々一齊に標準獻立を定め人員に相當する材料を毎日配給したり然れども宮津を除くの外何れも嗜好の適不適に依り獻立を變更調理されたるや論なし。

以上の諸材料は日々乘用自動車(支部、何鹿郡病院用)又はトラック、汽車、自轉車等に依り震災地帶を岩瀧より加悅谷(石川、桑飼、加悅、三河内、市場、山田)方面と中、竹野(口大野、河邊、吉原、峰山、丹波、鄕、網野、木津、島津、鳥取)方面とに分ち輸送したり。

茲に救護機關開設中の獻立を參考のため登載す。

獻立表　(主食ハ米飯トス)

	朝	晝	夕
三月二十八日	若布・チクワ・味噌汁 漬物	牛肉ウマ煮、尺子菜浸シ、漬物	燒肴、千切揚豆腐、漬物
同　二十九日	油揚・燒鈇・味噌汁、漬物	牛肉・馬鈴薯・煮込、漬物	ひらめ刺身、牛房煮付、漬物
同　三十日	甘薯味噌汁、漬物	蒲鉾・干瓢・煮付、漬物	牛肉・玉葱・人參・シチウ、漬物
同　三十一日	アゲ・葱・味噌汁、漬物	鰯、梅干穫婆草浸シ漬物	煮肴、薇煮付、漬物
四月一日	蒲鉾・白豆腐・味噌汁 漬物	牛肉・牛房・人參・大根小芋・生姜・筑前煮	鰈煮付、水菜浸シ、漬物
同　二日	チクワ・大根・味噌汁 漬物、金山寺	牛肉・燒豆腐・味噌煮 漬物	玉子燒、菠薐草、サトリ澄シ汁、漬物
同　三日	甘薯味噌汁、漬物、	蒲鉾・高野豆腐・煮付 漬物	めばる煮付、葱・豆腐あへもの、漬物
同　四日	若布味噌汁、煮豆、漬物	牛肉あんかけ(鹽味)ジヤガ鹽蒸シソースカケ、漬物	鱒照燒、燒豆腐・蒟蒻煮付、澤庵
同　五日	アゲ・葱味噌汁、梅干、澤庵	牛肉・玉葱・ジヤガ・人參シチウ、奈良漬	鰮鹽燒、菠薐草浸シ澤庵
同　六日	竹輪・赤蕪味噌汁、澤庵、金山寺	鹽鱒湯通シあんかけ小芋煮付、菲澤庵	蒲鉾・湯葉・高野・椎茸煮付、澤庵
同　七日	蒲鉾・豆腐味噌汁、澤庵	鰊煮付、ホーレン草浸シ、澤庵	牛肉・玉葱煮込(食後林檎)、澤庵
同　八日	甘薯味噌汁、澤庵、	牛肉・蒟蒻・アンカケ煮、奈良漬	鰮・土當婦酢味噌あへ豆腐スマシ汁、澤庵
同　九日	八千代鈇味噌汁、梅干、澤庵	玉子燒、水菜からしあへ、澤庵	揚豆腐・千切煮付、大豆、昆布交煮、澤庵
同　十日	若布味噌汁、澤庵、	牛肉煮付、甘薯キントン、味噌漬、食後パナ、	肴・牛房煮付、澤庵
同　十一日	蕪味噌汁、澤庵、	牛肉あんかけ煮(鹽味)玉葱ソースかけ澤庵	ひうを二杯酢、豆腐でんがく、澤庵
同　十二日	豆腐味噌汁、澤庵、	竹輪・大根煮村、福神漬	鯖鹽燒、干瓢煮付、澤庵
同　十三日	あげ・菠薐草味噌汁、梅干、澤庵	牛肉・錢鈇味噌煮、澤庵	肴・湯葉・椎茸・水菜生姜あんかけ煮、奈良漬、澤庵
同　十四日	甘薯味噌汁、福神漬 澤庵	牛肉・牛房・人參・蒟蒻筑前煮、澤庵	蒲鉾、葱・豆腐木のめあへもの、澤庵
同　十五日	大根味噌汁、味噌漬 澤庵	鹽鱒湯通シあんかけ水菜浸シ、澤庵	煮肴、小芋、澤庵、
同　十六日	あげ・葱・味噌汁、澤庵、	牛肉・玉葱・人參・ジヤガシチウ、奈良漬 澤庵、	肴鹽燒、蕗煮付、澤庵、
同　十七日	若布味噌汁、梅干、澤庵、	牛肉鹽蒸シ・甘薯ソースかけ、澤庵、	肴照り燒、高野・干瓢煮付、澤庵、
同　十八日	蒲鉾・土當婦味噌汁 澤庵、	鰊煮付、ホーレン草浸シ、福神漬	玉子燒、牛房・蒟蒻煮付、澤庵、

同　十九日　あげ・大根味噌汁、澤庵、　牛肉・生姜時雨煮、ジヤガ芋きんとん澤庵　鰮櫻干、豆腐あんかけ、奈良漬、澤庵、

同　二十日　竹輪・三ツ葉味噌汁味噌漬、澤庵、　牛肉・燒豆腐味噌煮澤庵、　煮肴、筍・葱味噌あへ、澤庵、

同　二十一日　湯葉・菠薐草味噌汁梅干澤庵　難肉・ジヤガ芋・蒟蒻鹿兒島汁、澤庵、　肴鹽燒、水菜からしあへ、澤庵、

同　二十二日　玉子・葱すまし汁、澤庵　牛肉葛とぢ、酢牛房奈良漬、澤庵　肴てりやき、斗六煮豆、澤庵

同　二十三日　あげ・苣萵味噌汁、福神漬、澤庵　牛肉・葱煮込、澤庵　肴・蕗煮付、澤庵、

同　二十四日　若布味噌汁、梅干、澤庵、　鹽鱒燒、甘薯きんとん、澤庵　肴鹽燒、菠薐草浸し澤庵

同　二十五日　竹輪・燒豆腐味噌汁澤庵　牛肉・玉葱・人參・ジヤガシチウ、奈良漬澤庵　煮肴、昆布・大豆交ぜ煮、澤庵

同　二十六日　甘薯味噌汁、澤庵、　牛肉あんかけ均味、牛房・蒟蒻いりつけソース、福神漬　蒲鉾、あげ燒、水菜浸シ、澤庵

同　二十七日　三ツ葉・ぜに鉄味噌汁、梅干、澤庵　難肉・蕗・筍煮付、澤庵　烏賊鹽燒、大根卸シ澤庵

同　二十八日　蒲鉾・土當婦・すまし汁、澤庵　牛肉・葱味噌煮、奈良漬、澤庵　鍊昆布卷、唐苣萵浸シ、澤庵

同　二十九日　大根味噌汁、福神漬　鰮櫻干、あげ・千切煮付、澤庵　烏賊てりやき、菠薐草浸シ、澤庵

同　三十日　竹輪・やき鉄味噌汁梅干、澤庵　牛肉うま煮、甘薯きんとん、澤庵　丸干いはし、筍・若布煮付、澤庵

五月一日　あげ・葱味噌汁、澤庵　玉子燒、水菜浸シ、澤庵　鯖(一鹽)作り、大根卸シ、奈良漬、澤庵

同　二日　菠薐草味噌汁、福神漬、澤庵　牛肉・玉葱湯通シソース、澤庵　肴・蕨煮付、澤庵、

同　三日　若布味噌汁、梅干、澤庵　烏賊・苣萵酢味噌あへ、澤庵　蒲鉾・高野・干瓢煮付澤庵

同　四日　あげ・燒豆腐味噌汁澤庵　牛肉・さや豌豆・葛かけ煮、奈良漬、澤庵　肴てりやき、蕨浸シ

同　五日　あげ・若菜味噌汁、澤庵　難肉・筍煮込、澤庵　肴鹽燒、うど・蒟蒻あへ物、福神漬、澤庵

同　六日　大根味噌汁、梅干、澤庵　牛肉・葱・ジヤガ・トマトシチウ、澤庵　竹輪・牛房・小芋煮込澤庵

同　七日　湯葉・椎茸・生姜あんかけ汁、奈良漬、澤庵　鹽鱒湯通シ、苣萵浸シ、澤庵　作り(鯛)大根のけんあら木ノ芽薄雪汁、澤庵

同　八日　尺子菜味噌汁、黒豆煮豆澤庵　牛肉・てこ芋・大根・ジヤガ芋筑前煮、福神漬、澤庵　櫻干、若布・筍煮込澤庵

同　九日　ぜに鉄・三ツ葉味噌汁、澤庵　鍊・蕨煮付、澤庵、　玉子燒、蕗煮付、梅干、澤庵

同　十日　燒豆腐味噌汁、澤庵　牛肉・ジヤガ芋煮込奈良漬、澤庵　魚照燒、苣萵浸シ、澤庵

同　十一日　蒲鉾、笹掻牛房、味噌汁、澤庵　難肉・筍・蒟蒻煮込、福神漬、澤庵　煮肴、土當婦・若布酢あへ、澤庵

同　十二日　竹輪・蕗味噌汁、梅干、澤庵　牛肉・絹さや豆煮付澤庵　肴鹽燒、あげ・尺子菜浸シ、澤庵

同　十三日　新牛房味噌汁、奈良漬、澤庵　丸干鰮、椎茸・高野薔・煮付、澤庵　蒲鉾、大根卸シ、斗六煮豆、澤庵

同　十四日　あげ・八千代鉄味噌汁、福神漬、澤庵　牛肉・葛かけ鹽味・玉葱ソース、澤庵　作り、瓜のけん、あら汁三ツ葉、澤庵

同　十五日　豆腐味噌汁、大豆煮豆、梅干、澤庵　蒲鉾・湯葉・てこ芋・土當婦・生姜、あんかけ煮、澤庵　肴てりやき、あげ・若菜煮物、澤庵

同　十六日　若布味噌汁、福神漬澤庵　難肉・牛房・蒟蒻・生姜、筑前煮、澤庵　煮肴、あげ蕨浸シ、澤庵

同　十七日　竹輪・三ツ葉味噌汁東京漬澤庵　牛肉・玉葱・ジヤガ・トマトシチウ、澤庵　肴鹽燒、蕗・筍煮付奈良漬、澤庵

同　十八日　あげ・苣萵味噌汁、梅干、澤庵　蒲鉾、蒟蒻・土當婦味噌あへ、奈良漬、澤庵　作り、けん大根、三ツ葉あら汁、澤庵

同　十九日　玉子汁、チリメン雜魚大根卸シ、澤庵　牛肉・玉葱・糸蒟蒻味噌煮、福神漬、澤庵　肴、牛房・絹さや・煮付、澤庵

同　二十日　鹽鱒、おぼろすまし汁、澤庵　難肉・燒豆腐・ぜに鉄葱煮込、澤庵　肴鹽燒、若菜浸シ、金時煮豆、奈良漬

同　二十一日　竹輪・蕗味噌汁、梅干、澤庵　牛肉・玉葱・ジヤガ・コシヨウ煮込、福神漬、澤庵　肴てりやき、小芋・松茸煮付、澤庵

同　二十二日　うど味噌汁、東京漬澤庵　烏賊・豆腐・かぶら菜味噌あへ、澤庵　鍊昆布卷、さや豌豆付煮、澤庵

同　二十三日　あげ・苣萵味噌汁、澤庵　牛肉、生姜時雨、牛房ノきんぴら、奈良漬、澤庵　肴均燒、竹輪・椎茸湯葉・百合根煮〆、澤庵

同　二十四日　蒲鉾・三ツ葉すまし汁、黒豆煮豆、澤庵　うるめ、土當婦・筍・あへもの、東京漬、澤庵　鯖作り、あげ・燒豆腐女夫煮、澤庵

同　二十五日　若布味噌汁、斗六煮豆、澤庵　牛肉・玉葱煮込、ホーレン草浸シ、澤庵　煮肴、てこ芋・さや豌豆煮付、奈良漬、澤庵

同　二十六日　あげ・尺子菜味噌汁梅干、澤庵　難肉・蒟蒻・ぜに鉄・若葱煮込、澤庵　煮肴、蕗、千切・若布三杯酢、澤庵

同　二十七日　葱味噌汁、雜魚胡瓜酢揉み、海苔佃煮、澤庵　牛肉・絹さや葛引・鹽味ソース、澤庵　肴均燒、昆布・大豆交煮、奈良漬、澤庵

同　二十八日　竹輪・千切味噌汁、澤庵　玉子燒、高野・湯葉・松茸煮付、澤庵　肴照燒、うど・蒟蒻・三ツ葉あへもの、福神漬、澤庵

同　二十九日　あげ・蕪菜味噌汁、梅干、澤庵　豌豆飯、牛肉・生姜時雨、豆腐すまし汁澤庵　鯖均作り、大根卸シ鶉豆、澤庵

同　三十日　蒲鉾・三ツ葉味噌汁澤庵　鍊・刻昆布煮付、奈良漬、澤庵　肴・牛房・豌豆煮付、澤庵

同　三十一日　とろゝ・板鉄すまし汁、燒海苔、福神、澤庵　牛肉・燒豆腐煮込、薐婆草浸シ、澤庵　燒烏賊・てこ芋・玉菜さや豆煮付、澤庵

六月一日　絹さや味噌汁、福神漬、澤庵　小豆飯、鯛・蕗煮付澤庵　難肉・ジヤガ・牛房・蒟蒻さつま汁、澤庵

同　二日　竹輪・若布味噌汁、梅干、澤庵　牛肉・玉葱・豌豆シチウ、澤庵　鹽燒肴、あげやき尺子菜浸シ、澤庵

同　三日　蒲鉾、海苔、大根卸シ、東京漬、澤庵　櫻干、豆ノ飯、唐苣萵浸シ、澤庵　烏賊作り、高野干瓢煮付、澤庵

同　四日　さゝがき牛房味噌汁斗六煮豆、澤庵　牛肉葛かけ鹽煮、キヤベツ湯通シソース奈良漬、澤庵　肴照燒、尺子菜浸シ豆腐すまし汁、澤庵

同　五日　ぜに鉄味噌汁、梅干澤庵　難肉・細挫牛房・蒟蒻煮込、澤庵　玉子燒、蕗・青豌豆煮付、澤庵

同　六日　蒲鉾・湯葉・生姜あんかけ汁、福神漬、澤庵　牛肉・ジヤガ芋・コロハケー、キヤベツ、ソース、澤庵　煮肴、青豌豆、菜浸シ、澤庵

同　七日　大根味噌汁、金時煮豆、澤庵　鍊煮付、若布、青豌豆、澤庵　肴鹽燒、あげ、苣萵浸シ、奈良漬、澤庵

同　八日　竹輪・薐婆草味噌汁澤庵　牛肉・燒豆腐味噌煮澤庵　煮肴、絹さや豆、蕗、福神漬、澤庵

同　九日　若布味噌汁、梅干、澤庵　鰈干物、若葱酢味噌あへ、澤庵　肴作り、牛房、青豌豆、澤庵

同　十日　蒲鉾・絹さや豆味噌汁、澤庵　牛肉葛とじ、ジヤガ芋きんとん、奈良漬澤庵　肴てりやき、胡瓜揉み、澤庵

同　十一日　湯葉・庄内鉄味噌汁、梅干、澤庵　難肉・若葱・牛房煮付澤庵　烏賊作り、あげ・蕪菜浸シ、澤庵

同　十二日　竹輪・高野味噌汁、澤庵　牛肉・玉葱・ジヤガ芋シチウ、澤庵　豆ノ飯、肴煮付、キヤベツ浸シ、奈良漬澤庵

同　十三日　薐婆草味噌汁、煮豆澤庵　櫻干、胡瓜揉み、福神漬、澤庵　肴鹽燒、茄子・新豌豆煮付、澤庵

同　十四日　蒲鐸、大根賊シ、おぼろすまし汁、澤庵　牛肉・絹さや・ジヤガ煮込、奈良漬、澤庵　煮肴、あげ苣萵浸シ澤庵

同　十五日　若布味噌汁、斗六煮豆、澤庵　難肉・牛房・蒟蒻・若葱煮込、澤庵　小豆飯、肴作り、ホーレン草浸シ、澤庵

同　十六日　竹輪・蕪菜味噌汁、梅干、澤庵　牛肉葛とじ、ジヤガ芋、さや豌豆、奈良漬、澤庵　肴照燒、茄子・南瓜煮付、澤庵

口　宮津收容所

三月七日與謝郡醫師會長内山錬吉理事中村芳雄會員高井嘉一の三名は震災直後即時被害地に向つて出動し約百名以上の傷病者に應急處置を施したるも被害區域廣大にして傷病者數多大なるに拘はらず該地方の家屋は大半倒壞燒失し物資は缺乏し電燈電話は停絶し到底震源地附近に於て療院を急造する

の不可能なるを實見し寧ろ被害少なかりし宮津町に救護所を設置するの有利なるを認め三名熟議の上候補家屋を宮津町長の保管する京都府宮津公會堂と定め未だ町長の許可を得るの暇なきも假定を以て三月八日より宮津町公會堂に於て救護所を設置する旨直接傷病者に向つては勿論地方町村吏員並に村醫に宣傳し八日午前八時半頃宮津町に歸着したる頃既に公會堂には傷病者續々詰め掛けつゝあるを以て宮津町長に公會堂使用の件願出で直ちに其許可を得たり更に町長は町書記小野恒治、今田實、武内啓助の三名と給仕一名を派遣して救護業務の援助を爲す依て卽時宮津町在住の醫師全部卽ち相原包三田中醇、濱見津、安田收藏、佐藤理兵衞、日下廣英、澁谷雅雄、大木良太郎に檄を飛して救護事業に向つて協同努力を乞ひ快諾を得たり次で赤十字社に向つて急を報じ應援を求め直ちに救護書記武長親と京都支部看護婦四名の派遣を得たるを以て漸く救護班の組織成る直ちに公會堂門柱に與謝郡醫師會救護所の看板を掲げたり一方には衞生材料の購入並に會員各自所有の醫療器具を運搬し諸準備稍整ひ八日午前十一時頃より診療を開始せり然るに豫想に反して大多數の患者は症狀の關係と家事の關係により勢ひ收容せざるべからざる必要に迫り從て寢具並に食料の配給或は媛爐並に電燈の設備等診療以外の雜務に忙殺せられ爾來日々患者來集し入院者は梯次的に增加し殊に骨折患者大多數を占め從てギプス繃帶及切斷術を要するもの多く概して重症にしてカンフル劑ジキタリス劑等强心劑の注射は勿論葡萄糖食鹽液リンゲル液等の靜脈注射を要するもの一日二十を越えたり十一名の醫師は晝夜不眠不休努力したるも尙は足らざるの狀況なりき而して一面憂慮す可きは患者の增加と共に之に要する經費にして一郡醫師會の如き貧弱なる團體にては到底負擔に堪へざるのみならず救護事業の如き總會の決議を經たるにあらずして宮津町在住會員のみにて着手したるものなれば一層其困難を感じたり萬策茲に盡きて宮津町に負擔を懇請したるも町長は肯せず再三交涉の結果責任は後日に讓り急に與謝郡醫師會救護所の看板を撤去し改めて宮津震災救護所の看板を掲ぐべしとの注意に依り三月十三日實行せり同日京都府衞生課長より今後は勿論成るべく救護所開設以來の經費は京都府の負擔と爲すべしとの言を聞き經濟上の顧慮全く除かれ愁眉を開く三月十四日看板を京都府震災宮津救護療院と改む而して京都府より衞生主事補戶田爲治赴任し來り事務長の職を執る三月十五日朝夕二回に赤十字社支部より看護婦九名來援す宮津町藥劑師殿村五兵衞は三月十三日より六日間同勝沼彦治郎は三月十四日より三日間數時間づゝ來援す三月十六日京都府衞生技手平賀鼎赴任し來り藥局長の職を執る其間看護婦人夫等に移動ありたるも戶田平賀兩氏着任後初めて事務整理の緒に就き衞生材料並に諸般の設備稍完備す三月十九日日本赤十字社京都支部所屬に移り更に看板を變改す宮津町醫師十一名は勤續せること故の如し、之を日本赤十字社京都支部震災救護療院宮津收容所の前身とす。

本收容所は宮津町字鶴賀に在りて郡制廢止以前に郡會議事堂として建築したるものにして現時町有に屬せり。

卽ち別圖の如く會議室及議員休憩室を病室とし、從來當支部療院診療所に使用したるものを診察室、手術室、調劑室、材料室に充て階上全部を看護婦室となし、別に便所、浴室、賄所等を急造し、尙傳染性患者を收容する爲め公會堂の前面にある元城東村役場に修理を加へ三月二十日より無償使用したり。（別圖參照）

職員中醫員は最初の關係上宮津町開業醫をして輪番之れが治療を擔當せしめたれども、其他の職員の充實は療院本部に於て準備整ふ迄は各員其儘事業を繼續（炊事を除き）し三月二十一日看護婦長及看護婦五名の增配により患者治療及看護は一切本社救護員の手に移し、同二十三日藤田事務長着任、二十四日淺野調劑員、森本事務員の就職に依り全部の引渡を受けたり、三月十九日移管當時現在せる入院患者六十六名なりしが三月二十七日七十四名に達し、四月中旬頃より逐次退院し同月末日四十七名に減少、五月十五日には二十八名に減せり、五月末日尙在院するもの二十二名ありしと雖も退院し得るもの多きを以て六月十五日には京都府立醫科大學附屬醫院へ委託する六名を除き他は悉く退院せしめ閉鎖するに至れり移管を受けたる以來入院患者實人員百二名治療日數四千七十七日、外來患者實人員百九十三名治療日數千二十九日なり、左に開設期間中の職員氏名、及患者の數等を掲ぐべし。

職員表

着任月日	轉出月日	職	氏名	摘要
三月十九日	六月十五日	醫長	内山 錬吉	
同	同	醫員	中村 芳雄	
同	五月廿一日	同	相原 包三	
三月廿四日	六月廿六日	調劑員	淺野 岸郎	
三月廿四日	四月十六日	事務員	森本喜平太	府吏トナル
三月廿五日	六月廿四日	同	石井 德藏	殘務ニ從事
四月十七日	同	同	尾崎 助松	森本事務員補員、殘務ニ從事
三月廿一日	六月廿六日	看護婦長	藤森たけの	五月八日ヨリ同十五日迄歸京殘務ニ從事
五月七　日	五月十六日	同	早見 せつ	藤森婦長不在中代員
三月十五日	同	看護婦	北川ナラヱ	
同	六月廿六日	同	鈴木 つた	殘務ニ從事
同	五月一　日	同	公原 米子	市場救護所ヘ
同	同	同	西岡トラヱ	岩瀧收容所ヘ
同	三月廿一日	同	土井ユキヨ	河邊救護所ヘ配屬
同	同	同	西川 美惠	同
同	五月一　日	同	波多野清子	市場救護所ヘ配屬（自三月三十一日至四月三十日山岡附）
三月十七日	六月十六日	同	猶本 龜江	外勤部、歸還（患者護送）
同	三月廿一日	同	鎌田 ミツ	外勤部、河邊救護所ヘ配屬
同	六月十六日	同	石原 延子	外勤部、歸還（患者護送）
同	四月十二日	同	秋月 秋子	外勤部、病氣ノタメ
同	同	同	河原 ノヱ	同
三月二十日	三月廿六日	同	中島 よれ	滋賀支部、鳥津救護所附ヘ
同	同	同	岡田 やゑ	同
同	同	同	水本よし江	同
同	同	同	武立 久夫	同
同	同	同	太田 千代	同
同	同	同	林 マツコ	同
三月廿二日	同	同		

| | | |

六月十五日閉鎖後調劑員一名、事務員二名、婦長一名、看護婦三名、傭人二名は殘務整理の爲め引續き滯在せしめ、峰山、網野收容所より引揚げたる殘留員と共に統計事務、患者日誌等の整理を爲さしむると共に一面臨時傭入人夫を督して府より移管を受け使用したる諸物件の返戻、臨時急設物件の撤廢、館内外掃除、（隔離病舍共）消毒より破損品、毀損の箇所等の修繕を行ひ六月二十五日之を返還したり。而して三月八日收療開始より閉鎖に至る期間に於て慰問、救恤、社會奉仕等の爲め來訪したるもの其他主要記事を摘錄すべし。

三月　八日　滋賀支部救護班員九名、府立醫大同上五名、兵庫縣救護班二十名宿泊。

三月　九日　不明の救護班五人、奈良支部救護班十五人、大阪市救療班三十名、京都支部救護班九名宿泊。

本府警察部長慰問。

三月　十日　土屋侍從一行慰問せらる。

三月十一日　本府知事慰問せらる。

宮津町字萬年看護婦木村あや篤志奉仕。

三月十二日　救恤品、木炭三俵、梅干二樽、菲一樽、大根漬一樽を受領す。

宮津町在住看護婦吉田みち子、杉森きぬよに病者看護を依頼したり。

同　十三日　救恤品、米二俵、木炭十俵を受領す。

岩瀧町糸井した篤志看護に從事。

同　十四日　宮津町婦人會長及會員六名慰問、慰問袋八十個寄贈。

大阪基督敎婦人矯風會長外一名慰問。

京都府醫師會長及副會長慰問。

救恤品、蒲團二〇〇枚、毛布一〇〇枚、ネル單衣一〇〇、を受領す。

日出新聞社宮津支局より慰問袋三十五ケを受領す。

神戸市水木通一丁目玉田繁枝篤志看護に從事。

三月十五日　京都支部より醫料品二十個到着。

救恤品、米九叭を受領す。

本野愛國婦人會會長、篤志看護婦人會京都支會、愛國婦人會京都府支部各代表者、愛國婦人會京都府支部主事外一人慰問袋百二十ケ携帶慰問。

神戸婦人同情會主事（長石秀子）婦人矯風會福知山支部芦田春子慰問。

京都日々新聞宮津支局より慰問袋十個及漬物二個寄贈。

三月十七日　宮津町住吉屋旅館より蜜柑一箱寄贈。

篤志看護婦木村アヤ歸宅申出。

三月十八日　大阪市婦人聯合會長其他代表六名慰問。

三月十九日　入院者患者中丹毒症を發するものあり隔離す。

本日より日本赤十字社京都支部の經營に移る、事務職員當分其儘執務すべき旨救療衞生係長より通報あり。

本派本願寺岡部敎務部長外三名慰問品携帶來訪。

三月二十日　舞鶴明倫校訓導新國きみ、舞鶴町立幼稚園山崎ひさ子、東京丹後人會幹事野村利兵衞、東京丹後會救援隊寄贈。

奥田時藏等慰問。

京都市看護婦組合石川マサ、大重フジエ、木村ヒサの歸京

同　廿一日　京都成安女子學院長瀨尾千賀子、同校友會代表三浦たつ子慰問。

同　廿二日　愛國篤志兩婦人會京都支會長濱田久子外代表三名慰問、ネル單衣一枚づゝ及ビスケット贈與。

同　廿三日　篤志看護婦吉田、杉森、歸宅。

同　廿四日　移管事務一般の引繼を了す。

同　廿五日　永尾大阪支部主事、大竹本府學務部長、小倉團體係來訪。

同　廿六日　大阪支部石川駐在救護班長宮崎松記代表として慰問。

同　廿七日　大阪府屬中尾義信慰問、小谷中郡醫師會長打合の爲め來訪。

同　廿九日　西原主事、靜岡支部書記慰問。

少年保護婦人協會大阪支部（大阪市東區寺山町四九〇）理事西脇りか、新田倭文子慰問菓子料拾圓寄贈。

四月一日　坂本副社長一行及大臣一行の視察慰問あり。

同　三日　峰山町醫師小谷完一來訪。

淺山院長來所。

同　五日　患者及附添人精神慰藉のため蓄音機使用。

同　六日　小畑大阪支部病院看護婦監督來院慰問の上患者へ貳拾圓、看護婦へ靴下、菓子寄贈。

宮津町理髮組合より男六女四、梳子四、奉仕理髮。

宮津小學校四方訓導女敎員二名と共に蓄音機携帶慰問。

四月七　日　小畑看護婦監督再び來訪更に金七圓を寄贈。

宮津町理髮組合員男十、女七、梳子四、奉仕理髮をなし、男用垢掻き四十組、女用櫛及簪四十組を寄贈。

雜役稻本正己解傭、稻岡武夫、中北義雄を每日勤務とす。

宮津校四方訓導及女敎員二名慰問のため蓄音機使用。

同　十二日　宮津校敎員三名（例の通）蓄音機使用慰問。

同　十四日　院長來院　總裁殿下御言葉傳達後患者附添人小西タツ、長島トメの兩名へ精神的奉仕に對し賞與す。

宮津町池田進一郎外二名字本町を代表慰問、慰問袋八十餘點寄贈。

同　十五日　府出張所衞生係慶松警部補、今村巡査部長、宮川巡査來訪。

同　十七日　カトリック敎宣敎師山中最彦、外二名來訪菓子寄贈。

同　二十日　福井支部書記池内彌内交替看護婦を伴ひ來所。

同　廿一日　府立醫大鈴木博士來所。

同　廿二日　菅沼府事務官來所。

同　廿三日　宮津町理髮組合員男五、女七、奉仕理髮。

患者減少に付一室に移轉し、應接室、食堂に應用す。

同　廿六日　府立醫大松永助敎授來所。

五月六　日　杉山知事（支部長）一行視察、慰問、府立醫大河村博士患者診察。

同　十一日　宮津町豫防注射援助のため看護婦二名中學校へ

派遣。
同　十二日　豫防注射援助昨日の如し。
同　十七日　宮津町理髪組合員九名奉仕理髪。
同　十九日　看護婦一名宮津町豫防注射應援のため女學校へ派遣す。
　橋立新聞記者來訪。
五月二十日　午後蓄音機使用。
同　廿五日　德川副社長、鵜澤内務部長（副長）一行視察慰問。
五月卅一日　岩瀧收容所後遺患者收容。
　副社長よりの菓子料各職員へ交付す。
六月九　日　隔離病舍消毒を行ふ。
同　十二日　組合協會日曜學校生徒約四十名、渡邊執事に引率せられ患者を慰問し花束寄與。
同　十三日　宮津町理髪組合員十名、最後の奉仕理髪。
同　十四日　平賀府衞生技手醫療材料引繼のため來所。（十八日迄滯在の豫定）
　退院患者中必要の者六名松葉杖給與。
同　十五日　京都へ送る患者は其の儘として救療事務閉鎖。

八　岩瀧收容所

　本所は岩瀧町外六ヶ村避病舍を使用せり、位置は同町字弓木小字家瀧一百三十當地にして最近の建築に係り諸般の設備完全せるが震禍の爲め小破を被りたるを直に修理を加へたるを以て診察室、醫員室、調劑室、看護婦室、浴室、便所に至る迄悉く具はる、配置別圖の如し。
　同町罹災患者の救護は東京市より出張せる醫學士戸塚文卿日置村開業醫田井高成兩氏の手に依りて行はれたるが三月二十四日藤田事務長、長坂技手同町役場を訪ひ町長と協議の末卽日療院本部より救護材料を運搬し二十五日醫員二名看護婦六名事務員一名傭人二名を配屬して右兩氏の患者を引繼ぎ二十五日より開設することゝなれり。
　本所に於て收容せる患者は少數にして最多數僅に十名を過ぎずと雖も外來患者比較的多く又往診を要する患者あり殊に五月一日より山田村救護所を兼攝したるに因り多忙なりき、然るに漸次醫師の開業準備成り秩序の漸立と共に第三期整理の際殘遺患者は宮津收容所へ送り五月三十一日閉鎖せり、入院患者人員十六名治療日數五百五日、外來患者實人員千九十名治療日數七千八百八十八日に及べり本期間に勤務したる職員及日次患者其他員數表等左の如し。

職員表

着任月日	轉出月日	職	氏 名	摘 要
二月廿四日	五月廿一日	醫長	宇多小路雄一	（期間中、丹羽喜隆、神原政明、今西義男、西村利雄、來須正男ノ諸氏交代勤務セリ）
同	同	醫員	市川賢佶	
三月廿五日	四月八日	看護婦	山本たみ	歸京
同	五月一日	同	宮島捷子	支部療院へ復歸
同	四月八日	同	若林一江	同
同	五月一日	同	谷まつ	大阪支部病院へ
同	同廿一日	同	廣瀨房枝	峰山へ
同	同	同	宮本貞子	同
四月七日	四月十八日	同	森澤智惠子	滋賀支部所管、京都支部へ召集
四月十七日	五月一日	同	渡邊貫美	鳥取救護所ヨリ
五月一日	五月廿一日	同	松村カ子	石川ヨリ入、峰山へ
同	同	同	二村ミキ	鳥取ヨリ入、峰山へ
同	同	同	西岡トラエ	宮津ヨリ入、峰山へ
三月廿五日	同	事務員	糸井時藏	町長推薦

日別取扱患者及職員其他員數表

月日	收容患者	外來患者	醫長	事務員	看護婦	其他	摘要
三月二十五日	一	三〇	二	一	六	二	其他二名ノ外ニ避病者固有ノ傭人二名アリ以下同ジ
二十六日	一	四九	二	一	六	二	
二十七日	一	四七	二	一	六	二	
二十八日	一	三七	二	一	六	二	
二十九日	二	六八	二	一	六	二	
三十日	三	三七	二	一	六	二	
三十一日	六	一〇八	二	一	六	二	
四月一日	六	七一	二	一	六	二	
二日	八	一〇七	二	一	六	二	
三日	八	三七	二	一	六	二	
四日	八	四四	二	一	六	一	
五日	八	五三	二	一	六	二	
六日	八	六三	二	一	六	二	
七日	八	七六	二	一	六	二	
八日	八	八六	二	一	五	二	
九日	八	九一	二	一	五	二	
十日	八	一〇二	二	一	五	二	
十一日	八	一〇四	二	一	五	二	
十二日	八	一〇四	二	一	五	二	
十三日	九	九三	二	一	五	二	
十四日	二	八六	二	一	五	二	
十五日	二	九三	二	一	五	二	
十六日	二	八五	二	一	五	一	
十七日	二	九七	二	一	五	二	
十八日	二	九三	二	一	五	二	
十九日	二	七六	二	一	五	二	
二十日	二	八〇	二	一	五	二	
二十一日	二	八〇	二	一	五	二	
二十二日	二	一一三	二	一	五	二	
二十三日	二	一一六	二	一	五	二	
二十四日	二	一二八	二	一	五	二	
二十五日	二	一〇七	二	一	五	二	
二十六日	二	一一九	二	一	五	二	
二十七日	二	一二九	二	一	五	二	
二十八日	二	一二四	二	一	五	二	
二十九日	二	一一八	二	一	五	二	
三十日	二	一〇四	二	一	五	二	
五月一日	二	七七	二	一	五	二	
二日	二	一〇四	二	一	五	二	
三日	二	七二	二	一	五	二	
四日	二	八八	二	一	五	二	
五日	二	一二六	二	一	五	二	
六日	二	一〇五	二	一	五	二	
七日	二	八七	二	一	五	二	
八日	二	一三五	二	一	五	二	

月日	收容患者	外來患者	醫長	醫員	事務員	看護婦	其他	摘要
四月九日	六	一二三	二	一	一	五	二	
十日	六	一二六	二	一	一	五	二	
十一日	六	一二五	二	一	一	五	二	
十二日	六	九三	二	一	一	五	二	
十三日	六	一〇三	二	一	一	五	二	
十四日	六	九六	二	一	一	五	二	
十五日	六	一二六	二	一	一	五	二	
十六日	六	一二四	二	一	一	五	二	
十七日	六	一二一	二	一	一	五	二	
十八日	六	一〇〇	二	一	一	五	二	
十九日	六	一二九	二	一	一	五	二	
二十日	七	一〇一	二	一	一	五	二	
二十一日	六	一三一	二	一	一	五	二	
二十二日	六	一〇六	二	一	一	五	二	
二十三日	六	一二四	二	一	一	五	二	
二十四日	六	一二三	二	一	一	五	二	
二十五日	六	一二五	二	一	一	五	二	
二十六日	六	一二四	二	一	一	五	二	
二十七日	六	九九	二	一	一	五	二	
二十八日	六	一〇二	二	一	一	五	二	
二十九日	六	一二四	二	一	一	五	二	
三十日	—	一〇九	二	一	一	五	二	
三十一日								

（日誌拔萃）

四月二一日　坂本副社長一行巡視。

同　六　日　府立醫大河村博士巡視。

同　七　日　藤田事務長、小畑看護婦監督來所、森澤看護婦到着。

四月八　日　山本、若林看護婦歸京。

同　十　日　丹羽醫員着所、（市川醫員ト交代）。

同　十二日　事務長來所記念撮影。

同　十四日　淺山院長來所巡視　總裁殿下御言葉傳達。

四月十五日　宇多小路醫長ト交代のため到着。

木村府衞生課警部來所。

同　十七日　渡邊看護婦到着。

同　十八日　森澤同　歸京。

同　廿一日　木下警部補、警視廳貸與品調査のため來所、（保管品百七十枚の內毛布七十五枚、寢臺三十臺、擔架二箇）

府立醫大鈴木博士視察。

同　廿二日　療院本部より患者取扱に關する通牒あり。

同　廿三日　事務長、慶松府警部補、巡査部長來所。

同　廿六日　府立醫大松永助敎授、事務長視察。

同　廿七日　今西醫員到着、丹羽醫員退所。

同　廿九日　神原醫員山田救護所へ打合のため出張。

五月一　日　本日より山田救護所へ交代出張することゝなる

同　五　日　事務長來所。

同　六　日　府立醫大河村博士來診。

同　十　日　事務長視察。

同　十二日　淺山院長診察。

同　十五日　字多小路醫員再來、神原醫員歸京。

同　十七日　府立醫大松永助敎授、府衞生課長、事務長等來所

同　十八日　西村博士到着。

同　十九日　今西醫員退所。

同　廿三日　事務長來所。

同　廿四日　來須醫員、宇多小路醫員と交代。

同　廿五日　德川副社長一行巡視。

同　廿八日　事務長引揚げ事務協議のため來所。

同　三十日　事務長、鈴木書記引揚げ準備のため來所。

同　卅一日　西村博士、看護婦全部峰山へ轉動、來須醫員歸京、糸井事務員解職、收容所廢止。

二　峰山收容所

本所は當時天幕病院と稱し峰山町字吉原六一ノ一、六一ノ一峰山尋常高等小學校燒跡、及警察署燒跡の一部に別圖の如く方錐形天幕十六個及診察所用として倉庫形天幕一個を張り患者を收容せる府立醫科大學經營のものを三月十九日移管したるものなり、宮津と同じく準備の整ふ迄は現狀の儘治療を續行したり、三月二十一日後藤書記は炊事器具、糧食應急救護材料を携へ配屬して事務を執り翌二十二日看護婦長以下十九名到着二十三日囑託醫員、調劑員一齊着任し茲に於て全部の引繼を了したり。然れども醫療器械の如きは本部に於て調辨しつゝありしが尙數日を要するを以て當分襲用し大に便宜を得たり又一面に在りては傳染病發生若は入院者の增加を慮り道路を隔て建設されたる府の急造バラック使用を交涉承諾を得て使用し得ることゝなしたり、然るに此の天幕生活は頗る狹隘不便なるのみならず尙春寒料峭の時季殊に風雨の際の如き漏水甚しく到底永く繼續使用に堪へ難きを以て山虎組に命じ其筋向ひに當る同町字吉原七一番地舊公會堂數地に別圖の如く三棟より成る「バラック」病院、建坪二百七十八坪のものを急遽建築したり、本工事は最も至急を要せしを以て督勵に加ふるに督勵を以てし四月十日竣工の期限を晝夜兼行して五日間短縮せしめ四月五日成工せしめたり。

翌六日直に移轉し一層診療に注意せしが當該地方被害甚大なると交通機關の中樞に當れるとを以て一時近鄕は勿論遂には遠く熊野郡より患者蝟集したる狀況なりき然れども震災患者は漸次減少したると一方には罹災の開業醫復興の計畫成りたるを以て町役場を經て是等の醫師に殘餘せる衞生材料を交付し貧困患者に施療するの契約をなさしめ六月十五日を以て閉鎖したり、殘留患者一名は翌十六日峰山驛より特別貸切車に搭乘せしめ府立醫科大學附屬醫院に委托せしが此の間收容の入院患者實入員百二十七名、治療日數二千九百八十六日、外來患者實入員三千三百十八名治療日數二萬六千四百六十八日なりとす。

閉鎖後殘留品整理及運搬を終り十八日壹萬參千餘圓の工費を以て建設したる本收容所は峰山町役場に殘存せる內容品全部と共に引繼を了し宮津へ引揚げたり。（天幕病院配置及バラック病院別圖の如し）

日別取扱患者及職員其他員數表

月	日	患者收容	患者來	調劑器具	事務員	婦長	看護婦	其他	摘要
三	十	四	二	二	二	一	一	一	
三	十一	四	二	二	二	一	一	一	
三	十二	四	二	二	二	一	一	一	
三	十三	四	二	二	二	一	一	一	
三	十四	四	二	二	二	一	一	一	
三	十五	四	二	二	二	一	一	一	
三	十六	四	二	二	二	一	一	一	
三	十七	四	二	二	二	一	一	一	
三	十八	四	二	二	二	一	一	一	
三	十九	四	二	二	二	一	一	一	
三	二十	四	二	二	二	一	一	一	
三	二十一	四	二	二	二	一	一	一	
三	二十二	四	二	二	二	一	一	一	
三	二十三	四	二	二	二	一	一	一	
三	二十四	四	二	二	二	一	一	一	
三	二十五	四	二	二	二	一	一	一	
三	二十六	四	二	二	二	一	一	一	
三	二十七	四	二	二	二	一	一	一	
三	二十八	四	二	二	二	一	一	一	
三	二十九	四	二	二	二	一	一	一	
三	三十	四	二	二	二	一	一	一	
三	三十一	四	二	二	二	一	一	一	
四	一	四	二	二	二	一	一	一	
四	二	四	二	二	二	一	一	一	
四	三	四	二	二	二	一	一	一	
四	四	四	二	二	二	一	一	一	
四	五	四	二	二	二	一	一	一	
四	六	四	二	二	二	一	一	一	
四	七	四	二	二	二	一	一	一	
四	八	四	二	二	二	一	一	一	
四	九	四	二	二	二	一	一	一	
四	十	四	二	二	二	一	一	一	
四	十一	四	二	二	二	一	一	一	
四	十二	四	二	二	二	一	一	一	
四	十三	四	二	二	二	一	一	一	
四	十四	四	二	二	二	一	一	一	
四	十五	四	二	二	二	一	一	一	
四	十六	四	二	二	二	一	一	一	
四	十七	四	二	二	二	一	一	一	
四	十八	四	二	二	二	一	一	一	
四	十九	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十一	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十二	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十三	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十四	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十五	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十六	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十七	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十八	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十九	四	二	二	二	一	一	一	
四	三十	四	二	二	二	一	一	一	
四	三十一	四	二	二	二	一	一	一	

（○印ハ府立醫大時代ヨリ引續キ滯在シタル數ナリ）

入院患者ハ後ニ表ニ一括シテ掲ゲタリ

看護婦ハ婦長ヲ含ム

五人ハ、六人ノ内ニ一人ハ婦長ナリ

月	日	患者收容	患者來	調劑器具	事務員	婦長	看護婦	其他	摘要
四	一	四	二	二	二	一	一	一	
四	二	四	二	二	二	一	一	一	
四	三	四	二	二	二	一	一	一	
四	四	四	二	二	二	一	一	一	
四	五	四	二	二	二	一	一	一	
四	六	四	二	二	二	一	一	一	
四	七	四	二	二	二	一	一	一	
四	八	四	二	二	二	一	一	一	
四	九	四	二	二	二	一	一	一	
四	十	四	二	二	二	一	一	一	
四	十一	四	二	二	二	一	一	一	
四	十二	四	二	二	二	一	一	一	
四	十三	四	二	二	二	一	一	一	
四	十四	四	二	二	二	一	一	一	
四	十五	四	二	二	二	一	一	一	
四	十六	四	二	二	二	一	一	一	
四	十七	四	二	二	二	一	一	一	
四	十八	四	二	二	二	一	一	一	
四	十九	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十一	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十二	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十三	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十四	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十五	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十六	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十七	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十八	四	二	二	二	一	一	一	
四	二十九	四	二	二	二	一	一	一	
四	三十	四	二	二	二	一	一	一	
五	一	四	二	二	二	一	一	一	
五	二	四	二	二	二	一	一	一	
五	三	四	二	二	二	一	一	一	
五	四	四	二	二	二	一	一	一	
五	五	四	二	二	二	一	一	一	
五	六	四	二	二	二	一	一	一	
五	七	四	二	二	二	一	一	一	
五	八	四	二	二	二	一	一	一	
五	九	四	二	二	二	一	一	一	
五	十	四	二	二	二	一	一	一	
五	十一	四	二	二	二	一	一	一	
五	十二	四	二	二	二	一	一	一	
五	十三	四	二	二	二	一	一	一	
五	十四	四	二	二	二	一	一	一	
五	十五	四	二	二	二	一	一	一	
五	十六	四	二	二	二	一	一	一	
五	十七	四	二	二	二	一	一	一	
五	十八	四	二	二	二	一	一	一	
五	十九	四	二	二	二	一	一	一	
五	二十	四	二	二	二	一	一	一	
五	二十一	四	二	二	二	一	一	一	
五	二十二	四	二	二	二	一	一	一	
五	二十三	四	二	二	二	一	一	一	
五	二十四	四	二	二	二	一	一	一	
五	二十五	四	二	二	二	一	一	一	
五	二十六	四	二	二	二	一	一	一	
五	二十七	四	二	二	二	一	一	一	
五	二十八	四	二	二	二	一	一	一	
五	二十九	四	二	二	二	一	一	一	
五	三十	四	二	二	二	一	一	一	
五	三十一	四	二	二	二	一	一	一	

月日	收容患者	外來患者	醫長醫員調劑員	事務員	婦長看護婦	其ノ他
四月二十七日	四六	一九六	五	二	一	三 五
二十八日	四六	一九三	五	二	一	三 五
二十九日	四五	二〇六	五	二	一	三 五
三十日	四七	二〇三	五	二	一	三 五
五月一日	四六	一九三	五	二	一	三 五
二日	四六	一九三	五	二	一	三 五
三日	四五	一九九	五	二	一	三 五
四日	四五	二〇五	五	二	一	三 五
五日	四四	二〇六	五	二	一	三 五
六日	四五	二〇八	五	二	一	三 五
七日	四五	一九六	五	二	一	三 五
八日	四五	二〇六	五	二	一	三 五
九日	四四	二〇五	五	二	一	三 五
十日	四五	二〇八	五	二	一	三 五
十一日	四五	二〇五	五	二	一	三 五
十二日	四五	二〇七	五	二	一	三 五
十三日	四五	二〇六	五	二	一	三 五
十四日	四五	二〇九	五	二	一	三 五
十五日	四五	二〇五	五	二	一	三 五
十六日	四五	二〇五	五	二	一	三 五
十七日	四五	二〇四	五	二	一	三 五
十八日	四五	二〇八	五	二	一	三 五
十九日	四五	二〇六	五	二	一	三 五
二十日	四五	二〇七	五	二	一	三 五
二十一日	四五	一九五	五	二	一	三 五
二十二日	四五	二〇〇	五	二	一	三 五
二十三日	四五	二〇五	五	二	一	三 五
二十四日	四五	二〇九	五	二	一	三 五
二十五日	四五	二〇九	五	二	一	三 五
二十六日	四五	二〇三	五	二	一	三 五
二十七日	四五	二〇〇	五	二	一	三 五
二十八日	四五	二〇五	五	二	一	三 五
二十九日	四五	二〇五	五	二	一	三 五
三十日	四五	二〇九	五	二	一	三 五
三十一日	四五	二〇五	五	二	一	三 五
六月一日	四五	二〇九	五	二	一	三 五
二日	四五	二〇三	五	二	一	三 五
三日	四五	二〇〇	五	二	一	三 五
四日	四五	一九九	五	二	一	三 五
五日	四五	一九七	五	二	一	三 五
六日	四五	一九五	五	二	一	三 五
七日	四五	一九六	五	二	一	三 五
八日	四五	一九九	五	二	一	三 五
九日	四四	一九五	四	二	一	三 四
十日	四四	一九七	四	二	一	三 四
十一日	四四	一九九	四	二	一	三 四
十二日	四四	二〇〇	四	二	一	三 四
十三日	四四	二〇五	四	二	一	三 四
十四日	四四	二〇五	四	二	一	三 四
十五日	四四	一九七	四	二	一	三 四

（キ）宿泊ノ大阪ヨリ入ミ（大阪）大阪婦一休婦一退

婦四丹波

婦一退、大阪婦一休、愛知婦一入

大阪婦一休愛知婦一入

愛知二退大阪婦一退

吉原ヨリ三入婦六入、六退

婦長一退婦七入十二退婦四入六退

婦長一入

以上の外峰山町の依頼に依り、三月二十九日より發生せる左記傳染病患者の治療を援助したり。

病名	實員數	治療日數
ヂフテリア	二	二四
赤痢	二	二四
腸チブス	一	三九
猩紅熱	一	一〇
計	六	九七

（日誌抜萃）

三月二十一日　後藤書記到着せるも打合の上一先づ本部へ歸る。

同　二十二日　後藤書記歸着、婦長以下十九名配屬、醫大看護婦と交代分擔を定む。

治療時間は午前八時より午後六時迄とす。

慰問者　滋賀縣内務部長田中無事生、（キャラメル三千贈與）。

同　二十三日　事務引繼のため現品調査。

醫長、醫員、調劑員到着。

診療時間　外來　自午前八時至正午　入院午後

同　二十四日　府防疫監吏池永光雄物品引繼終了宮津へ復歸

雨漏及入院希望者多く幕舍狹隘となるを豫期し、眞向ひに建設の府バラック使用を交涉、承認を得。

同　二十五日　藤田事務長視察、藤森醫員宿泊。

府立醫大松永助教授、藤田事務長視察。

慰問者　大連市浪速通九〇福田福三郎（封筒切手患者一名に三枚つゝ贈與）。

大阪支部主事永尾吉三郎。

三月二十七日　浴槽五個到着入浴を開始す。

同　二十八日　訪問者　島田愛知支部書記、戸部石川支部技手。

同　二十九日　石川縣衞生課長北條光九、富山赤十字救護班長訪問。

同　三十日　救世軍より患者及職員へ「せんざい」寄贈。

同　三十一日　事務長の命に依り後藤書記周枳、河邊救護所設定及打合のため出張。

午後醫長右診療のため出張、（看護婦は本部より配屬す）。

慰問者　救世軍隣保部主任北村雅弘、同關西聯隊長石島龜次郎、（メリヤス襯衣、ネル襦袢寄與）

府事務官岡本正一來所。

四月一　日　入院患者の取扱、材料補給上打合のため廣岡梧平（靜岡）及富山支部書記來る。

河邊救護所へ診療のため杉原、河内醫員出張。

同　二　日　町田農林大臣一行視察。

靜岡支部救護班員見學のため來る。

上野百藏（厨夫）傳令使丁北村太八到着、丹波、河邊の日報其他の傳令開始。

同　三　日　阪本副社長一行視察、太田醫員杉原醫員の交代として到着。

同　四　日　バラック病院外部の構造を終り各員協議の上内部の設計を變更せしむ。

淺山院長、加藤衞生課長、事務長視察。

杉原醫員歸京。

同　五　日　救世軍よりアルミ製鍋四十個寄贈、患者に給與す。

慰問　篤志愛國婦人會職員小林道子、及大阪佛教靖國會幹事（大阪阿部野町源正寺内）、盛町文彬患者一人に五十錢贈與（四十五人）。

正木醫長の代員古玉博士到着。

四月六　日　バラック病院大體竣工に付移轉す、炊事場はコンクリ乾燥の後移轉、藤田事務長、長坂技手八夫十名來援、停電頻繁作業困難、大阪支部病院小畑看護婦監督慰問のため來所、患者には一人壹圓宛、職員には菓子靴下等を寄與す（一泊）。

同　七　日　所内不備の點あり山虎組に交渉大工二名無償使役。

府立醫大河村博士、事務長視察、小畑監督退所。

貴族院議員一行視察。

同　八　日　炊事場移轉、山虎組に命じたる水槽ゴム管取付け終り放水完備。

同　九　日　在來の天幕は峰山小學校より借用申込あり十六張貸與、屋形天幕一張は府の出張所へ返附す。

ヂフテリー患者輕快に付隔離所より移轉し、使用の病舍は警官立會消毒を行ふ。

四月十　日　長坂技手打合のため來所。

訪問　島根縣知事森岡二朗隨員二名、京都市柴田寅三郎。

同　十　一　日　屎尿汲取に從事する農家は復興作業のため休業に付町役場と交涉す。

加藤繁三（醫員）河内醫員と交代のため到着。

同　十　二　日　事務長來所記念撮影、木村衞生課警部視察慰問、河内醫員歸京。

同　十　三　日　峰山警察署長視察、消火器九箇到着各所に配備。

同　十　四　日　峰山町長及助役來所協議の上視察、慰問、大須賀鎭雄（醫員）加藤醫員と交代のため到着。

淺山院長、事務長來所、總裁殿下御言葉傳達。

同　十　五　日　川崎事務員打合のため宮津へ出張。

淺山院長、事務長來所、加藤醫員退所、古玉醫長後藤書記と共に峰山着、町役場、京都府出張所等へ挨拶及打合のため訪問、關本和歌山支部書記看護婦三名引率來所（一泊）。

四月十　六　日　和歌山支部派遣看護婦三名關本書記と共に歸還。

長命西陣署警部補衞生係として峰山勤務となり打合のため來所。

中川直矢（醫員）太田醫員と交代のため到着、菅沼府事務官佐藤府囑託視察。

同　十　七　日　太田醫員歸京、傳染病室に關する件打合のため古玉醫長、後藤書記町役場へ出張。

同　十　八　日　舞鶴理髮業組合員男十一名、女十二名奉仕理髮を行ふ、患者上羽ひの疑似赤痢と決定、當局と協議の上觀察室に收容、大阪支部より交代の岡田婦長以下四名到着

同　十　九　日　後藤書記宮津へ出張、大阪支部派遣、高藤婦長以下復歸、傳染病患者を引渡す、（女學校跡バラックニ收容）。

同　二　十　日　事務長來所。

四月二十一　日　府立醫大鈴木博士、診療のため來所（鈴木本部書記隨行）、觀察室收容中の中西かめチブスに決定送院す

同　二十二　日　事務長來所、患者取扱に關する注意あり。

同　二十三　日　山田調劑員交代として增田寅太郎着。

同　二十四　日　山田調劑員歸京。

同　二十五　日　藤田醫員、山尾醫員の交代として到着、和歌山支部派遣石井看護婦父病氣に付歸還。

同　二十六　日　府立醫大松永助教授、事務長と共に診療のため來所。山尾醫員歸京、大阪支部より看護婦三名交代のため到着。

同　二十七　日　大阪支部派遣看護婦三名（堀、吉田、大原）交代歸還す、丹波救護所附看護婦四名本日より宿泊、大阪支部松原ハサヨ家族病氣に付歸省。

同　二十八　日　齋藤醫員、廣戸醫員交代のため到着、鳴大阪支部看護婦願に依り歸阪、岡山市門田屋敷一九五、オールヅ夫人より蓄音機レコード八枚寄贈。

四月二十九　日　中川、大須賀兩醫員歸京、愛知支部看護婦永井とら子盲腸炎に罹り吉原村より入院に付其儘配屬とす。

同　三　十　日　小藪看護婦產婆生入學に付歸京せしむ、松原ハサヨ（看護婦）大阪より歸り勤務す。

五月一　日　峰山町赤痢患者發生に付、依頼に依り同一バラック居住者十五名に對し健康診斷を行ふ、愛知支部看護婦伊藤このは永井とら子入院中勤務のことゝなり到着。垂水醫員交代の爲來着。

同　二　日　齋藤醫員歸京。

同　三　日　丹後北丹教會（キリスト）備前長治慰問、「タオル」石鹼、塵紙等寄贈。

同　六　日　府立醫大河村博士診療の爲め來所。

同　七　日　杉山知事（支部長）一行視察、慰問、事務長先着。

同　九　日　愛知支部看護婦二名歸還せしむ。

五月十　日　後藤書記宮津へ出張、井田大阪支部看護婦夫病氣の爲め歸省。

同　十　一　日　午後八時過峰山町字室町道路上に患者行倒れある旨急報あり直に收容す。

同　十　二　日　淺山院長來診、事務長同行。

同　十　三　日　收容朝鮮婦人人工流產施術のため岩崎網野附醫員の出張を受け代員を派遣す。

同　十　五　日　丹波、吉原救護所閉鎖に付取纏めの爲め後藤書記出張。吉原附看護婦三名は峰山配屬となる。只木醫員來着廣戸醫員と交代せり。田村和歌山支部書記看護婦迎ひの爲め來着宿泊す。

同　十　六　日　和歌山支部派遣看護婦五名田村書記と共に歸

還す、本社病院派遣看護婦六名島津より轉屬、(三井事務員引率)、加藤衞生課長巡視。

同　十七日　山尾醫員來着、藤田醫員と交代。

同　十八日　府立醫大松永助敎授來診、事務長同行。

同　二十日　府立醫大鈴木博士來診、事務長同行。午前中水道斷水事業に支障を來す(交涉せるに餘裕なき時は給水せざるなりとの回答ありたり)。

同　二十一日　吉富調劑員到着、本日亦午前中斷水。

同　二十二日　增田前調劑員歸京。

同　二十三日　後藤書記吉原村へ出張、事務長來所(病舍一部を復興課に貸與する件打合せ)。

同　二十五日　府屬田中勳道、岡部兼弘病室借用打合せのため來る。

同　二十六日　德川副社長一行視察慰問、柿沼副參事一行經理事務視察。

同　二十八日　事務長來所。

同　二十九日　今井看護婦長支部より派遣到着。

同　三十日　後藤書記宮津へ出張。

同　三十一日　各收容所整理に依り岩瀧より五名網野より二名の看護婦到着、本社病院派遣六名、大阪支部派遣五名、滋賀支部所管(京都支部召集)一名計十二名の看護婦宮津本部へ引揚ぐ。西村博士(岩瀧)古玉博士と交代し代田醫員(京都)只木醫員と交代す。府立醫大松永助敎授、中道幹事、事務長視察。兵庫支部より友澤書記來所宮津へ向ふ。

六月一日　兵庫支部派遣看護婦六名島津より轉屬、(三井事務員引率)、加藤衞生課長巡視。縮緬業組合長津原武、收容所バラック讓受の件に付來所。臺灣總督府醫務囑托指宿七二視察。市場、宮津附看護婦四名到着。

同　三日　峰山小學校へ貸與の天幕十四張返納す。

同　四日　後藤書記宮津へ出張。

同　六日　猩紅熱患者發生(堀フミ子)屆出を爲す。後藤書記京都へ出張。

同　七日　峰山町助役より傳染病患者の往診依賴あり收容所閉鎖迄承諾す。事務長來所。救世軍人(男一、女五)慰問、患者、同附添其他全員に饅頭一包宛贈與せり。

同　九日　淺山院長、事務長來所、後藤書記歸所。

同　十四日　事務長收容所閉鎖事務打合せの爲め來所。

同　十五日　午前中診療、午後荷造り、長坂技手旅費支給のため來所。

同　十六日　患者松井キヌ、午前七時十三分峰山驛發京都へ轉送、代田垂水兩醫員及看護婦六名同乘歸還す。西村博士、山尾醫員、吉富調劑員、事務員二名及今井婦長、松任松村、田守各看護婦は殘務整理の爲め殘留、其他の六名は宮津へ引揚ぐ。

六月十七日　府衞生課より借用せる物品は悉く豐永技手に返還し其他の物品の大體は本部へ輸送す。

六月十八日　「バラック」を町當局に引渡しを了し殘員全部宮津へ引揚ぐ。

木網野收容所

本所は竹野郡網野町字網野小字作り道三七三、三七四三七五番地にある元竹野郡役所を使用せり敷地總坪數八百四十五坪を有するが故に空地には天幕を連ねて官公署其他の救護機關割在したり其の當時の配備別圖の如し。

災害突發の直後より第十六師團衞生隊及本府の救護班ありて罹災患者を收療經營せるものを引繼ぎたるが素より同地は被害も甚しく該建物は岩瀧收容所の如く完全ならずして破損の個所少からず危險の慮ありたるを以て建築技師の調査を乞ひ其の無難なりとの保障を得て患者を安居せしめたり卽ち階上を病室、醫員室、看護婦室、階下を診療室、手術室に使用す。

三月二十日小林本社囑託視察出張と同時に中郡長善村に滯在の關醫員と前夜宮津へ到着したる油谷醫員をして先づ醫務の引繼を受けしめ數時の後ち看護婦長以下九名救護材料と共に到着したるに依り直に診療の準備を爲したり、然れども救護員尙不足に付更に翌二十一日隣村濱詰村に駐屯救護に從事せし第五班員を配屬せり。

開所當時收容患者は三十二名なりしが增加することなく外來患者は一時百三十四名に達したるも日時の經過に伴ひ治癒輕快し四月上旬頃より漸次減少せるを以て鄕村及磯の兩救護所を兼攝す爾來第一期、第二期、第三期と逐次整理を行ひ磯の救護を廢し六月一日より更に島津を併せ診療を行ひ六月十五日閉鎖せり、殘留患者一名は醫長、看護婦を同乘せしめ網野驛より京都へ轉送し十七日殘員は物品を整理し宮津へ輸送したる後引揚げたり。本所にて取扱ひたる患者は入院實入員七十三名、治療日數七千六百六十三日、外來實入員千四百三十名治療日數七千百七十一日なり。

職員表

到著月日	轉出月日	職	氏名	摘要
三月二十日	三月廿三日	醫員	關郁郎	長善ヨリ
同	三月廿四日	同	油谷安次郎	長善ヘ
三月廿三日	六月十六日	醫長	島寬一	
同	五月卅一日	醫員	久石菊太郎	
同	六月十六日(岩崎)	同	河野俊備	五月二日岩崎勳ト交代
四月二日	四月廿八日	同	中元慶太郎	
三月廿三日	四月三十日(吉富)	調劑員	安藤常三郎	四月二十三日吉富浩太ト交代
同　廿一日	四月廿七日	事務員	奥田爲太郎	支部書記
三月廿五日	六月十七日	同	三宅豐治郎	
四月廿六日	同	同	三井三一郎	支部職員(市場ヨリ)
三月二十日	同	看護婦長	佐々木キヨウ	外勤部(宮津ヘ)
同	同	看護婦	田中延	同(同ヘ)
同	同	同	岩井崇	同(同ヘ)
同	同	同	金子靜	同(同ヘ)
同	同	同	西村石枝	同(同ヘ)
同	五月卅一日	同	北川恵津	同(峰山ヘ)
同	同	同	貞松あきゑ	同(同ヘ)
同	五月一日	同	伊藤時子	同(宮津ヘ)

到著月日	轉出月日	職	氏名	摘要
同	五月卅一日	同	寺本 イネ	同（宮津へ）
三月廿一日	四月廿六日	同	吉原 シカ	更正五班ヨリ轉入
同	四月廿三日	同	酒井 高子	召集（歸省）
同	五月一日	同	石川 キヨ	外勤部（口大野へ轉）
同	同	同	助澤ふさ子	同（同　）
同	同	同	大橋まつ子	同（同　）
四月六日	四月十七日	同	深谷シマ子	愛知支部（郷勤務）鳥取へ轉出
同	同	同	左合ミサ子	同　同
同	同	同	伊藤 コノ	同　同

日別取扱患者及職員其他員數表

月日	收容患者	外來患者	醫長 醫員 調劑員	事務員	婦長	看護婦	其他	摘要
三月二十一日	三二	七〇	二	一	一	三	五	
二十二日	三三	一〇〇	二	一	一	三	六	人夫一入
二十三日	二九	八六	四	一	一	二	六	酒井退 醫員二退四入
二十四日	三〇	一〇六	四	一	一	二	六	
二十五日	二九	一〇九	四	二	一	二	六	三宅入
二十六日	三〇	一〇二	四	二	一	二	六	
二十七日	三一	九九	四	二	一	二	五	今井退
二十八日	三三	一一一	四	二	一	二	五	
二十九日	三一	一一六	四	二	一	二	六	今井入
三十日	三二	一〇三	四	二	一	二	六	
三十一日	三三	一三四	四	二	一	二	六	
四月一日	三二	一〇三	四	二	一	二	六	
二日	三〇	一〇二	五	五	二	二	六	醫一入
三日	三一	一一一	五	二	一	二	六	
四月四日	三一	一〇二	五	二	一	二	六	
五日	二九	七六	五	二	一	二	六	
六日	二九	一〇一	五	二	一	二	六	
七日	二六	八五	五	二	一	二	六	
八日	二八	九五	五	二	一	二	六	
九日	二五	八〇	五	二	一	二	六	
十日	二四	八五	五	二	一	二	六	
十一日	二三	六八	五	二	一	二	六	
十二日	二三	八五	五	二	一	二	六	
十三日	二三	六〇	五	二	一	二	六	
十四日	二三	七八	五	二	一	二	六	
十五日	二三	五四	五	二	一	二	六	
十六日	二〇	六八	五	二	一	二	六	
十七日	一九	六五	五	二	一	二	六	
十八日	二〇	七〇	五	二	一	二	六	
十九日	一八	五六	五	二	一	二	六	
二十日	二〇	七六	五	二	一	二	六	
二十一日	二〇	四九	五	二	一	二	六	
二十二日	二一	八五	五	二	一	二	六	
二十三日	二三	五二	五	二	一	二	六	
二十四日	一九	八四	五	二	一	二	六	
二十五日	二〇	五七	五	三	一	二	六	三井一入
二十六日	二三	九〇	五	三	一	二	六	
二十七日	二三	六七	五	二	一	二	六	書記一退
二十八日	二〇	七五	五	二	一	二	六	
二十九日	二一	六五	五	二	一	二	六	
三十日	一九	六六	五	二	一	二	六	
五月一日	一八	七〇	三	二	一	七	五	醫調各一退 婦四退
五月二日	八	六二	三	二	一	七	五	
三日	一六	八〇	三	二	一	七	五	
四日	一八	七〇	三	二	一	七	五	
五日	一八	七一	三	二	一	七	五	
六日	一八	九二	三	二	一	七	五	
七日	一九	五八	三	二	一	七	五	
八日	一九	八六	三	二	一	七	五	
九日	一九	七二	三	二	一	七	五	
十日	一八	七七	三	二	一	七	五	
十一日	一八	七七	三	二	一	七	四	其他一退
十二日	一八	九二	三	二	一	七	四	
十三日	一八	六九	三	二	一	七	四	
十四日	一九	七八	三	二	一	七	四	
十五日	一八	六八	三	二	一	七	四	
十六日	一七	八八	三	二	一	七	四	
十七日	一八	六八	三	二	一	七	四	
十八日	一八	八五	三	二	一	七	四	
十九日	一五	七二	三	二	一	七	四	
二十日	一三	八三	三	二	一	七	四	
二十一日	一三	八〇	三	二	一	七	四	
二十二日	一三	八五	三	二	一	七	四	
二十三日	一三	七四	三	二	一	七	四	
二十四日	一三	八四	三	二	一	七	四	
二十五日	一三	九七	三	二	一	七	四	
二十六日	一三	七三	三	二	一	七	四	
二十七日	一三	九〇	三	二	一	七	四	
二十八日	一一	七四	三	一	一	七	四	
二十九日	一〇	七七	三	二	一	七	四	
五月三十日	一〇	八九	三	二	一	七	四	
三十一日	一〇	七四	三	二	一	七	四	
六月一日	一〇	九二	二	二	一	六	二	婦一退、賄二退
二日	一〇	七二	二	二	一	六	二	
三日	七	七九	二	二	一	六	二	
四日	七	五四	二	二	一	六	二	
五日	七	八六	二	二	一	六	二	
六日	七	八三	二	二	一	六	二	
七日	七	七五	二	二	一	六	二	
八日	七	七〇	二	二	一	六	二	
九日	七	七七	二	二	一	六	二	
十日	七	六〇	二	二	一	六	二	
十一日	七	八八	二	二	一	六	二	
十二日	七	七二	二	二	一	六	二	
十三日	七	九七	二	二	一	六	二	
十四日	一	七〇	二	二	一	六	二	
十五日	一	八〇	二	二	一	六	二	

（日誌摘錄）

三月二十一日　第十六師團衛生隊より引繼を受く、久保園醫員、吉田人夫宿泊。

同　二十二日　今井竹次郎來る、（人夫）。

同　二十三日　篤志看護婦人會及愛國婦人會京都支部長、愛國主事、山本支部書記・田中滋賀縣內務部長慰問、關醫員退所。

同　二十四日　油谷醫員退所、大阪基督青年會福田愼一慰問。

大阪支部救護班員來所。
同　二十五日　事務長視察、三宅事務員到着。
同　二十六日　島津救護所附醫員、看護婦、水島書記と共に及磯配屬看護婦二名來所直に赴任。
同　二十七日　淺山院長、事務長と共に視察。
同　二十八日　訪問及慰問者、大阪キリスト教青年會中根峰吉　愛知支部島田宗吉、在鄉軍人會大津市分會、峰山正木醫長　三月二十九日　赤痢患者發生、病室廊下便所の消毒及全員檢便を行ふ。岡山支部救護班員來所、京都救世軍支部長荒川源太郎、京都市中島信榮慰問。
同　三十日　慰問者　少年保護婦人協會大阪支部理事新田倭文子、大阪女子師範教諭西脇りか、横濱市吉田小學校長宮川仁三、老松小學校長大山政和。
同　三十一日　事務長來院。
四月一日　奥田書記宮津へ出張。
同　二日　農林大臣一行巡視、中本醫員到着、磯救護班引揚げに付本所より兼務となる。
同　三日　阪本副社長一行巡視。
同　四日　府第二救護班より藥品消耗品殘品引繼を受く。
同　五日　京都佛教靖國會慰問、愛知支部救護班鄉村引揚に付引繼を受くるため久石醫員出張。
同　六日　本日より鄉救護所を引受く、愛知支部救護班より移管の看護婦本日より宿泊。
同　七日　島津救護所交代員六名鈴木書記と共に來所直に出發。府立醫大河村博士、事務長來所。貴族院議員一行及小畑看護婦監督慰問、小畑氏より患者に金壹圓づゝ看護婦に靴下及菓子寄與。
同　十日　長坂技手來所。
同　十一日　鄉村に赤痢一名發生隔離病舍へ移す。
同　十二日　事務長視察。
同　十五日　淺山院長、事務長來所　總裁殿下御言葉傳達。
同　十七日　峰山收容所員來所。愛知支部所管看護婦鳥取へ轉勤。
同　十八日　鈴木書記來所。奥田書記宮津へ出張。
同　十九日　本日より鳥取、島津へ本部よりの配給を傳送の事となり自轉車を增備す。
同　二十日　事務長視察。
同　二十二日　府立醫大鈴木博士、事務長來所。
同　二十三日　武長本部事務員來所奥田書記と共に島津、鳥取、木津救護所へ出張。吉富調査員交代のため到着。峰山收容所員來所。
同　二十四日　安藤調劑員歸京。
同　二十六日　吉原看護婦母病氣のため歸鄉。三井事務員到着。
同　二十七日　府立醫大松永助教授、事務長來所。
同　二十八日　中本醫員歸京。事務長より調査員引揚げの傳達ありたり。
同　二十九日　本部より看護婦四名引揚げの通告ありたり。

同　三十日　長坂技手來所。
五月一日　調劑員一名、看護婦四名退所。
同　二日　岩崎醫員交代のため來所、河野醫員と交代。
同　六日　三井事務員宮津へ出張。
同　七日　杉山知事一行視察慰問。事務長は島津交代醫員と共に來所。
同　十日　松村人夫退所。
同　十二日　三井事務員宮津へ出張。淺山院長事務長同行視察。
同　十三日　岩崎醫員峰山收容所へ治療のため出張、代員として廣戸醫員來所執務。
同　十五日　鈴木書記島津交代看護婦三名を伴ひ來所。
同　十八日　府立醫大松永助教授、事務長視察。
同　二十日　府立醫大鈴木博士、事務長視察。
同　二十一日　鈴木書記來所、磯へ往診本日限りとす。
同　二十三日　事務長視察。
同　二十六日　德川副社長一行視察慰問。柿沼副參事一行來所、經理事務視察。
同　二十八日　事務長來所、看護婦異動の內命あり。
同　三十一日　府立醫大松永助教授、事務長來所。島津救護所材料引繼の爲め武永本部事務員來所、三井事務員と共に出向。
六月一日　人夫一名交代、本日限り炊事を廢し受負はしむることゝなり炊事婦を解雇す。
同　五日　鈴木書記來所。
同　六日　三井事務員宮津へ出張。
同　七日　事務長來所。
同　九日　淺山院長、事務長來所視察。
同　十日　三井事務員宮津へ出張。
同　十二日　島津より引揚げたる材料本部へ返付
同　十四日　事務長、鈴木書記引揚手配のため來所、鄉救護所材料を引揚げ保管。
同　十五日　引揚げ準備、長坂技手患者輸送其他の件に付來所。
同　十六日　殘留患者一名午前六時四十六分網野發京都へ輸送。府衞生課より借用せる寢臺五十ケ、毛布擔架其他の物品を返還す。本部差廻しの自動車にて備品材料の一部返還す。
同　十七日　殘遺物品全部を運搬し了つて各員宮津へ引揚ぐ。

第四章　京都支部施設救護機關の狀況

一、市場救護所

本村の人家は殆んど燒失したるを以て天幕を張り開所せんとし其の準備を整へ書記と共に出張せしめ交涉の結果、村當局は同村字幾地千三百二十九番地市場村役場敷地內に急造されたる「バラック」の使用を提議されたるに依り其の一部を借り受け三月二十六日より開所し三月三十日より岩屋村の救護を兼攝す。

急造バラック平面圖

四月中旬同地内に救護所専用の「バラック」を建設して同月十七日移轉せり、四月三十日第一期整理に依り三重支部派遣の看護婦七名を歸還せしめ更に五名の看護婦を交代せしめ加悦、三河内、桑飼の救護所廢止と共に附近各村を擔當し。

五月十五日第二期整理として醫長一名、看護婦二名を減じ救護を續行せるが漸次罹災患者なきに至り五月三十一日閉所したり此間治療したる患者實人員五百八十六名治療日數三千六百六十八日にして關係せる救護員左の如し。

職員表

著任月日	轉出月日	職	氏名	摘要
三月廿六日	五月十五日	醫長	信太格二郎	交代員 岩田常憲、永原、中澤
同	五月廿一日（吉川）	醫員	阿原 道雄（龜太郎、吉川舜二	
三月廿九日	四月廿六日	事務員（支部雇）	三井三一郎	網野收容所へ
三月廿六日	五月一日	看護婦	小竹 マサ	三重支部派遣
同	同	同	成瀨 錦子	同
同	同	同	中川 しげ	同
同	同	同	中川 馨	同
同	同	同	花野 千代	同

日別取扱患者表（市場救護所）

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月二十七日	二〇	同二十八日	三二	同二十九日	三八
同三十日	三三	同三十一日	二九	同一日	二七
同二日	二五	同三日	二五	同四日	一五
同五日	三〇	同六日	二四	同七日	二八
同八日	二五	同九日	四五	同十日	四七
同十一日	六四	同十二日	六三	同十三日	五八
同十四日	三八	同十五日	三九	同十六日	四一
同十七日	三七	同十八日	四八	同十九日	六七
同二十日	七六	同二十一日	五八	同二十二日	三五
同二十三日	五七	同二十四日	三九	同二十五日	六一
同二十六日	四五	同二十七日	六三	同二十八日	四二
同二十九日	六〇	同三十日	三四	五月一日	四一
同二日	四二	同三日	七四	同四日	五四
同五日	五六	同六日	六六	同七日	九六
同八日	一〇一	同九日	六七	同十日	八〇
同十一日	八六	同十二日	六六	同十三日	八三
同十四日	四〇	同十五日	四六	同十六日	四七
同十七日	三五	同十八日	四二	同十九日	四八
同	同	同	增田 よき	同	同
同	同	同	馬淵 花子	同	同
五月一日	五月廿一日	同	松任 叶	木津ヨリ轉入、峰山へ轉出	
同	五月十五日	同	岡田 まつ	同	島津へ轉出
同	同	同	公原 米子	宮津ヨリ轉入、島津へ轉出	
同	同	同	中川 仲	山田ヨリ轉入、同	
同	五月廿一日	同	波多野清子	同	峰山へ轉出
五月十七日	同	同	田守 レイ	峰山ヨリ轉入峰山へ轉出	

五月二十日 四三 同二十一日 四三 同二十二日 六二
同二十三日 三五 同二十四日 四九 同二十五日 五一
同二十六日 四六 同二十七日 四二 同二十八日 三六
同二十九日 四〇 同三十日 三七

卜岩屋救護所

本所は初め第九班が根據を構へたる岩屋村役場（同村小字のがみ二百九十四番地の一）の一部を利用し職員は市場救護所より兼務のことゝなし同班より三月二十六日引繼を受け四月一日より治療を開始五月三十一日閉所したり治療したる患者實人員二百五名治療日數千六百七十九日なり、同村役場平面圖別紙の如し。

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
四月一日	二五	同二日	一四	同三日	二二
同四日	七	同五日	二四	同六日	一三
同七日	二六	同八日	〇	同九日	〇
同十日	〇	同十一日	一八	同十二日	〇
同十三日	一四	同十四日	〇	同十五日	一六
同十六日	〇	同十七日	〇	同十八日	二四
同十九日	〇	同二十日	三一	同二十一日	三一
同二十二日	三五	同二十三日	〇	同二十四日	三二
同二十五日	〇	同二十六日	三六	同二十七日	〇
同二十八日	三八	同二十九日	〇	同三十日	三四
五月一日	〇	同二日	〇	同三日	〇
同四日	〇	同五日	一七	同六日	〇
同七日	〇	同八日	〇	同九日	三九
同十日	〇	同十一日	〇	同十二日	二七
同十三日	〇	同十四日	〇	同十五日	〇
同十六日	〇	同十七日	〇	同十八日	〇
同十九日	〇	同二十日	〇	同廿一日	以下〇

チ山田救護所

本所は最初本村中央に天幕を張り三月二十八日開所せしが同村字上山田小字かりや二百三十三番地に木造バラック七坪餘を急造して四月十一日移轉したり。

四月三十日第一期整理の際醫員の囑託を解き岩瀧收容所より出張兼務せしめ同日石川救護所の廢止に伴ひ該村の患者を擔當し五月三十一日閉所したり。此間治療したる患者實人員四百四十八名治療日數二千百九十六日なり。

職員表

著任月日	轉出月日	職	氏名	摘要
三月廿八日	四月三十日	醫員	江口 重雄	與謝郡醫師會推薦、吉津村醫
三月廿七日	三月廿八日	看護婦	辻 たき	第九班ヨリ入リ加悦へ轉ス
同	三月廿一日	同	皆木智惠子	同 丹波へ轉ス
三月廿八日	同	同	小藪壽津子	同 丹波へ轉ス
三月廿一日	五月一日	同	中川 仲	宮津療院ヨリ出張、市場へ轉ス
同	同	同	波多野清子	同

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月二十八日	九	同二十九日	二六	同三十日	二八

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月三十一日	二七	四月一日	四三	同二日	二七
同三日	三四	同四日	一八	同五日	二六
同六日	一五	同七日	二九	同八日	二〇
同九日	二八	同十日	二五	同十一日	二三
同十二日	二三	同十三日	三〇	同十四日	三六
同十五日	一九	同十六日	三一	同十七日	三〇
同十八日	三一	同十九日	二九	同二十日	二一
同二十一日	一五	同二十二日	二三	同二十三日	二三
同二十四日	二五	同二十五日	二一	同二十六日	一八
同二十七日	二七	同二十八日	一五	同二十九日	二四
同三十日	一七	五月一日	二六	同二日	四〇
同三日	三七	同四日	二九	同五日	四〇
同六日	三六	同七日	三五	同八日	四三
同九日	二二	同十日	四七	同十一日	二九
同十二日	二八	同十三日	三二	同十四日	三〇
同十五日	二二	同十六日	二四	同十七日	二四
同十八日	二八	同十九日	三七	同二十日	三三
同二十一日	四五	同二十二日	○	同二十三日	三三
同二十四日	○	同二十五日	四四	同二十六日	○
同二十七日	三〇	同二十八日	○	同二十九日	二八

リ 石川救護所

本所は本村字表レ二千四百十三番地の高崖に建立されたる西禪寺（本堂には以前大阪支部救護班屯在したり）の隱居所を借用し三月二十七日開所し四月三十日閉所したり治療したる患者實人員二百二十名治療日數千五百十五日なり。

職員表

着任月日	轉出月日	職氏名	摘要
三月廿七日	四月三十日	醫員 稻田左膳	與謝郡醫師會推薦
同	同	看護婦 森田サカエ	第九班ヨリ入、宮津療院へ轉
同	同	同 齋藤ミスエ	同

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月二十九日	一五	同三十日	二一	同三十一日	二四
四月一日	二八	同二日	二九	同三日	三四
同四日	一七	同五日	一八	同六日	二八
同七日	二七	明八日	二六	同九日	二六
同十日	二〇	同十一日	一九	同十二日	一九
同十三日	二〇	同十四日	二五	同十五日	二六
同十六日	二三	同十七日	二三	同十八日	二九
同十九日	二五	同二十日	二二	同二十一日	二三
同二十二日	二七	同二十三日	二八	同二十四日	二九
同二十五日	二四	同二十六日	二四	同二十七日	一八
同二十八日	一七	同二十九日	九	同三十日	○

ル 加悅救護所

本所は同町字加悅奥小字駒田八番地外九筆に建設されたる加悅町外四ヶ村共同隔離病舍の本館を利用し三月二十七日開所せり當病舍は最近の建築に係り設備整頓し救護上不便を感せざりしも患者減少と地方開業醫營業せるを以て四月三十日

職員表

着任月日	轉出月日	職氏名	摘要
三月廿七日	四月三十日	醫員 鞭 求馬	與謝郡醫師會推薦、石川村醫
三月廿六日	三月廿九日	看護婦 重田 キミ	福井支部所管宮津ヨリ臨時派出
同	同	同 松村 カ子	第十班ヨリ編入、岩鐵軟寧所へ
三月三十日	五月一日	同 福田 靜江	同 歸還（產婆雜修生）

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月二十八日	二七	同二十九日	三二	同三十日	二八
同三十一日	三一	四月一日	二七	同二日	三四
同三日	三三	同四日	二二	同五日	三三
同六日	一一	同七日	二五	同八日	一九
同九日	二五	同十日	二六	同十一日	二六
同十二日	三一	同十三日	三七	同十四日	三七
同十五日	四一	同十六日	三七	同十七日	二七
同十八日	三九	同十九日	三七	同二十日	五七
同二十一日	三五	同二十二日	五一	同二十三日	四九
同二十四日	四八	同二十五日	四〇	同二十六日	五三
同二十七日	四五	同二十八日	五八	同二十九日	三二
同三十日	○				

ス 三河內救護所

本所は本村中央の高所にある妙見堂の庵室（字繩手千六百四番地）を借用し三月二十七日開所、四月三十日閉所したり治療したる患者實人員百八十九名、治療日數九百六十二日なり。

職員表

着任月日	轉出月日	職氏名	摘要
三月廿七日	四月三十日	醫員 伊藤 源一	與謝郡醫師會推薦、町醫
同	同	看護婦 辻 たき	第九班ヨリ入、宮津療院へ轉
同	同	同 川中 千代	同 大阪へ歸還（產婆雜修生）

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月二十九日	一一	同三十日	一六	同三十一日	一八
四月一日	一九	同二日	二七	同三日	二四
同四日	二九	同五日	二三	同六日	二六
同七日	二六	同八日	三七	同九日	三一
同十日	四三	同十一日	二七	同十二日	三八
同十三日	二八	同十四日	三〇	同十五日	二四
同十六日	三三	同十七日	二三	同十八日	三二
同十九日	二八	同二十日	二三	同二十一日	二〇
同二十二日	二三	同二十三日	二九	同二十四日	二五
同二十五日	二一	同二十六日	二五	同二十七日	一四
同二十八日	三三	同二十九日	二五	同三十日	○

チ 桑飼救護所

本所は桑飼村字明石小字堂岡二二〇ノ一番地上に建設の同村役場の一部を借受け使用し三月二十七日開所四月三十日閉所せり治療したる患者實人員二百三十二名治療日數千二百九十六日なり。

職員表

着任月日	轉出月日	職氏名	摘要
三月廿七日	四月三十日	醫員 稻田左膳	與謝郡醫師會推薦
同	同	看護婦 森田サカエ	第九班ヨリ入、宮津療院へ轉
同	同	同 齋藤ミスエ	同

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月二十九日	一一	同三十日	一六	同三十一日	一八
四月一日	一九	同二日	二七	同三日	二四
同四日	二九	同五日	二三	同六日	二六
同七日	二六	同八日	三七	同九日	三一
同十日	四三	同十一日	二七	同十二日	三八
同十三日	二八	同十四日	三〇	同十五日	二四
同十六日	三三	同十七日	二三	同十八日	三二
同十九日	二八	同二十日	二三	同二十一日	二〇
同二十二日	二三	同二十三日	二九	同二十四日	二五
同二十五日	二一	同二十六日	二五	同二十七日	一四
同二十八日	三三	同二十九日	二五	同三十日	○

十六日なり。

職員表

着任月日	轉出月日	職名	氏名	摘要
三月廿七日	四月三十日	醫員	市田登與	謝鄙醫師會推薦、村醫
同	三月三十日	看護婦	駒野みさを	福井支部所管、宮津療院ヨリ臨時派出
同	同	同	鈴木ゆき	同
三月三十日	五月一日	同	中川スナヲ	第一班ヨリ入、宮津療院へ轉
同	同	同	石田よし子	同

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月二十九日	二二	同三十日	一八	同三十一日	二三
四月一日	二四	同二日	二七	同三日	三六
同四日	二八	同五日	三二	同六日	三五
同七日	二五	同八日	二三	同九日	三四
同十日	三一	同十一日	四〇	同十二日	三八
同十三日	四四	同十四日	三九	同十五日	三八
同十六日	四一	同十七日	二八	同十八日	四四
同十九日	四七	同二十日	四八	同二十一日	三九
同二十二日	四二	同二十三日	五〇	同二十四日	四六
同二十五日	四三	同二十六日	五六	同二十七日	六一
同二十八日	二五	同二十九日	三八	同三十日	〇

ワ口大野救護所

本所は初め口大野村中央道路に面せる空地（大道筋六百十八番地）に天幕貳個を張り三月二十六日開所したるが市場、島津と同じく十一坪餘の「バラック」を新築して之に移り別に天幕一個を其儘應用して浴室となし更に府設の「バラック」を炊事場に使用せり、四月三十日醫長を廢し看護婦を減し、超へて五月三十一日閉所せり、治療したる患者實人員九百七十七名治療日數五千九十八日なり。

職員表

着任月日	轉出月日	職名	氏名	摘要
三月廿六日	四月三十日	醫長	中村喜代治	
同	五月廿一日	醫員	黒住勳	交代員
同	四月十八日	看護婦	曾根みつ	名集者、歸還
同	同	同	廣瀬むな	
同	四月二十日	同	佐々木シゲ	
同	四月十五日	同	足立智惠子	
同	四月十二日	同	水口コト	
同	同	同	別所君子	
同	同	同	竹本靜江	
同	四月二十日	同	花原ナカ	
同	四月十一日	四月三十日	同	安部遊龜子	島坂支部派遣、歸還
同	五月一日	同	同	濱本ハルコ	
同	同	同	同	西村ユキ	
同	四月十九日	同	同	植垣スミエ	
同	同	同	同	高橋久子	
同	同	同	同	瀧川勢美子	
同	五月一日	五月廿一日	同	石川キヨ	網野ヨリ轉入、歸還
同	同	同	同	大橋まつ子	同
同	同	同	同	助澤ふさ子	同

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月二十六日	三	同二十七日	一七	同二十八日	一八
同二十九日	二五	同三十日	四三	同三十一日	四五
四月一日	二八	同二日	四六	同三日	四六
同四日	五〇	同五日	四〇	同六日	二七
同七日	二〇	同八日	三五	同九日	二八
同十日	三六	同十一日	五〇	同十二日	四六
同十三日	四八	同十四日	四六	同十五日	三六
同十六日	四三	同十七日	四四	同十八日	四五
同十九日	五三	同二十日	三八	同二十一日	四二
同二十二日	三五	同二十三日	五五	同二十四日	三三
同二十五日	六〇	同二十六日	四〇	同二十七日	四九
同二十八日	五一	同二十九日	三九	同三十日	四三
五月一日	三四	同二日	四二	同三日	三三
同四日	三三	同五日	二七	同六日	三三
同七日	二五	同八日	四八	同九日	三二
同十日	四三	同十一日	三四	同十二日	三〇
同十三日	三五	同十四日	二一	同十五日	二六
同十六日	三三	同十七日	三七	同十八日	三一
同十九日	一五七	同二十日	一七九	同二十一日	九三
同二十二日	一九一	同二十三日	二〇九	同二十四日	二〇六
同二十五日	一九〇	同二十六日	二〇七	同二十七日	二〇八
同二十八日	二二一	同二十九日	一六八	同三十日	六〇

カ丹波救護所

本所は最初醫員一名看護婦三名を配置し本村字矢田長安寺本堂に於て三月三十一日開所せしが當時駐在せる石川支部二個救護班撤退せるに依り更に醫員一名看護婦二名を增派す。

四月四日字丹波小字櫻内九二九番地にある丹波村役場内に移轉せり、同月中旬頃より患者減少の傾向あり同十三日醫員一名、同十八日看護婦一名歸還、四月二十七日より醫員は自宅より、看護婦は峰山收容所に宿泊共に通所治療を繼續したるが、開業醫は營業を開始せるあり必要患者は峰山收容所へ來所せしむるを得ざるを以て五月十五日廢所せり此間治療したる患者實人員四百二十四名、治療日數二千八百九十一日なり。

職員表

着任月日	轉出月日	職名	氏名	摘要
三日廿一日	五月十五日	醫員	幸野國太郎	中郡醫師會推薦、峰山在住
同	五月十五日	看護婦	木村琴	滋賀支部所管、京都支部召集、歸還
同	同	同	皆木智惠子	
同	五月一日	同	小藪壽津子	山田ヨリ入、峰山へ
四月三日	四月十三日	醫員	小田榮	
同	五月十五日	看護婦	田守レイ	支部召集、峰山へ
同	四月十八日	同	梅本その	歸還

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月三十一日	二五	四月一日	五五	同二日	三〇
同三日	六二	同四日	一二	同五日	四三
同六日	一四	同七日	五二	同八日	四三
同九日	四七	同十日	三一	同十一日	三八

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
四月十二日	三〇	同十三日	三二	同十四日	三四
同十五日	二六	同十六日	二一	同十七日	三二
同十八日	二六	同十九日	二五	同二十日	三八
同二十一日	二五	同二十二日	三六	同二十二日	一八
同二十四日	二八	同二十五日	二九	同二十六日	三〇
同二十七日	二二	同二十八日	二七	同二十九日	二三
同三十日	一九	五月一日	二〇	同二日	一八
同三日	一九	同四日	二六	同五日	一四
同六日	二一	同七日	一一	同八日	一三
同九日	一六	同十日	一六	同十一日	一六
同十二日	二五	同十三日	二二	同十四日	二七
同十五日	一四				

ヨ 吉原救護所

本村には愛知支部救護班在りて四月六日迄救護に從事せしが當時勤務せる看護婦の內三名と共に引繼を受け四月七日開所したり初め該村小學校（吉原村字安）の一部を假用したりしが後同校構內に建坪七坪餘の「バラック」を建設して四月十二日移轉せり。

四月三十日の整理に依り河邊救護所附たりし看護婦を轉補して愛知支部の看護婦交代歸還せしめ、五月十五日迄治療を繼續して閉所す此間治療したる患者實數二百十五名、治療日數千四百五十八日なり。

職員表

着任月日	轉出月日	職	氏名	摘要
四月二日	四月三十日	醫員	岩田 清臣	三月三十一日、四月一日ノ二日ハ峰山收容所ヨリ醫員ヲ派遣セリ
三月廿一日	同	看護婦	鎌田 ミツ	宮津ヨリ入リ吉原ヘ轉出
同	同	同	土井ユキヨ	
同	同	同	西川 美惠	

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
四月八日	二五	同九日	二七	同十日	二六
同十一日	三四	同十二日	二九	同十三日	三〇
同十四日	三七	同十五日	二一	同十六日	三九
同十七日	三一	同十八日	二六	同十九日	二七
同二十日	三四	同二十一日	二〇	同二十二日	三〇
同二十三日	三一	同二十四日	三一	同二十五日	二九
同二十六日	二八	同二十七日	五〇	同二十八日	四九
同二十九日	二八	同三十日	一七	五月一日	二五
同二日	二二	同三日	二二	同四日	二四
同五日	二三	同六日	二〇	同七日	一六
同八日	二三	同九日	一七	同十日	二五
同十一日	二五	同十二日	二六	同十三日	一七
同十四日	二〇	同十五日	一六		

タ 河邊救護所

本所は本村役場の一部を借用して三月三十一日開所し、救護員の宿所に隣家橋長左衞門の裏家を使用せり震災直後には京都府より出張の救護班へ援助の爲め、第三班として出動せしめたる看護婦が三月三十日迄滯留したる處なりしが、罹災患者漸次減少したるに依り四月三十日閉所せるが、醫員は歸還し看護婦は更に吉原救護所へ轉補せり、此間治療したる患者實數三百五十四名、治療日數二千二百五日なり。

職員表

着任月日	轉出月日	職	氏名	摘要
四月二日	四月三十日	醫員	岩田 清臣	三月三十一日、四月一日ノ二日ハ峰山收容所ヨリ醫員ヲ派遣セリ
三月廿一日	同	看護婦	鎌田 ミツ	宮津ヨリ入リ吉原ヘ轉出
同	同	同	土井ユキヨ	
同	同	同	西川 美惠	

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月三十一日	七	四月一日	二二	同二日	二三
同三日	三〇	同四日	二二	同五日	三〇
同六日	二八	同七日	三二	同八日	三一
同九日	四〇	同十日	二七	同十一日	二七
同十二日	三九	同十三日	三四	同十四日	三六
同十五日	二三	同十六日	三五	同十七日	二二
同十八日	二七	同十九日	三二	同二十日	二三
同二十一日	二一	同二十二日	三〇	同二十三日	三〇
同二十四日	二九	同二十五日	二一	同二十六日	三四
同二十七日	四八	同二十八日	四四	同二十九日	五四
同三十日	〇				

レ 島津救護所

本所は本村主要部全燒に付初め字島溝川小字仲ノ町二九三一番地の一の小高き場所に、天幕二個を連ね三月二十六日開所したるが、市場、口大野と同じく十一坪餘の「バラック」を同村小字棒ケ崎春日神社境內に建設して四月十二日移轉せり、三月三十一日隣村島取救護所開設のため配屬看護婦二名を同所へ轉せしめ、四月本社病院より派遣の看護婦到着に付、四月七日滋賀支部派遣のものと交代す。

四月三十日島取救護所の閉所に伴ひ之を兼擔し、五月十五日醫長を廢し、同三十一日閉鎖し以後網野收容所より隔日往診せしめたり、此間救護したる患者實人員八百九名、治療日數四千六百六十一日なり。

職員表

着任月日	轉出月日	職	氏名	摘要
三月廿六日	五月廿一日	醫長	小谷 利長	
同	同	交代員	野村恒一、水野忠、本多義也、倉前貞、谷田重三郎、土屋良恭	
同	三月廿一日	看護婦	渡邊 貴美	支部召集、鳥取ヘ
同	同	同	岡村 ゆり	
同	四月七日	同	中島 よね	滋賀支部派遣、歸還
同	同	同	岡田 やゑ	同
同	同	同	水本よしえ	同
同	同	同	太田 千代	同
同	四月六日	同	武立 久夫	同
同	同	同	林 マツコ	同 宮津ヘ、七日宮津ヨリ歸還

着任月日	轉出月日	職	氏 名	摘 要
四月七日	五月十六日	同	酒井 はな	
同	同	同	伊藤 トミ	本社病院ヨリ、峰山ヘ
同	同	同	林 たつよ	
同	同	同	水野 愛	
同	同	同	山際 際	
同	同	同	畠 富美惠	
五月十五日	五月卅一日	同	公原 米子	市場ヨリ入、網野ヘ
同	同	同	岡田 まつ	
同	同	同	中川 仲	

日別取扱患者表

月 日	患者數	月 日	患者數	月 日	患者數
三月二十七日	六七	同 二十八日	六二	同 二十九日	五九
同 三十日	七〇	同 三十一日	七〇	四月一日	一二三
同 二日	一二一	同 三日	八六	同 四日	五六
同 五日	六二	同 六日	七二	同 七日	四七
同 八日	五一	同 九日	六一	同 十日	五八
同 十一日	四二	同 十二日	五〇	同 十三日	六七
同 十四日	五〇	同 十五日	二四	同 十六日	七五
同 十七日	五七	同 十八日	七〇	同 十九日	六四
同 二十日	六二	同 二十一日	六二	同 二十二日	八二
同 二十三日	七四	同 二十四日	七〇	同 二十五日	八二
同 二十六日	六九	同 二十七日	七四	同 二十八日	七三
同 二十九日	五九	同 三十日	六七	五月一日	五二
同 二日	六三	同 三日	五六	同 四日	六三
同 五日	六〇	同 六日	五八	同 七日	五五
同 八日	五八	同 九日	五〇	同 十日	六七
同 十一日	六四	同 十二日	四六	同 十三日	四三
同 十四日	二〇	同 十五日	三三	同 十六日	三一
同 十七日	五八	同 十八日	三三	同 十九日	四九
同 二十日	五〇	同 二十一日	四四	同 二十二日	三七
同 二十三日	四三	同 二十四日	三〇	同 二十五日	四八
同 二十六日	四一	同 二十七日	五五	同 二十八日	五三
同 二十九日	六七	同 三十日	五一	同 三十一日	二六
六月一日	〇	同 二日	二一	同 三日	〇
同 四日	二七	同 五日	〇	同 六日	二三
同 七日	〇	同 八日	三〇	同 九日	〇
同 十日	三九	同 十一日	〇	同 十二日	五九

ソ鳥取救護所

本所は神奈川縣支部救護班駐在の後を引繼ぎ、本村字鳥取小字岩鼻二三五〇番地に在る區有公會堂を借受け、三月三十一日島津救護所より看護婦二名を轉補して開設し、四月三十日閉所後五、月十五日迄島津救護所より往診せしめたり、此間救護したる患者實人員三百三十二名、治療日數二千六百八十三日なり。

職員表

着任月日	轉出月日	職	氏 名	摘 要
三月卅一日	四月三十日	醫員	梅田 馨吉	竹野郡醫師會推薦
同	四月十七日	看護婦	岡村 ゆり	島津ヨリ入、歸還
同	同	同	濱邊 貴美	同岩瀧ヘ
四月二日	五月一日	同	二村 ミキ	岩瀧ヘ
四月九日	同	同	中島 壽子	療院ヨリ入、再ヒ療院ヘ

五月十一日	六四	同 十二日	四六	同 十三日	四三
同 十四日	二〇	同 十五日	三三	同 十六日	三一
同 十七日	五八	同 十八日	三三	同 十九日	四九
同 二十日	五〇	同 二十一日	四四	同 二十二日	三七
同 二十三日	四三	同 二十四日	三〇	同 二十五日	四八
同 二十六日	四一	同 二十七日	五五	同 二十八日	五三
同 二十九日	六七	同 三十日	五一	同 三十一日	二六
六月一日	〇	同 二日	二一	同 三日	〇
同 四日	二七	同 五日	〇	同 六日	二三
同 七日	〇	同 八日	三〇	同 九日	〇
同 十日	三九	同 十一日	〇	同 十二日	五九

四月十七日	同	同	深谷シマ子	郷附ヨリ入、歸還
同	同	同	左合ミサ子	同
同	同	同	伊藤 コノ	郷ヨリ入峰山ヘ

日別取扱患者表

月 日	患者數	月 日	患者數	月 日	患者數
三月三十一日	二五	四月一日	五〇	同 二日	二四
同 三日	五〇	同 四日	二五	同 五日	四一
同 六日	四六	同 七日	七二	同 八日	五六
同 九日	六〇	同 十日	六三	同 十一日	四七
同 十二日	五三	同 十三日	三七	同 十四日	六六
同 十五日	一三	同 十六日	六六	同 十七日	五四
同 十八日	四三	同 十九日	五七	同 二十日	五一
同 二十一日	五〇	同 二十二日	四六	同 二十三日	五六
同 二十四日	五九	同 二十五日	四九	同 二十六日	四三
同 二十七日	二三	同 二十八日	五一	同 二十九日	六五
同 三十日	〇	五月一日	三〇	同 二日	二二
同 三日	〇	同 四日	〇	同 五日	〇
同 六日	二二	同 七日	二〇	同 八日	一五
同 九日	〇	同 十日	二〇	同 十一日	〇
同 十二日	二〇	同 十三日	二二	同 十四日	二一

ツ鄉救護所

本村の救護所は吉原と同じく愛知支部撤退の後を引繼ぎ、村内鐵道省建築事務所を借用して四月七日開所せしが、後同村字高橋小字大滿七番地に七坪餘の「バラック」を建築し、四月十四日頃移轉せり。

本所の救護員は網野收容所より派置し（四月十七日迄は愛知支部より引繼ぎたる三名の看護婦從事す）六月十五日迄繼續せり、此間に治療したる患者實人員三百十三名、治療日數二千七百六十八日なり。

日別取扱患者表

月 日	患者數	月 日	患者數	月 日	患者數
四月八日	三二	同 九日	二〇	同 十日	二一
同 十一日	一八	同 十二日	二〇	同 十三日	二五
同 十四日	三六	同 十五日	一七	同 十六日	三六
同 十七日	二二	同 十八日	三三	同 十九日	二九
同 二十日	二三	同 二十一日	三三	同 二十二日	三五
同 二十三日	四一	同 二十四日	二八	同 二十五日	二一
同 二十六日	三七	同 二十七日	二四	同 二十八日	三七
同 二十九日	四二	同 三十日	二七	五月一日	三八
同 二日	二五	同 三日	二九	同 四日	〇
同 五日	五二	同 六日	〇	同 七日	四四
同 八日	四四	同 九日	五三	同 十日	〇
同 十一日	三三	同 十二日	〇	同 十三日	三四
同 十四日	〇	同 十五日	三九	同 十六日	〇
同 十七日	四一	同 十八日	〇	同 十九日	四二
同 二十日	〇	同 二十一日	五三	同 二十二日	〇
同 二十三日	四七	同 二十四日	〇	同 二十五日	〇
同 二十六日	三四	同 二十七日	〇	同 二十八日	四六
同 二十九日	〇	同 三十日	三三	同 三十一日	〇

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
六月一日	三六	同二日	〇	同三日	三〇
同七日	五七	同九日	二〇	同十日	〇
同十一日	一七	同十五日	二七		

ネ 木津救護所

本所は木津村字木津小字三宅谷三十七番地に設けられたる隔離病舍を假用して治療所となし宿舍を同村旅館花月樓に定め三月二十七日より開所、濱詰村の救護を兼務せるが四月三十日を以て閉鎖せり、取扱ひたる患者實人員二百五名、治療日數千四十九日なり。

職員表

着任月日	轉出月日	職	氏名	摘要
三月廿六日	三月廿一日	醫員	藤森鵬龜藏	三月二十五日丹波へ配置セルモ同村ノ事情ニ依リ就職變更
三月廿一日	同	醫員	坪井孝太郎	竹野郡師醫會推薦、濱詰村醫
同	四月三十日	看護婦	松任 叶	同 五月一日市場へ
同	廿六日	同	岡田 まつ	同

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月二十七日	一	同二十八日	二四	同二十九日	三一
同三十日	三五	同三十一日	二	四月一日	一九
同二日	一〇	同三日	二〇	同四日	七
同五日	一〇	同六日	七	同七日	〇
同八日	七	同九日	二二	同十日	二六
同十一日	二四	同十二日	二五	同十三日	二九
同十四日	三〇	同十五日	二八	同十六日	二四
同十七日	一九	同十八日	三四	同十九日	三八
同二十日	三二	同二十一日	三三	同二十二日	四〇
同二十三日	四〇	同二十四日	四五	同二十五日	三七
同二十六日	二五	同二十七日	三二	同二十八日	三一
同二十九日	四六	同三十日	〇		

ナ 磯救護所

磯は濱詰村の一部落なるが役場所在地と隔絕せる上、被害激甚而も交通不便にして應急救護不徹底なりしを以て、特に民家の一部を利用し三月二十六日より治療を開始せり、然れども比較的網野收容所に接近し海上交通の便利あり、而して出張の醫員は更正第七班として派遣したるものなりしも、四月二日歸還せるに依り別に救護員を置かず同所より兼務往診せしめ、五月三十一日を以て閉所せり、此間治療したる患者實人員八十二名、治療日數四百十四日なり。

日別取扱患者表

月日	患者數	月日	患者數	月日	患者數
三月二十六日	三一	同二十七日	三〇	同二十八日	一八
同二十九日	一五	同三十日	一四	同三十一日	一九
四月一日	一二	同二日	一二	同三日	〇
同四日	〇	同五日	〇	同六日	〇
同七日	〇	同八日	〇	同九日	〇
同十日	一五	同十一日	〇	同十二日	一八
同十三日	〇	同十四日	〇	同十五日	〇
同十六日	二四	同十七日	〇	同十八日	〇

四月十四日	三〇	同十五日	二八	同十六日	二四
同十七日	一九	同十八日	三四	同十九日	三八
同二十日	三二	同二十一日	三三	同二十二日	四〇
同二十三日	四〇	同二十四日	四五	同二十五日	三七
同二十六日	二五	同二十七日	三二	同二十八日	三一
同二十九日	四六	同三十日	〇		

四月十九日	二〇	同二十日	〇	同二十一日	〇
同二十二日	二一	同二十三日	〇	同二十四日	〇
同二十五日	一七	同二十六日	〇	同二十七日	〇
同二十八日	一四	同二十九日	〇	同三十日	〇
五月一日	〇	同二日	〇	同三日	〇
同四日	〇	同五日	〇	同六日	一四
同七日	〇	同八日	〇	同九日	〇
同十日	一九	同十一日	〇	同十二日	〇
同十三日	〇	同十四日	〇	同十五日	〇
同十六日	一三	同十七日	〇	同十八日	〇
同十九日	〇	同二十日	〇	同二十一日	〇
同二十二日	二一	同二十三日	〇	同二十四日	〇
同二十五日	〇				

以上各收容所救護所平面圖別紙の如し

第五章 委托患者

前記の如く震災地に於て、二十ケ所の救護機關を設け徹的底に治療を加へたりと雖も、之に先だつて重傷患者は其生死を憂慮し汽車便に依り續々上洛し、京都帝國大學附屬醫院、京都府立醫科大學附屬病院及當支部療院等に收容したるが、十二月二十日を以て結末せしめたり、患者實人員五十名、治療日數三千百四十三日にして其概況左の如し

イ 京都帝國大學附屬醫院

本院へ入院希望の重傷患者踵を接したるも、而かも各病室滿員にして收容の餘地なかりしが、當局は非常の同情を以て研究室を假用して之に充當し、而かも全部給費を以て入院せしめたり、然るに四月一日以後經費の都合を以て當支部に交涉ありたるを以て、同日以降此等患者の入院料並に附添人費用は全部支部費を以て支辨することゝなせり、今四月一日より治療したる患者實數を擧ぐるときは三十名にして、治療日數千八百四十三日に達せり、收容患者左表の如し。

傷病名	住所	氏名	年齡
左上膊複雜骨折	中郡 吉原村	上羽 龍光	二九
同	峰山町	松下 泰夫	一九
左大腿骨折	兵庫縣養父郡八鹿町	野垣 米造	六五
左胸部 打撲傷	竹野郡濱詰村	山松 鍛治	三九
外傷性兩膝關節炎	同 網野町	柴田 重久	三
左足外傷性壞疽	與謝郡市場村	太田 國三	一〇
第三度火傷	中郡 峰山町	飯井善次郎	四四
左手指挫創	竹野郡網野町	森田 利蓁	七
左側下肢第三度火傷	同 鳥取村	山副 保治	不詳
兩手挫創	中郡吉原村	古川 貞雄	一二
左足挫創	竹野郡網野町	吉田六郎左衞門	五五
兩下肢挫創	中郡 峰山町	松下 壽子	一一
右大腿骨折	同	松下 孝子	一〇
左大腿骨折	同	馬場 みつ	二五
左上顎骨折	同 吉原村	古川 はつ	四四
左大腿骨折	同	古川 けい	一九
左頸部淋巴線結核	同	坂根佐一郎	三六
右大腿骨々折	竹野郡島津村	梅田 テル	二二
頭蓋骨複雜骨折	中郡吉原村	糸井 つね	三二
下腿骨折	同	中村寅十郎	五七
右肘關節部挫傷兼骨膜炎			

肺結核	竹野郡島津村	内田正二郎	二二
右側濕性肋膜炎	同 濱詰村	井末マサ	二〇
喇叭管膿腫	中郡丹波村	沖 靜枝	一九
右手惑染創傷	同 吉原村	梅田 武	二三
右大腿骨並脛骨皮下骨折	同 丹波村	田中錬太郎	五三
顔面惑染創傷	與謝郡山田村	小長谷市藏	三九
右股關節脱臼	同 岩瀧町	小川芳太郎	二七
骨盤骨折	中郡丹波村	田中千壽子	二一
下顎骨複雜骨折	同 峰山町	安達てる	一二
外傷性坐骨神經不完全痲痺	同 吉原村	上羽はな	五二

備考 本表中松下泰夫は未治の儘學用患者の取扱ひとなる、他は悉く治癒若は輕快退院したり

ロ 府立醫科大學附屬病院

本院にも續々患者入院せしが、本院は之を各病室に分布し懇切に治療を加へたり、然るに六月十五日震災救護療院閉鎖以後後遺患者を本院に委託し、同患者の入院料及附添費用全部支部費を以て支辨せり、患者實數八名、治療日數七百八十二日なりとす、收容患者左の如し。

左大腿骨折切斷後手術創	中郡口大野村	長谷川よね	四五
左大腿骨頭部骨折骨盤骨折	竹野郡郷村	松井きぬ	四三
左下腿骨々折	與謝郡岩瀧町	水戸はる	二一
前頭部骨折	同	楠田とら	三〇
骨盤骨々折及腰部挫創	同	糸井くら	一七
腰推骨折	竹野郡島津村	内田駒次	二五
左下腿切斷後手術創	與謝郡山田村	小卷鐵夫	三八
腰部打撲、尿閉	同	長島市藏	四七

備考 右の内内田駒次は死亡し、松井きぬ、長島市藏は尚若干日治療を要するを以て其儘學用患者として取扱を受くることゝなれり

ハ 日本赤十字社京都支部療院

本院にも入院したる患者少からず、特に深更收容を願出たるものありしが、固より支部當然の任務なるを以て直に收容し徹宵手術を加へたり、實に醫員看護婦の勞苦甚大なりとす本院に收容したる患者實人員十一名、治療日數三百六十五日にして五月二十四日を以て終了せり、患者氏名左の如し。

右大腿骨折	中郡口大野村	松岡きぬえ	二一
頭部切創	同	柴崎安雄	二四
腰部挫傷	同 丹波村	山本もと	四五
頭部切創	同 峰山町	河田あい	三八
右下腿骨折	同	平井きぬ	三八
左下腿切創	同	高田米治	二四
頭部切創	同 常吉村	堀口はつ	一七
同	竹野郡網野町	平ノアヱ	一六
右大腿骨々折	與謝郡市場村	坂根佐一郎	三六
右尺骨撓骨々折	中郡峰山町	中道亀久治	二八
骨盤骨折	同 丹波村	田中千壽子	二一

備考 坂根佐一郎及田中千壽子は京大醫院へ送院し其他は悉く治癒退院したり

ニ 日本赤十字社滋賀支部病院

以上の外、震災以前より肺結核症を以て本院に入院せるもの一名は(峰山町吉見昭一)罹災地の住民にして、扶養者非常の災害を被りたる關係上、本院よりの交渉に依り七月一日より支部費を以て入院料を支辨せるが、十一月三十日結尾を告げたり、此の治療日數百五十三日なりとす。

第六章 其他の救護

傷病者の救護は前述の如く遺漏なく施行したりと雖も、當支部は尚不幸者あるを察し、徹底的に罹災者を救護するの目的を以て、更に牛乳配給及養育料補助の方法を樹て救恤したり、其の概要左の如し。

イ 牛乳配給

奥丹後の震災は實に突發激烈にして、老幼の別なく驚愕し特に婦人は感激に鋭敏なるを以て、母乳の中止せるもの少からず。本府は之が救濟の應急施設として、駐在所巡査をして牛乳若くば牛酪を配給せしめたりしが、四月十日以降全然之を當支部にて擔當し、左記要領を以て分區長より施與せしめ、十一月を以て結了せり。

記

一、幼兒一人に供與する牛乳は一日三合以内とす。

一、牛乳は配達費を合して一合拾錢以内とす、若し拾錢にて求め難きときは供與量を減額せられたし。

一、生牛乳を得難き地方に在りては、右に準じ「コンデンスミルク」を供與せられたし。

一、供與の期間は幼兒の健康常態に復し、牛乳不用を待つて中止すべしと雖も最長六ケ月を限度とす。

斯の如くして施行以來給與せし幼兒數左記六十八名にして、給與額合計金貳千壹圓五拾六錢なり

牛乳配給表

期間	配給量	配給金額	住所	保護者氏名	兒童氏名	年齢
自四月十日至四月三十日	一人一日三合	六、三〇	中郡奥大野村	家原正次	家原遠	二歳
同	同	六、三〇	同	安田富藏	安田なえの	二歳
同	同	六、三〇	同	増田一郎	増田富枝	二歳
同	同	六、三〇	同	川口石松	川口球子	三歳
同	同	六、三〇	同	伊藤きよ	伊藤梅野	三歳
同	同	六、三〇	同	川口良藏	川口弘雄	三歳
自五月一日至十月九日	同	四八、六〇	中郡周枳村	川村音藏	川村儀一	二歳
自四月十日至十月九日	同	五四、〇〇	中郡吉原村	佐久間辨治	佐久間悌治	二歳
自四月十日至五月九日	同	九、〇〇	同	尾崎恒治	尾崎百合子	二歳
自四月十日至八月七日	同	三六、〇〇	同	田中周治	田中松枝	三歳
自四月十日至八月七日	同	三六、〇〇	同	梅田重助	梅田源治	三歳
同	同	三六、〇〇	同	中西廣吉	中西知自	二歳
自四月十日至五月九日	同	九、〇〇	同	中西清太郎	中西幸一	二歳
自四月十日至八月七日	同	三六、〇〇	同	中村榮次郎	中村信重	三歳

同	同	五四、〇〇	同	中村	清治	中村	良一	三歳
自四月十日至五月卅一日	コンデンスミルク一個二日分ノ割	一五、五〇	中郡丹波村字石丸	梅田	清次	梅田	ゆき	二歳
同	同	一五、五〇	同字矢田	池田	良次	池田	勝	二歳
同	同	一五、五〇	同	室田仲右衛門		室田	光義	三歳
同	同	一五、五〇	同字橋本	門中	三治	門中	齊	三歳
同	同	一五、五〇	同	沖	清三郎	沖	撥益	三歳
同	同	一五、五〇	同	沖	英志	沖	ヨシミ	三歳
同	同	一六、〇〇	同	阿部	勘次	阿部	静枝	三歳
同	同	一五、五〇	同字赤坂	中西	繁藏	中西	惠子	三歳
同	同	一五、五〇	同	小北	岩吉	小北	幸子	三歳
同	同	一六、〇〇	同	田中	徳治	田中	光枝	三歳
同	同	一六、〇〇	同	田中源次郎		田中	宏	三歳
同	同	一五、五〇	同	長砂	廣吉	長砂きみ子		三歳
同	同	一六、〇〇	同	吉岡	益衛	吉岡	清次	三歳
同	同	一五、五〇	同	山川鐵次郎		山川登志枝		二歳
同	同	一五、五〇	同	小北虎太郎		小北	つえ	三歳
同	同	一六、〇〇	同	長砂	龜次	長砂健之助		三歳
同	同	一五、五〇	同	梅原孝太郎		梅原	義郎	三歳

同	同	一五、五〇	同	田中	フサ	田中	美優	三歳
同	同	一五、五〇	同	山本	德次	山本	敏子	二歳
同	同	一五、五〇	同	田中	松治	田中	喜一	三歳
同	同	一五、五〇	同字舟波	川口	岩三	川口シズ子		三歳
自四月十日至十月九日	一人一日三合	五四、六〇	竹野郡島取村	坪倉喜代藏		坪倉	道雄	二歳
同	同	五四、六〇	同	木村	利治	木村	重武	一歳
自四月十二日至六月三十日	同	三三、一五	與謝郡加悦町	小牧	治	小牧	昭	一歳
自四月十二日至九月三十日	同	五二、六〇	竹野郡島津村	大垣	富藏	大垣	龜治	一歳
同	同	五二、六〇	同	糸井久之助		糸井	信男	一歳
同	同	五二、六〇	同	矢谷	勝治	矢谷	虎雄	二歳
同	同	五二、六〇	同	松尾忠一郎		松尾	愛子	二歳
同	同	五二、六〇	同	矢谷	重明	矢谷	鮎治	二歳
自四月廿二日至六月十四日	コンデンスミルク一個チ二、三、四日分トス	三三、五九	與謝郡山田村	長島清太郎		長島良一郎		二歳
自四月廿二日至八月五日	同	三三、五九	同	安見	竹治	安見	治	二歳
同	同	三三、五九	同	荻野宇之助		荻野	義雄	二歳
同	同	三三、五九	同	加畑伊之助		加畑	義一	二歳
同	同	三三、五九	同	牛田	傳吉	牛田	ミヨ	二歳
同	同	三三、五九	同	鹽見	竹治	鹽見	力吉	一歳

自五月三日至八月五日	同	二〇、二一	同	白數	なか	白數	令子	
自四月廿五日至九月二十日	一日一人三合	四三、九二	中郡峰山町	小林	助十	小林	昭	
同	同	四三、九二	同	川戸	虎吉	川戸	久良	二歳
自五月十日至十月九日	同	四五、〇〇	中郡吉原村字新治	安達	義朝	安達	正一	二歳
自六月一日至十月廿一日	同	四五、〇〇	中郡周枳村	松村	德藏	松村	一明	二歳
自九月十八日至十月七日	コンデンスミルク一個二日間トス	四、三〇	與謝郡山田村	小長谷重吉		小長谷利一		
自四月廿三日至十月十九日	一人一日三合	五四、〇〇	竹野郡網野町	高尾	光藏	高尾	明雄	一歳
同	同	五四、〇〇	同	松村義之助		松村よしの		一歳
同	同	五四、〇〇	同	義村	光義	義村	秀光	
同	同	五四、〇〇	同	安井	富造	安井	惠子	一歳
自四月廿三日至八月四日	同	三一、二〇	同	若狹	源藏	若狹	清子	一歳
自四月廿三日至十月十九日	同	五四、〇〇	同	向井	作治	向井	正和	
同	同	五四、〇〇	同	山本	勘治	山本	愛子	二歳
同	同	五四、〇〇	同	谷口龜治郎		谷口よしふ		二歳
同	同	五四、〇〇	同	松本	長藏	松本	長治	四歳
同	同	五四、〇〇	同	平	熊藏	平	毅	一歳
同	同	五四、〇〇	同	鹽西信太郎		鹽西	安信	一歳
自八月十日至十月十九日	同	三、三〇	同	前田	佐藏	前田	廣	

第六章　其他の救護

口　養育料補助

震災に付不幸にして兩親を失ひたる孤兒を生じ、又孤兒とならざるも生計困難にして養育し得ざる保護者あり、當支部は之を救濟するが爲め、分區長に照會して調査し、其程度如何を參酌して一ケ月九圓乃至貳拾圓の養育料を給與し、保護者若くは親戚の希望に依りては里子若くは養子に差遣する仲介の勞をも執るべく計畫を定め養育料を支給せるが、左記の如く其兒數十八名にして給與金額合計壹千貳拾九圓なり。

養育料補給表

期間	補給金額	住所	保護者氏名	兒童氏名	年齢
一ケ月補給額	九、〇〇	中郡奥大野村	伊藤　きよ	伊藤　梅野	三歳
自四月至九月	九、〇〇	與謝郡石川村	浪江與之助	浪江千鶴子	一歳
自六月至十一月	二〇、〇〇	中郡峰山町	中西　峰藏	中西百合子	四歳
同	五四、〇〇	同	同　中西　巳義		一歳
同	九、〇〇	竹野郡郷村	吉岡　より	吉岡えつ子	二歳
同	五四、〇〇	同	山下　よれ	山下　政芳	七歳
同	九、〇〇	同	沖野　源藏	沖野　京一	四歳
同	五四、〇〇	同	森岡　彌藏	森岡みつえ	五歳

総合共運眼	疾病傷外	神経系統疾患	呼吸器疾患	循環器疾患	消化器疾患	伝染病	皮膚病	花柳病	合計
動									
器									
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自三月十五日至三月十八日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自三月十九日至三月二十五日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自三月二十六日至四月一日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自四月二日至四月八日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自四月九日至四月十五日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自四月十六日至四月二十二日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自四月二十三日至四月二十九日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自五月一日至五月七日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自五月八日至五月十四日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自五月十五日至五月二十一日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自五月二十二日至五月二十八日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自五月二十九日至六月四日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自六月五日至六月十一日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年自六月十二日至六月十八日									
男	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一

病類	患者數 男	患者數 女	治療日數 男	治療日數 女	治癒 男	治癒 女	死亡 男	死亡 女	未治歸宅 男	未治歸宅 女	他ノ病院ヘ轉送 男	他ノ病院ヘ轉送 女	引渡 男	引渡 女
榮養器病	三	二	七	四	—	—	—	—	三	二	—	—	—	—
眼病	二	—	三	—	—	—	—	—	二	—	—	—	—	—
運動器病	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
其他	三	七	四	一四	—	—	—	—	三	七	—	—	—	—
合計	一三	一一五	一二〇	一三六	—	—	—	—	一〇三	一一五	—	—	—	—
總計		二一七		二五六		—		—		二一七		—		—

昭和二年 自二月八日至三月十六日 病類別患者表

（京都支部第四班）

外傷	七〇	九四	九〇	一二三	—	—	—	—	七〇	九四	—	—	—	—
傳染病 入種傳染病	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
傳染病 其他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
神經系病	二	四	四	八	—	—	—	—	二	四	—	—	—	—
呼吸器病	二一	三〇	四二	六〇	—	—	—	—	二一	三〇	—	—	—	—
循環器病	二	三	四	六	—	—	—	—	二	三	—	—	—	—
榮養器病	一九	二四	三八	四七	—	—	—	—	一九	二四	—	—	—	—
眼病	二	三	二	四	—	—	—	—	二	三	—	—	—	—
運動器病	一	二	二	四	—	—	—	—	一	二	—	—	—	—
其他	八	六	一四	一〇	—	—	—	—	八	六	—	—	—	—
合計	一二五	一六六	一九六	二五一	—	—	—	—	一二五	一六六	—	—	—	—
總計		二九一		四三七		—		—		二九一		—		—

昭和二年 自二月八日至三月二十二日 病類別患者表

（京都支部第五班）

外傷	八七	一二一	一三七	二一三	三	三一	—	—	七五	九〇	—	—	—	—
傳染病 入種傳染病	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
傳染病 其他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
神經系病	二	二	四	四	—	—	—	—	二	二	—	—	—	—
呼吸器病	二一	一八	三七	三二	二	二	—	—	一九	一六	—	—	—	—
循環器病	一	—	二	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—
榮養器病	二〇	一七	三〇	三一	二	三	—	—	一八	一四	—	—	—	—
眼病	一	二	三	三	—	—	—	—	一	二	—	—	—	—
運動器病	一	—	一	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—
其他	四	四	五	八	—	—	—	—	四	四	—	—	—	—
合計	一三七	一六四	二一九	二九一	一六	三六	—	—	一三一	一二八	—	—	—	—
總計		三〇一		三一〇		三二		—		二四九		—		—

昭和二年 自二月九日至三月十四日 病類別患者表

（京都支部第六班）

外傷	一三九	一一四	一四二	一一四	—	—	一	一	一三八	一一三	—	—	—	—
傳染病 入種傳染病	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
傳染病 其他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
神經系病	—	二	—	四	—	—	—	—	—	二	—	—	—	—
呼吸器病	七	九	一四	一八	—	—	—	—	七	九	—	—	—	—
循環器病	一	二	二	四	—	—	—	—	一	二	—	—	—	—
榮養器病	八	一〇	一六	二〇	—	—	—	—	八	一〇	—	—	—	—
眼病	—	二	—	四	—	—	—	—	—	二	—	—	—	—
運動器病	—	一	—	二	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—
其他	一	五	二	九	—	—	—	—	一	五	—	—	—	—
合計	一五六	一四五	一七六	一七五	—	—	一	一	一五六	一四五	—	—	—	—
總計		三〇一		三五一		—		二		二九九		—		—

昭和二年 自二月十日至三月十六日 病類別患者表

（京都支部第七班）

外傷	一〇一	一一三	一二七	一五九	—	—	—	—	一〇一	一一三	—	—	—	—

昭和二年三月十六日病類別患者表

（京都支部第八班）

病類	計	男	女
總合其他眼疾徇呼神病染傳外	一三五	一一八	一七
動器器器系其他病	一一	一一	
動器器器系結核病	一一	一一	
動器器器系傳染病	一一	一一	
養環吸經其他病	一一	一一	
養環吸經結核病	一一	一一	
養環吸經傳染病	一一	一一	
計他病病病病傷	一一	一一	

患者數	男	女
一三五	一一八	一七
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

治癒日數	男	女
一〇八	一〇一	七
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

死亡	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

未治癒	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

他ノ病院ヘ轉送	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

引取	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

昭和二年三月十六日病類別患者表

（京都支部第九班）

病類	計	男	女
總合其他眼疾徇呼神病染傳外	一一〇	一一	
動器器器系其他病	一一	一一	
動器器器系結核病	一一	一一	
動器器器系傳染病	一一	一一	
養環吸經其他病	一一	一一	
養環吸經結核病	一一	一一	
養環吸經傳染病	一一	一一	
計他病病病病傷	一一	一一	

患者數	男	女
一一〇	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

治癒日數	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

死亡	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

未治癒	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

他ノ病院ヘ轉送	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

引取	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

昭和二年三月十六日病類別患者表

（京都支部第十班）

病類	計	男	女
總合其他眼疾徇呼神病染傳外	一三六	一一	
動器器器系其他病	一一	一一	
動器器器系結核病	一一	一一	
動器器器系傳染病	一一	一一	
養環吸經其他病	一一	一一	
養環吸經結核病	一一	一一	
養環吸經傳染病	一一	一一	
計他病病病病傷	一一	一一	

患者數	男	女
一三六	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

治癒日數	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

死亡	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

未治癒	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

他ノ病院ヘ轉送	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

引取	男	女
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	
一一	一一	

昭和二年五月十九日病類別患者表

（震災救護療院）

病類	総合共遁眠祭循呼神病染傳外												総合	
	動	養環吸経其入種傳染											計	類
	器	器	器	器	系								計	計
	病	病	病	病	病	病	他	傷					計	計
昭和二年五月十五日	六	四	一	一	一		一	一					一	男
	一													女
昭和二年五月十九日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十一日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十二日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十三日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十四日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十五日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十六日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十七日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十八日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十九日	一												一	男
														女
昭和二年五月三十日	一												一	男
														女
昭和二年五月三十一日	一												一	男
														女
昭和二年六月一日	一												一	男
														女
昭和二年六月二日	一												一	男
														女
昭和二年六月三日	一												一	男
														女
昭和二年六月四日	一												一	男
														女
昭和二年六月五日	一												一	男
														女
昭和二年六月六日	一												一	男
														女
昭和二年六月七日	一												一	男
														女
昭和二年六月八日	一												一	男
														女
昭和二年六月九日	一												一	男
														女
昭和二年六月十日	一												一	男
														女
昭和二年六月十一日	一												一	男
														女
昭和二年六月十二日	一												一	男
														女
昭和二年六月十三日	一												一	男
														女
昭和二年六月十四日	一												一	男
														女
昭和二年六月十五日	一												一	男
														女
計	六	四	一	一	一		一	一					一	男
	一													女

備考　一、本表は入院及外來の總計を示す

昭和二年五月十九日病類別患者表

（震災救護療院）

病類	総合共遁眠祭循呼神病染傳外												総合	
	動	養環吸経其入種傳染											計	類
	器	器	器	器	系								計	計
	病	病	病	病	病	病	他	傷					計	計
昭和二年五月十九日	六	四	一	一	一		一	一					一	男
	一													女
昭和二年五月二十日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十一日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十二日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十三日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十四日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十五日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十六日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十七日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十八日	一												一	男
														女
昭和二年五月二十九日	一												一	男
														女
昭和二年五月三十日	一												一	男
														女
昭和二年五月三十一日	一												一	男
														女
昭和二年六月一日	一												一	男
														女
昭和二年六月二日	一												一	男
														女
昭和二年六月三日	一												一	男
														女
昭和二年六月四日	一												一	男
														女
昭和二年六月五日	一												一	男
														女
昭和二年六月六日	一												一	男
														女
昭和二年六月七日	一												一	男
														女
昭和二年六月八日	一												一	男
														女
昭和二年六月九日	一												一	男
														女
昭和二年六月十日	一												一	男
														女
昭和二年六月十一日	一												一	男
														女
昭和二年六月十二日	一												一	男
														女
昭和二年六月十三日	一												一	男
														女
昭和二年六月十四日	一												一	男
														女
昭和二年六月十五日	一												一	男
														女
計	六	四	一	一	一		一	一					一	男
	一													女

備考　一、本表は入院患者の總計を示す

昭和二年五月十九日病類別患者表

（富津收容所）

病類	外傷	総合共遁眠祭循呼神病染傳外												総合	
		動	養環吸経其入種傳染											計	類
		器	器	器	器	系								計	計
		病	病	病	病	病	病	他	傷					計	計
昭和二年五月十九日	六	四	一	一	一		一	一						一	男
	一														女
昭和二年五月二十日	一													一	男
															女
昭和二年五月二十一日	一													一	男
															女
昭和二年五月二十二日	一													一	男
															女
昭和二年五月二十三日	一													一	男
															女
昭和二年五月二十四日	一													一	男
															女
昭和二年五月二十五日	一													一	男
															女
昭和二年五月二十六日	一													一	男
															女
昭和二年五月二十七日	一													一	男
															女
昭和二年五月二十八日	一													一	男
															女
昭和二年五月二十九日	一													一	男
															女
昭和二年五月三十日	一													一	男
															女
昭和二年五月三十一日	一													一	男
															女
昭和二年六月一日	一													一	男
															女
昭和二年六月二日	一													一	男
															女
昭和二年六月三日	一													一	男
															女
昭和二年六月四日	一													一	男
															女
昭和二年六月五日	一													一	男
															女
昭和二年六月六日	一													一	男
															女
昭和二年六月七日	一													一	男
															女
昭和二年六月八日	一													一	男
															女
昭和二年六月九日	一													一	男
															女
昭和二年六月十日	一													一	男
															女
昭和二年六月十一日	一													一	男
															女
昭和二年六月十二日	一													一	男
															女
昭和二年六月十三日	一													一	男
															女
昭和二年六月十四日	一													一	男
															女
昭和二年六月十五日	一													一	男
															女
計	一													一	男
															女

総計

病類	計	他病	結核病	呼吸器病	循環器病	運動器病	外傷
患者	三五	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
昭和二年							
患者	三六	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
自昭和二年							
至昭和二年							
患者	九三	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
昭和二年							
至昭和二年							
患者	一五	一	一	一	一	一	一
救護数	一	一	一	一	一	一	一
昭和二年							
自昭和二年							
至昭和二年							
患者	一	一	一	一	一	一	一
救護数	一	一	一	一	一	一	一

病類	計	他病	結核病	呼吸器病	循環器病	運動器病	外傷
患者	三五	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
昭和二年							
患者	三六	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
自昭和二年							
至昭和二年							
患者	九三	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
昭和二年							
自昭和二年							
至昭和二年							
患者	一五	一	一	一	一	一	一
救護数	一	一	一	一	一	一	一

備考　一、本表は入院患者を示す

総合共通眼疾循呼神病染傳外

病類	計	他病	結核病	呼吸器病	循環器病	運動器病	外傷
患者	三五	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
昭和二年							
患者	三六	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
自昭和二年							
至昭和二年							
患者	九三	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
昭和二年							
自昭和二年							
至昭和二年							
患者	一五	一	一	一	一	一	一
救護数	一	一	一	一	一	一	一

備考　一、本表は入院患者を示す

総合共通眼疾循呼神病染傳外

病類	計	他病	結核病	呼吸器病	循環器病	運動器病	外傷
患者	三五	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
昭和二年							
患者	三六	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
自昭和二年							
至昭和二年							
患者	九三	一	一	一	一	一	一
救護数	三	一	一	一	一	一	一
昭和二年							
自昭和二年							
至昭和二年							
患者	一五	一	一	一	一	一	一
救護数	一	一	一	一	一	一	一

備考　一、本表は入院患者を示す

総計

病類		計	他病	結核病	呼吸器病	循環器病	運動器病	外傷
患者	男	一	一	一	一	一	一	一
	女	一	一	一	一	一	一	一
救護数	男	一	一	一	一	一	一	一
	女	一	一	一	一	一	一	一

昭和二年

病類		計	他病	結核病	呼吸器病	循環器病	運動器病	外傷
患者	男	一	一	一	一	一	一	一
	女	一	一	一	一	一	一	一
救護数	男	一	一	一	一	一	一	一
	女	一	一	一	一	一	一	一

自昭和二年至昭和二年

総合	共	運動器	眼	栄養	循環器	呼吸器	神経系	精神病	他	伝染病	他	外
計												
一												
一												
一